昭和52年8月1日発行(毎月1回1日発行)第9巻第8号　昭和44年12月3日第3種郵便物認可　昭和52年2月15日国鉄首都特別扱承認雑誌第3099号

流動

8月号

The Ryūdō

特集　新左翼20年 激闘の軌跡

創成期から二つの安保を経た
現在までの史的展開

通史300枚

――重要論文抄録・代表的人物36人――

下山事件と戦後史の陥穽　佐藤 一

口絵―カラー
グラビア

＊思考空間・行動空間　秋山駿　宮内勝
〈国境の村〉　勒馬洲　（グラビアも）
帆船そして海　宮本俊裕

天下国家を論じるジーパン論争の質
時代の寵児、これがルポライターだ
好況業界の暗部を暴いた三面記事　39

編集地下室

下山事件と戦後史の陥穽　佐藤一　152
自殺説を科学的に立証した「下山事件全研究」の著者が謀殺説をとる日本共産党、松本清張氏らの戦後史観の欠陥を衝く

特集
新左翼二〇年　激闘の軌跡　46

1 史的展開　通史編纂委員会
＊日本の高度成長期を背景に、スターリン批判・ハンガリー事件をインパクトとして日共から生まれた苦闘の創成期　不動の位置を確保した六〇年安保闘争　分裂と沈滞の六〇年代中期　一〇・八による再生と全国を吹きあれた大学叛乱　本格的武闘の開始と世界への飛翔　内ゲバと混迷　そして三里塚へ……新左翼二〇年間の闘いの軌跡を辿る通史――

序章　新左翼の源流――前史――　48
一章　革共同とブントの結成――創成期――　51
二章　六〇年安保闘争　58
三章　分裂と混迷から日韓へ　64
四章　三派全学連の結成へ――激動の序曲――　71
五章　一〇・八羽田――激動の開始――　76
六章　大学叛乱と全共闘運動　82
七章　七〇年安保闘争　85
八章　本格的武闘の開始とその敗北　90
九章　七〇年代の諸党派　98
別章　フレームアップと治安弾圧　106

2 論文抄録　編集部
＊重要文献でみる新左翼二〇年の思想と戦略の変遷過程

反帝・反スターリン主義　黒田寛一「現代における平和と革命」　120
第一次ブントの思想　共産主義者同盟「全世界を獲得するために」　122
第一次ブントの理論的基礎　姫岡玲治「民主主義的言辞による資本主義への忠勤」　124
解放派の思想　滝口弘人「共産主義―革命的マルクス主義の旗を奪還するために」　126

関西ブントの安保総括　京都府学連「政治過程論」　128
全共闘運動の論理　山本義隆「全国全共闘結成宣言」　130
赤軍派の攻撃型階級闘争論　〝赤軍〟4号「歴史的普遍性の基本テーゼ」　132
連合赤軍の軍事論　統一〝赤軍〟政治宣伝部ビラ　133
中核派の〈対カクマル戦争〉論　〝前進〟七六年新年号　反革命的カクマルの容共反ソ的主義化と純化・完成　134
革マル派の〈党派闘争〉論　〝解放〟七五年新年号「残骸と化した反革命スパイ集団を根絶せよ」　136

3 新左翼を代表する36人

＊新左翼二〇年の栄光と挫折を生きたスターたち

太田竜＊黒田寛一＊西京司＊本田延嘉＊島成郎＊生田浩二＊唐牛健太郎＊山口一理＊北小路敏
樺美智子＊滝口弘人＊江田五月＊松本礼二＊水沢史郎＊大口昭彦＊斎藤克彦＊奥浩平＊山崎博昭
秋山勝行＊藤本敏夫＊味岡修＊山本義隆＊秋田明大＊塩見孝也＊田宮高麿＊重信房子＊森恒夫
永田洋子＊梅内恒夫＊滝田修＊足立正生＊松崎明＊岡本公三＊戸村一作＊小西誠＊荒岱介

〈コラム〉新左翼運動史年表
最近の機関紙から

現地ルポ
毛沢東の遺産＝タンザン鉄道　山川一　166
中国最大の海外援助、アフリカ中部タンザニア――ザンビアを走る鉄道建設の苦難と苦闘の五年八カ月

テーマ随筆
もの書き事始
戦時下の印税　瓜生忠夫
活字のもつ解放感　渡辺武信　186
宿題転じて…　大西赤人

書評
清水多吉著「一九三〇年代の光と影」　草森紳一著「イラストレーション」　マジダ・サルマン セリム・アガウイ著「レバノン内戦記」銃口よ敵は見えたか」　（評者）山泉進　谷川晃一　広河隆一　232

国際問題研究講座
エネルギーと世界経済構造　北沢正雄　192
いま最大の国際的焦点――エネルギー危機の現状を捉えなおし、その解決策を模索する

争名の賦――中国古代の士大夫たち
節を折りて恭倹――王莽（上）　草森紳一　222
不遇な生いたちを逆手にとり、政治宣伝に手腕を発揮し、遂に新の皇帝の座を手に入れた

連作小説〈島〉
聖女流謫　石田郁夫　202
世の移ろいゆくまゝに流されてゆく聖女伝説

がんばれ！アミン＝ウガンダ大統領　編集メモ　238　220

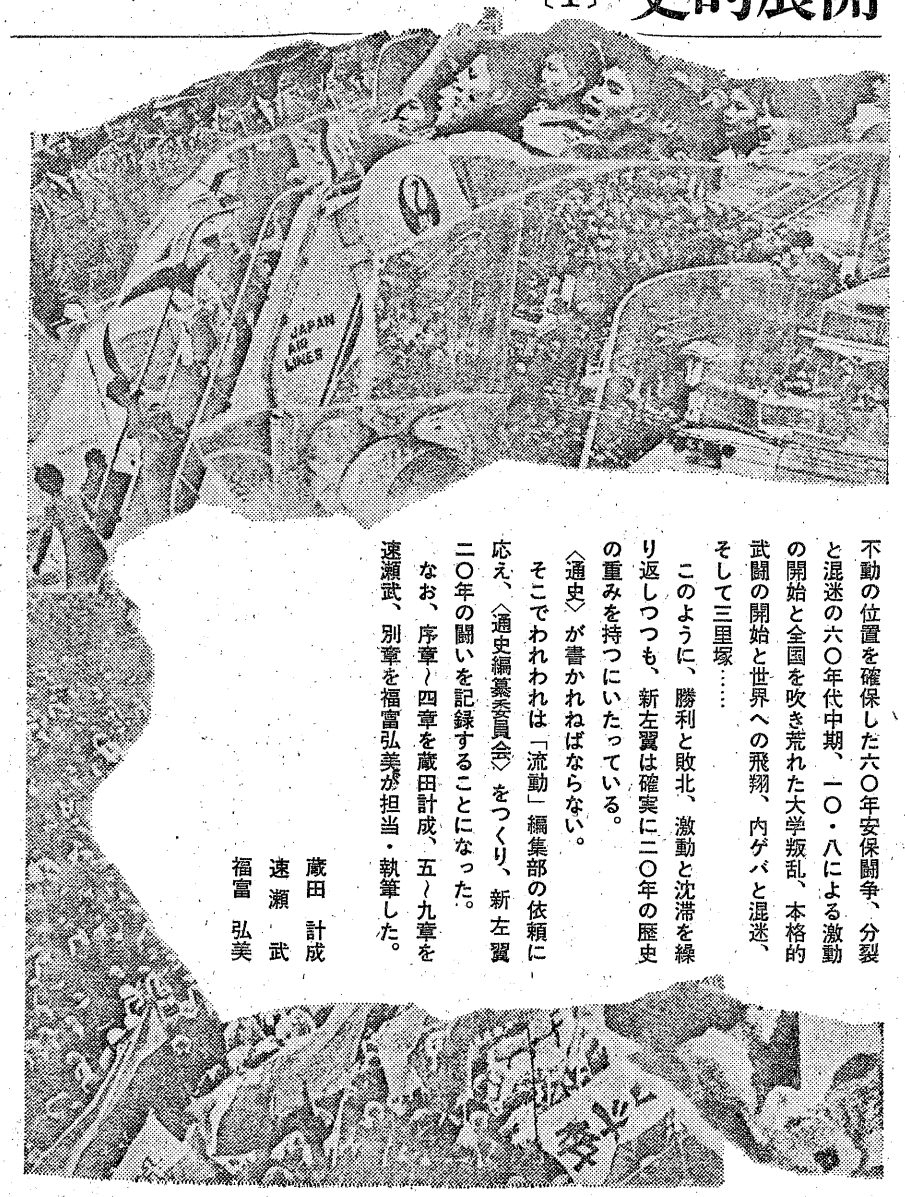
表紙／小谷修一〈雷雲〉
本文カット／赤瀬川原平・井上洋介・澤井憲治・つげ忠男・とよたかずひこ

特集 新左翼20年

〔1〕史的展開

激闘の軌跡

通史編纂委員会



五七年のトロツキスト連盟、革共同の結成、五八年の第一次ブントの結成としてはじまった新左翼運動もおよそ二〇年が経過した。

スターリン批判・ハンガリー事件をインパクトとして日共から生まれた苦闘の創成期、不動の位置を確保した六〇年安保闘争、分裂と混迷の六〇年代中期、一〇・八による激動の開始と全国を吹き荒れた大学叛乱、本格的武闘の開始と世界への飛翔、内ゲバと混迷、そして三里塚……

このように、勝利と敗北、激動と沈滞を繰り返しつつも、新左翼は確実に二〇年の歴史の重みを持つにいたっている。

〈通史〉が書かれねばならない。

そこでわれわれは「流動」編集部の依頼に応え、〈通史編纂委員会〉をつくり、新左翼二〇年の闘いを記録することになった。

なお、序章～四章を蔵田計成、五～九章を速瀬武、別章を福富弘美が担当・執筆した。

蔵田　計成
速瀬　武
福富　弘美

序章　新左翼の源流—前史—

＊

第二次帝国主義戦争の終結による戦後日本の再編は、一方でアメリカ帝国主義による日本ファシズムの解体、非軍事化、ブルジョア民主化政策の遂行としてはじまった。

他方で、戦後日本階級闘争は「解放軍規定＝占領下平和革命論」を掲げた日共と、その指導下にあった産別会議のイニシャティブによってその第一歩を開始し、学生運動もその重要な一翼を担った。例えば、上野高女、水戸高校、東京物理学校、静岡高校における学園民主化闘争を突破口に、闘争は自然発生的な高揚を示し、やがて全国的に波及した。

その後、四七年二・一ゼネスト禁圧を頂点にして、占領＝民主化政策は、反人民的反共強圧政策へと一転した。そのために、戦後階級闘争はこれまでの産別型労働運動から、民同型労働運動へという右傾化を余儀なくされる。しかし、学生運動は教育反動攻勢のまえに一定の後退を強いられつつも、四八年の国立大学授業料値上げと、インフレ生活破壊にたいする闘争を通じて、着実に自治会組織の再建の基礎をうちかためた。

そして同年六月下旬に学生は単独で教育復興ゼネストをかちとった。この闘争には全国国公私立百四十五校三十万学生が決起した。学生運動はこの六月ゼネストを経て、夏休み明け九月十八日、遂に**全日本学生自治会総連合（全学連）**の歴史的結成をかちとった。

この全学連結成を領導した学生運動の基礎理念こそ、かの有名な「層としての学生運動論」である。戦後日本学生運動はこれによって不動の左翼的潮流を形成した。

これは、アメリカ帝国主義による反共占領政策と、その意を体した反動政策としての「帝国主義的植民地政策」を「層としての学生大衆」に公然と暴露し、学生の先進的かつ反帝的エネルギーを正しいスローガンのもとに総結集することによって、学生運動を独自的勢力として階級闘争の一翼に位置づけていく……という学生運動論である。全学連は、この戦闘的運動論の実践的獲得によってはじめて、当時常態化していた労働戦線の分裂と混迷のなかにあっても、ひとり戦闘的団結を保持し、運動の高揚をかちとった。

ところが、この「層としての学生運動論」は当時の日共中央の指導方針とは鋭く対立していた。日共中央の学生運動にたいする方針は、学生運動を無条件に党の方針の下に従属させ、学生党員をして「地域人民闘争」に召換させようとするものだった。このような日共中央による、いわば学生運動のセクト的引きまわしと解体にも等しい運動論の根拠には、「学生＝小ブル分子」規定があった。

「学生インテリは生活的にはブルジョアに寄生する根なし草の雑階級であり、動揺分子であり、本質的に反動的である。特殊部分的には革命的学生は輩出されるが、彼らはつねに小ブル性を身につけており、実践的に鍛えなおさなければ使いものにならない」（志田政治局員）といった、きわめて固定的かつ教条的な学生観に立っていた。さらに、党中央は全学連がゼネストや無期限ストライキのような「過激な戦術」でたたかうことは、弾圧をうけて多くの犠牲をだす危険がある。だから、学生は身のまわりの要求をとりあげて地道に活動し、力をたくわえ、学内外の民主勢力との統一闘争をつよめるべきであり、学生運動も他の労働組合と同じように、地方権力・学校権力に向けた地域人民闘争と日常闘争を結合させてたたかうべきだ……と主張し、この日共中央の方針に反対してあくまで全国統一闘争、全国ゼネストでたたかう全学連指導部＝学生党員を「全学連党的＝ゼネストマン的偏向」と厳しく批判した。

日共中央と全学連指導部とのあいだのこのような意見の対立は、学生運動をめぐる党内闘争として創成期以後たえず底在し続けていった。いわば、この対立は日共党内闘争のひとつの底流をなすと同時に、結果的には革命的左翼登場のもうひとつの源流となった。

この学生運動をめぐる両者の対立は、四九年反イールズ闘争の勝利的展開の渦中で発生したあの五〇年一月のコミンフォルム批判を契機にして沸点に達し、この方針上の対立はやがて組織上の分裂へと発展した。すなわち、日共は、同年六月の占領軍による日共指導部「六・六追放」→朝鮮侵略戦争開始直後、臨時中央委員会を開催して反対派を除名、ここに所感派—国際派の分裂が確定した。そのために国際派が指導する全学連は、帝国主義の反動的攻撃に抗して独力でその孤塁を死守していかざるをえなくなった。だが、「国際派全学連」は背腹の敵とたたかいながらも、戦後学生運動の創成前史を飾るにふさわしい画期的な到達地平をきりひらいていったのである。

全学連は、日共臨時中央委員会に先だつ一カ月まえの五〇年五月、全学連第四回大会を開催した。この大会では①反帝民族解放闘争としての「平和擁護闘争」を第一義的中心任務にすえ、②労働者階級の「同盟軍」と自己規定し、③層としての学生の先進的エネルギーを全国的に結集して「実力闘争」を展開していくことを確認した。全学連は、この第四回大会路線の確立によって、当時全戦線にわたって吹き荒れていたレバ攻撃にたいして、学園において唯一この野望を粉砕するという完全勝利を獲得したのである。

とはいえ、この「国際派全学連」はコミンフォルムのもつ国際権威主義のまえにひれ伏すことによって、自らの歴史限界性を露呈せざるをえなかった。やはり、一枚岩の公認前衛党の呪縛から革命的潮流が離脱していくには、向こう数年間の血のにじむような苦闘と歴史過程が必要だったのである。

国際派＝全学連の限界性は、五一年単独講和粉砕闘争をまえにして露呈した。五二年八月コミンフォルム機関誌は、日共所感派の五〇年テーゼ草案（二段階—民族解放武装闘争）支持を表明した。この公認世界党の一かつにたいして国際派は無条件屈服し、総くずれとなった。同時に、全学連指導を所感派に明け渡した。「所感派全学連」の登場である。

全学連はそれ以後向こう三年間、日共五一年綱領路線（反帝反封建）のもとで、血のメーデー、破防法、山村工作隊、基地闘争、帰郷運動、総点検、査問、テロ・リンチ事件などを経過していった。

他方、所感派学生運動のこうした激闘とは

別に、学生運動において唯一その革命的伝統を死守して孤軍奮闘を続けたのは**反戦学生同盟**だった。この反戦学同は、四九年反イールズ闘争の過程で、学生戦線における「反帝平和闘争」を共通目標とした学生大衆組織、とりわけ、民青のような青年＝学生の組織一般ではなくて、学生独自の組織として結成されたものであり、それ以後も一貫して戦闘的学生運動を領導し続けた。

五五年は日共党内闘争にとって新しい政治的再編の年だった。国内情勢も、戦後の管理経済を離脱し、朝鮮特需→MSA不況を経て、神武景気のなかで最初の高度成長期に入り、保守合同、社会党統一などの政治的安定期を迎えた。こうした階級情勢のなかで、日共は七月六全協を開催して「極左冒険主義」を自己批判し、集団指導体制による党の統一を決議し、五〇年分裂に終止符をうった。学生戦線も、この無原則的統一と妥協の産物としての六全協によって、まがりなりにも「中世期の時代」を終えた。だが、結果的にはこの六全協劇の茶番は、若い先進的学生党員のあいだに党不信をかきたてることになり、やがては公認前衛党への葬送の序曲となった。

歴史の証言は、日共六全協による両派の統一が、たんなる野合でしかなかったことを示している。「六全協ノイローゼ」が横溢するなかで開催された五五年九月全学連七中委は、過去の闘争の誤りを全否定するあまり、闘争の成果を全面清算し、一転して「身のまわり主義＝自治会サービス機関論」に百八十度転換してしまった。だから、七中委では、平和、友情、信頼、話合い……が熱っぽく論じられ、ゼミ、スポーツ祭、就職、アルバイト、日常活動がこまごまと話し合われた。

「夏休みを終え、新学期がはじまろうとしている。われわれはこの秋こそもっとも勉強しようという意欲と希望にもえて校門をくぐろうとしている……。学生の気持はただ一つ。思想その他一さいの相違をのりこえて、真理を追求する熱情においてわれわれは一つである……」（基調報告）

当然ながらこの悪名高き見本となった「七中委イズム＝六全協全学連」は、半年後には葬り去られた。五六年一月、国立大学授業料値上げ阻止闘争が爆発し、七中委イズムの没政治主義的路線は大衆的に批判されていった。この闘争の高揚を背景にして、全学連は同年四月、八中委、同六月、第九回大会をもって闘う全学連を再建した。いわゆる「八中委九回大会路線」の確立がそれである。

大会は、過去五年間の学生運動の混迷と停滞を卒直に自己批判し、原水爆禁止、軍事基地反対、中ソ国交回復、再軍備反対、憲法擁護を主課題とする「平和擁護闘争」を第一義的任務として確認し、「平和と民主主義、よりよき学生生活のために」を統一スローガンとして掲げ、戦闘的学生運動の再建に向けて第一歩をふみだした。この大会は当時「第二創世紀の開始＝全学連結成大会」ともいわれた大会であり、戦後学生運動史の第二の画期となった。

再建全学連がめざした最初の闘争課題は砂川軍事基地拡張阻止闘争だった。全学連は全国から数千の学生を現地動員し、農民、労働者と固いスクラムを組み、その先頭に立ってたたかい、遂に基地拡張を実力闘争によって中止させた。この全学連の献身的、戦闘的たたかいは、多くの人民各層から賞讃をうけ、学生運動史上の輝ける一ページとなった。同時に、学生運動はこの砂川闘争の勝利によって、長い混迷の時代から脱却し、実践的にも理論的にも、偉大な飛躍に向けて巨歩を開始した。

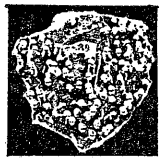
だが、学生運動がこの偉大な歴史的転換を獲得しつつあるとき、その組織内部には再度運動路線をめぐる重大な対立が顕在化し、やがてこの対立は非和解的な党内＝党派闘争へと発展していくことになった。

対立は現地指導部と書記局残留指導部のあいだで発生した。一方の現地指導部は、闘争の勝利を「現地動員主義の成功」と「実力闘争の成果」と総括した。他方の残留指導部は、その勝利は「内外の平和民主勢力の圧力の成果」であるが、「広範な学生を結集しえなかったことの弱さ」を総括すべきだと主張した。「幅広論」をめぐるこの両者の対立は、さらには「ジグザグデモかオンパレードか」「ストライキか授業放棄か」という闘争戦術の細部にまで及び、両者はことごとく対立し、遂には中執罷免決議にまでエスカレートした。とはいえ、この戦術上の対立は、たんに表層の現象ではなかった。その背後には、国際共産主義運動を根底から震撼させたスターリン批判という大事件と、その大事件が提起した現代マルクス主義の根底的再検討を迫る内容をも含んでいたのである。

＊

かくて、これまで学生運動をめぐって絶えずくりかえされてきた日共党内の暗闘にたいして、いまや最後的な決着をつけるべきときが到来した。無謬性を誇った前衛党神話の崩壊→革命的左翼の形成→真の前衛党創成がそれである。

第一章　革共同とブントの結成
―創成期―



スターリン批判とハンガリー事件

五六年二月ソ連共産党第二十回大会で提起されたフルシチョフのスターリン批判は、当時の国際共産主義運動に強烈な衝撃を与えた。死後三年を経過していたとはいえ、スターリンはいぜんとして神聖不可侵な超批判的な絶対者だった。そのスターリンが彼の後継者たちの手によってその玉座から引きずりおろされたという事実は、それ自体が衝撃だった。加えて、スターリン批判から四―六カ月後に勃発したポーランド＝ハンガリー暴動がそれに追いうちをかけた。この事件は、スターリン批判に呼応して大衆自身が下した歴史の審判である。また、これはレーニン以後の国際共産主義運動を毒し続けた個人独裁、大国主義、権威主義、教条主義、一国社会主義に体現されるコミンテルン総路線にたいする根底的批判を迫るものだった。

日共党内闘争はこのような事態の渦中で展開された。しかし、党中央は一貫して問題を彼岸視し、決してそれを主体的に掘り下げようとしなかった。とくにスターリン批判に関しては〝これはソ連国内の、スターリン個人の問題である。個人崇拝に関しても、わが党はソ同盟に先がけて、六全協で解決した。

家父長的指導を集団指導にあらためた……〟と弁明し、あらかじめスターリン問題に関してワクをはめ、混乱防止につとめ、もっぱら五一年綱領の手直しで事態をのりきろうとした。そればかりか、五六年六月の七中総では「平和的移行方式」に転換し、フルシチョフ「平和共存路線」に対応させた。

この規定は〟民主主義の確立と諸条約の改廃を通じて、独立、平和、民主主義のための政府の平和的樹立をめざし、これをもって、社会主義への平和的移行の出発点にする〟という規定である。党内はこの七中総決議をめぐって百家斉放の時代に入った。ときあたかも「日米新時代宣言」にもとづく「日米安保条約再検討」が「上からの独立」として提起されたことに示されているように、日本独占資本主義の帝国主義復活の経済的基礎が確立され、日米帝国主義の基本的関係が再編期に入ろうとしていた時期である。この新しい歴史の転換点に際して、綱領論争は現実の階級闘争にたいする具体的方針をからめつつ、否応なく全面化していった。

五七年九月の日共十四中総は「日共党章草案」を採択し、下部党員の大衆討議に付した。この過程で、党内には急速に反対派が形成されていった。旧所感派への不信やこの旧所感派と無責任な野合を行なった六全協指導部にたいする不満が内攻しており、綱領論争を通じて、党内反対派＝革新派が組織的に形成された。

党章草案は二段階革命論だった。日本は「高度の資本主義国でありながら、アメリカ帝国主義に半ば占領された従属国（であり、当面の革命は）民族の完全独立と民主主義擁護のための人民民主主義革命であり、これを社会主義革命に急速に発展させるべきである」というのがその骨子だった。反対派＝反党章派は、この党章の「民民路線」にたいして、反従属、反二段階革命＝社会主義革命論を対置した。とはいえ、この社会主義一段階革命論は、プロ独否定の平和革命論にすぎなかった。その意味では、フルシチョフ平和共存路線をうけいれた党章派と反党章派とのあいだには、激しい党内論争を展開しながらも、絶対的矛盾は存在しなかった。同時に、この両者の共通点こそは、彼らが当時急速に抬頭しつつあったプロ独＝世界革命を掲げる革命的左翼にたいして共同の敵対党派として立向かう内的必然性であり、その最大根拠だった。彼ら両者は、情勢分析に関する解釈学上のちがい（半従属か独立か）はあっても、運動路線上のうえでは奇妙な混淆を呈しており、階級闘争の発展の妨害者という点に変わりはなかったのである。

このような不毛な日共党内闘争の展開過程のなかで、革命的左翼の創成は深く、徐々に、着実に進行していった。

日本の革命的左翼がひとつの政治的潮流として産声をあげたのは、五七年一月、**日本トロツキスト連盟**結成にはじまる。創成メンバーは太田竜、内田英世、黒田寛一ら数名だった。

提唱者の太田は季刊理論派グループ（福本和夫、中西功、神山茂夫、対島忠行、荒畑寒村、黒田寛一）で活動し、五二年頃から社会党加入戦術をとっていた。内田は五〇年分裂の国際派に所属し、黒田は太田に同調した。

トロツキスト連盟の発足当時の性格は、その思想サークル集団性にあった。彼らは、山西英一のトロツキーの翻訳や、対島忠行のソ連論（官僚制国家資本主義論）に影響をうけ、さらに、より直接的にはスターリン批判→ハンガリー事件に触発され、イデオロギー集団として活動を開始した。結社の名称が体現しているように、スターリン批判にさいしても、たんにトロツキーを教条的に対置したにすぎなかった。彼らが「トロツキー教条主義」というレッテルをはられた根拠もそこにある。

とはいえ、彼らが日共党内闘争をたたかう若い学生活動家に一定の思想的、理論的な外在的インパクトを与えたことは事実であり、彼ら自身をもふくめて、革命的左翼創成に寄与した役割を否定し去ることはできない。彼らのこの「真空の中の党づくり」は、数年後になってひとつの結実を示した。

トロツキスト連盟は同年十二月、**日本革命的共産主義者同盟（革共同）**へと改称した。そのうち黒田は、同年十月に雑誌「探究」を創刊して政治宣伝を開始、主要大学で弁証法研究会を組織して小規模ながら組織づくりを行なった。関西系革共同もこうした手工業的オルグ＝一本釣りによって一定の成果をおさめ、全学連や反戦学同の指導部、関西の立命館大学日共細胞などで影響力を強めた。

この日本反スタ＝トロツキズム運動が果した先駆的役割とは別に、当時の学生党員は相対的に独自の軌跡を歩んだ。前者がサークル主義者とすれば、後者は実践主義者だった。前者が、スターリン批判やハンガリー事件という外的要因を媒介にして自己のイデオロギー形成を実現したのにたいして、後者は、現実の階級闘争の烈火の試練をかいくぐるなかで自己の政治的転換をかちとっていった。だから、スターリン批判とポーランド＝ハンガリー事件にたいする両者の反応のちがいは、それがそのまま、両者の階級実践へのかかわりのちがいと距離に対応していた。この両者はその限りで相互補完的だった。しかし、この相互補完性を過大視するのは歴史の偽造であり、逆に、この事実を無視して両者の個別性を論じたとしても誤りである。

さて、既述したように全学連は五六年十月、砂川闘争を契機にして、第二の再建に向けてスタートした。その後、五七年五月には米英核実験反対闘争＝原子戦争準備反対全国学生総決起行動デーを闘い、圧倒的成功をかちとった。この成果をもとに五七年六月、第十回大会を開催した。大会では砂川闘争以来発生した右翼的偏向にたいして徹底的な批判を行ない、戦闘的学生運動構築に向けて「強力な形態」でたたかうことを確認した。また、ポー

ゆたかな
人間環境
つくり
ひとつの願いを咲かせるために
力を合わせるクボタの大きな〟根っ子〟です
環境装置事業部
産業機械事業部
建設機械事業部
自動機器事業部
鉄構事業部
農機事業部
ディーゼル事業部
住宅建材事業部
住宅機器事業部
建材鋳物事業部
鋳造品事業部
鋳型ロール事業部
鉄管事業部
鋼管事業部
合成管事業部
海外事業本部
クボタ

ランド＝ハンガリー事件にたいしては動揺を示さなかった。

「昨年十月ハンガリーにおける事件は、種々の矛盾と社会主義建設のうえでの政治的経済的諸事情の反映であるが、帝国主義勢力の危険な干渉とたたかい、矛盾の解決のための努力が開始され、社会主義国家の新しい関係がうちたてられ、一時的困難にかかわらず、世界平和を確保するうえで積極的役割を演じてきた」（一般報告）

これが、ポーランド＝ハンガリー事件発生八カ月後、トロツキスト連盟結成五カ月後の、全学連指導部の事件にたいするうけとめ方だった。この事実が示すように、当時の学生党員の問題意識は、反スタ＝トロツキズムにはなかった。もっぱら〝平和擁護闘争はプロレタリア世界革命の歴史過程のなかでいかなる位置を占めるか……。世界革命の弱い環を突破し、反ファッショ統一戦線と平和擁護闘争によって、アメリカ帝国主義を孤立させる闘争を組織すべきだ……〟というものだった。しかも、このような論議は、党中央や地区委員会の指導が全く及ばないところで行なわれ、学生運動は徐々に党指導から離脱し、妨害をはねのけ、独力でその転換をかちとっていった。否、正確には運動の飛躍と転換をかちとるためにこそ、妨害とたたかい、その結果において党指導からの離脱をはかっていったのである。

その後、全学連は同五七年八月、原水禁大会に数百名を動員し、平和擁護闘争の意義を政治宣伝し、党中央との対立をふかめた。さらに、九月第二次砂川闘争、十一月核実験禁止協定締結要求、国際行動デーの圧倒的高揚のなかで、戦術方針をめぐる対立をエスカレートさせた。また、党章草案をめぐる綱領論争も急速に活発化しはじめた。

党内闘争から新党結成へ

激動の五八年が開始された。その年頭を飾るにふさわしい歴史的論文が東大細胞機関誌「マルクス―レーニン主義」に発表された。それは「一〇月革命と我々の道―国際共産主義運動の歴史的教訓」と題した山口一理論文である。当時、革共同はこの山口論文を「トロツキーのノリカミ細工」「ブント裏切史観」の原典と酷評した。しかし、この論文がもたらした衝撃はきわめて大きい。当時の革共同の啓蒙主義的宣伝文書とはちがって、この論文はあきらかに日共党内闘争のワクをはみだす重要な内容をふくんでいた。

その表紙裏にある「プロレタリア世界革命万才！」という禁句のスローガンに示されているように、その論文は、それ自体が党内闘争の歴史的産物であるとともに、党内闘争に明確な方向性と結集軸を与えるための、来たるべき党派闘争に賭ける宣言だった。

論文は、第一に、忘れ去られた世界革命を復権させるために、国際共産主義運動史を全面的に洗い直し、党内の右翼的諸潮流を批判し、第二に、反革命の代名詞とされたトロツキーにすら学んで、スターリン教科書の「十月革命の伝説」をうち砕き、第三に、ボリシェヴィキ戦術に関する党内闘争の歴史的教訓を学ぶことによって来たるべき党内＝党派闘争に明確な方向性を与えた。また、論文は党の中枢部で大まじめに演じられていた綱領論争にたいして、

「民主主義革命か社会主義革命か、いやむしろ構造改良か、という論議が大衆運動よりもはるかにはなばなしく行なわれている」として、その転倒した綱領論争の不毛性を批判し、革命運動における党内＝党派闘争の基準と立場性を示している。

この山口論文は、四カ月後には東大学生細胞による党内闘争宣言として結実した。すなわち、五八年四月、東大細胞は党章派や反党章派の「右翼的な誤謬」を批判し、自らは「日本独占資本の打倒のためのプロレタリアートの決然たる大行動を準備するために闘う」と決議し、そのために、目前に迫った六月日共第七回大会に向けて、党内の「徹底した民主主義的改革」のために、非妥協的に党内闘争をたたかうことを鮮明にした。これは事実上、先進的学生党員が発した、党内両派にたいする党内＝党派闘争宣言だった。

学生運動は五八年に入ってからも着実な前進をとげた。米ソ核戦略体制強化という国際情勢の変化に対応しながら、原水禁＝核武装阻止闘争、反基地闘争を展開し、さらには、民主教育＝日教組破壊を狙った勤評粉砕闘争、日米新時代＝安保改訂をめざす岸反動内閣打倒を掲げて、学生運動は戦闘的エネルギーを発揚した。学生党員によって領導された学生運動は、この闘争を通じて、全学連十回大会で確立した平和擁護闘争路線から、やがては徐々に「反帝実力闘争路線」への質的転換を準備した。それとともに、運動内部にも砂川闘争以来派生した戦術上の対立から、党中央と結んだ「右翼反対派」が形成され、対立をふかめた。

新学期四―五月闘争の最先頭でたたかった反戦学同は、五月、第十一回全国大会を開催し、その名称を**社会主義学生同盟（社学同）**に正式に改称した。これは、現実の階級闘争の発展過程が、学生運動にたいして新しい歴史的任務を課したことを、当時の学生同盟員が鋭敏に感得したからである。その歴史的任務とは「帝国主義ブルジョアジー打倒、社会主義の実現をめざす労働者階級の解放闘争に結合させ、多くの学生を社会主義の意識でとらえていくこと……。学生運動を青年運動一般に解消することなく、学生層の戦略的任務＝先駆性を学生全体として発揮せしめるべき組織」をめざすこととだった。こうして、学生運動先駆性論、労学提携路線が敷設され、一カ月後の全学連大会に向けて準備を完了した。

全学連第十一回大会は、五月二十八日から四日間、約千名の代議員、評議員、傍聴者を結集してひらかれた。大会は冒頭から代議員資格をめぐって激しい応酬がくりかえされた。この光景こそは大会の性格を象徴している。反主流派を形成したのは早大一文、教育大、神戸大グループの他に、関西大、名古屋大グループだった。前者は構改派であり、後者は党章派であり、彼らは圧倒的少数派だった。大会は二つの点で重要な転換を示した。第一点は、学生運動をたんに学生層の運動としての「層としての学生運動」から、明確に労働者階級の立場とそのイデオロギーで武装し、そのもとに学生を結集して帝国主義との対決をめざすという「労学提携論」であり、これは、のちに「同盟軍規定」となる。第二は、平和擁護闘争は、たんに平和擁護自体が自己目的化されたり、小ブル平和運動に解消されるべきではなくて、自国帝国主義打倒を通じて「平和擁護闘争の真の国際主義」を実現しうるとして、明確な「反帝闘争路線」をうちだしたということ。大会は以上の点を確認しつつ次の諸点を決議した。

①学生運動の基礎理念を再確認し、右翼日和見主義の妨害に注意する。

②平和擁護闘争を第一義的任務とする。

③岸反動政府と徹底的に闘う。

④国際的視野を堅持し、国際学連の役割を強化する。

⑤労働者階級との連携を強化する。

また、当面さし迫った緊急任務として和歌山勤評闘争に全力を投入し、現地指導部を設置する。「一クラスから他クラスへ、一校から全市へ、全県から全国へ」が合言葉だった。

この全学連第十一回大会終了直後に、あの衝撃的な「六・一事件」が発生した。

大会終了翌日、日共本部において「全学連大会代議員グループ会議」が党中央によって招集された。席上、学生党員多数派は、全学連大会で党本部役員が大会破壊策動を直接指揮した事実にたいしてその責任を追及し、自己批判を求めて激しく抗議し、ついに物理的衝突事件へと発展した。あわてた党機関は、一方的に閉会を宣したが、学生党員はこれを認めず、会議を続行して党中央委員会弾劾決議を強行した。

「六全協後党中央は、学生運動にたいし、指導をまったく放棄してきた……のみならず、学生運動の発展を妨害する役割すらはたしてきた。こうした学生運動にたいする誤った指導は、たんに学生運動のみならず、労働運動、平和運動にたいする誤った指導となってあらわれている。日本革命運動と日本共産党の真の党建設をすすめるうえで現在の党中央は、あまりにも無能力である。全学連大会代議員グループ会議は、第七回大会が現在の党中央委員会を不信任するよう要求する」(「日本共産党の危機と学生運動」)。

日共中央は六月五日「アカハタ」で「六・一不祥事件」にたいする態度を表明した。「事態は明らかに一部少数の反党的挑発分子の計画扇動によってひきおこされた」として、事件の本質にはふれず、一方的に会議を無効とし、規律違反を追及すると声明した。さらに、七月―十二月にかけて計七十二名の処分攻撃をかけ、党内闘争は全面化した。

この報復攻撃にたいして、学生党員は八月に全学連=社学同中央フラクを結成、九月に機関紙「プロレタリア通信」を創刊して反撃を開始した。かくて、「別党コース=学連新党」結成は最後の秒読みに入った。

日共党内闘争の劇的展開のなかで、全学連は、春の連続闘争の激闘の成果をもって十七中委を開催した。主要議題は、勤評闘争と原水禁第四回世界大会に関する方針討論だった。とくに後者に関しては〝大会が平和運動にとっての敵は米英仏帝国主義者グループであり、それと結託した岸自民党政府であることを明確にし、勤評反対を決議すべきである〟という方針を確認した。

全学連はこの方針をもって八月原水禁大会に参加した。学生たちは、各分科会で圧倒的な論戦を展開して論争のイニシャティブを握った。そのため、日共中央の方針「平和運動に勤評を持込むべきではない」というズブズブの平和主義と全面衝突することになった。

全学連は夏休み明けの九月、第十二回臨時大会を開催して秋の闘争体制を確立した。

「我々は今全世界史の新しい激動の渦中に立たされている。日本人民と全アジアの人民にとって決して忘れ去ることのできないあの兇暴な日本帝国主義は今や再びその姿をあらわにして我々に襲いかかり、国内情勢は著しく緊迫している。復活した日本帝国主義と人民との激闘としての勤評をめぐる闘いはますます熾烈化し、今や決戦段階に突入しようとしている」(大会宣言)。

この大会で、最終的に同盟軍規定、先駆性論を軸とした反帝実力闘争路線を確立、その

方針の下で九月勤評闘争、一〇・二八、一一・五警職法粉砕全国ゼネストなどの歴史的な大闘争をたたかい、警職法を粉砕した。

この秋の激闘を経て、学生党員たちはついに、公認前衛党と最後的に訣別することを決断した。十二月十日、銀座歯科会館で**共産主義者同盟(ブント)**は五十数名の学生党員によって結成された。戦後学生運動の再建以来、はてしなくくりかえされた党中央による官僚主義的、日和見主義的、セクト主義的闘争破壊工作に終止符をうつべく、党の「一枚岩の団結」という神話と呪縛から自己を解き放ち、世界プロレタリアート解放という大業を担うべく、日本階級闘争=学生運動史上に不滅の一ページを刻みこんだのである。

ブントが意図したものは何か。

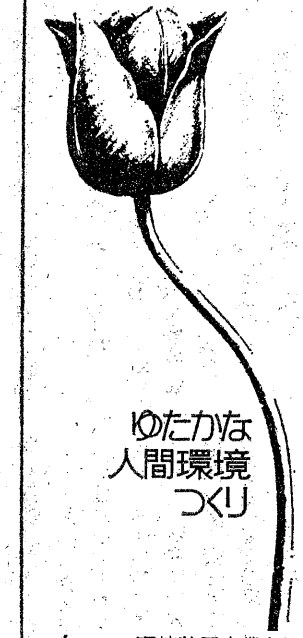
「今こそプロレタリアートの革命的力量を汲みあげて階級闘争を指導する事の出来る現実的な能力を備えた前衛部隊を組織せねばならない」(大会議案書)という歴史的使命感とパトスだった。ブントはこの一点において革共同とは別個の道を歩んだ。すなわち、

「組織は真空の中では成長しない。正しい理論、正しい方針のみでは成長しない。労働者階級の闘いが生起する課題に最も労働者的に、最も階級的に応えつつ闘争の先頭にたって闘うことによって、その党は革命的方針を渇望する労働者にこたえることが出来る」

ブントがそう主張するとき、そこから演繹される第二の結論は、新党結成以外にありえなかった。

さらに、ブントの革共同批判は、トロツキードグマティズム=第四インターの評価に集約された。第四インターの過渡的綱領、加入戦術論、労働者国家無条件擁護論、炭鉱無償国有化政策などの経済主義、日和見主義、サークル主義は考慮の対象外と批判した。また、組織論に関しても、「組織の前に綱領を!」行動の前に綱領を!」という綱領主義=左翼観念主義を批判して「闘う党建設」を対置して、革共同との激しい党派闘争を展開した。

これにたいして革共同の反批判=対ブント批判は、「左翼スターリン主義者」「戦術左翼主義者」だった。彼らはブント結成大会には数名を送りこんで、議事進行を見守った。その革共同は五八年七月に「トロツキー・ドクマティズム」をめぐって第一次分裂をおこし、「ドグマティスト」は**トロツキス**



ゆたかな人間環境つくり

ひとつの願いを咲かせるために
力を合わせるクボタの大きな〝根っ子〟です

環境装置事業部
産業機械事業部
建設機械事業部
自動機器事業部
鉄構事業部
農機事業部
ディーゼル事業部
住宅建材事業部
住宅機器事業部
建材鋳物事業部
鋳造品事業部
鋳型ロール事業部
鉄管事業部
鋼管事業部
合成管事業部
海外事業本部

ト同志会（通称トロ同＝純トロ）を結成した。この分裂について、当時のブントは情報をもっていなかった。ブント結成はこの分裂とは無関係だった。

以後、日本の革命的左翼は、このような創成期の党派原体験に根ざしたふたつの建党路線＝運動組織論を対極に内包しつつ党形成をかちとっていった。ブント主義と革共同主義がそれである。一方のブントは、現実の階級闘争の革命的、原則的展開のなかに党建設の根拠を措定しつつ、学生運動先駆性論、革命的敗北主義、一点突破全面展開、捨石運動論、前段階武装蜂起論……などに体現される党派性を自己貫徹した。これにたいして革共同は、綱領主義、プロレタリア的人間の論理＝イデオロギー主義による同心円的拡大路線、宗派主義的党建設を志向した。また、前者が「闘うための党」をめざしたのにたいして、後者とくに革マル派は「党のための闘い」をもって党組織論のカナメとした。

以上が革命的左翼創成期の概括である。この歴史の事実から要約的に結論しうることは三点ある。第一に、革命的左翼の歴史的登場は、戦後日本帝国主義の自立化→登場と軌を一にしていたということ。第二に、その日本帝国主義との全面対決となった、来るべき六〇年安保闘争のあの偉大な高揚は、公認前衛党との訣別をかちとることによってのみ、はじめて可能だったこと。しかも、第三に、この偉大な高揚を実現しえたのは、観念論的綱領主義を峻拒して、たたかう党建設をめざし、誠実に階級的党派性を自己貫徹したからに他ならない……ということである。

第二章　六〇年安保闘争

安保をめぐる論戦

五七年「日米新時代宣言」をひっさげて登場したブルジョアジーのチャンピオン岸内閣は、五九年高度成長＝岩戸景気を背景に、帝国主義自立化へ向けて第一歩を開始した。その政治プログラムは、一方においては、勤評によるあの日教組破壊であり、警職法による弾圧体制強化であり、戦闘的労働運動の最後の拠点である炭労への合理化＝首切りだった。この攻撃は、勤評のなし崩し攻撃、警職法の流産、安保闘争終了直後の三井三池「流血の妥協」として終わった。他方、岸内閣のもうひとつの政治プログラムは、安保条約改訂にあった。五八年九月、日米安保条約改訂第一回交渉によって、日米対等＝条約双務化、日本帝国主義の政治的威信確立に全力をあげることだった。

かかる階級情勢下、全学連は共産同結成直後の同じ五八年十二月、第十三回臨時大会を開催した。大会では共産同の人材難から主導権は革共同に移った。執行部多数派となった「革共同全学連」は、学生運動における過去の転換路線を基本的に評価しながらも、独自

路線をうちだした。〝生産点での合理化粉砕を通じて安保粉砕へ〟という生産点主義路線である。これは労働運動における経済主義路線をアプリオリに学生運動に持込み、しかも、安保闘争を結果的に過少評価するという点で二重の誤りだった。

これにたいして共産同派は「安保粉砕、日帝打倒」を対置。この両者の中間に立ったのが革共同内少数派＝探求派だった。「安保も、合理化も」というのがスローガンだった。探求派はその後五九年八月に革共同多数派＝関西派と訣別、圧倒的少数派ながら**革共同全国委員会派**を結成した。いわゆる革共同第二次分裂である。

五九年は安保闘争の幕明けだった。同年三月「安保阻止国民会議」が発足した。社共、総評、中立労連、日中、平和団体、農民、婦人、青年団体など十三団体で構成。全学連は労組青年部とともに青学共闘会議を通じて国民会議に参加した。共産党はオブザーバー参加とはいえ、実質的にヘゲモニーを握った。この国民会議は、四・一五第一次統一行動を皮切りに、それ以後の国民統一戦線の役割りを担った。とはいえ、国民会議は運動の高揚にとってつねに桎梏となり、全学連との対決をふかめた。

学生運動は四―六月闘争では数千名を結集し、この闘争過程で急速な再編をみせた。革共同関西派系は、春闘高揚期を第二の決戦と位置づけ、「予算闘争と完全就職要求」「春闘支援」「炭労スト支援デモ」をたたかった。また、共産同系は、日本独占資本の「悲願」としての安保改訂に死命を制するために、「安保決戦」に賭けた。さらにまた、日共系は「全面軍縮、核非武装、基地撤去、日中国交、護憲中立」をスローガンに、平和主義、議会改良主義、幅広イズムを主張した。春の学生運動はこれら三派が指導する各単位自治会の動員合戦であり、この過程で、革共同はその労働者経済主義、生産点主義、反街頭主義のために急速にヘゲモニーを失っていった。そして、革共同は五九年六月、全学連第十四回大会で主流の座から転落。代わって「共産同＝安保全学連」が登場、以後一年間の安保闘争の激闘をうち抜く組織体制を確立した。

社学同内でも、革共同は「左翼反対派」にとどまり、同年九月、社学同第二回大会で組織的に一掃された。かくして学生戦線における共産同のヘゲモニーは名実共に確立された。

全学連は、一〇・三〇単独ゼネストの爆発のあと、日本階級闘争史上初めての〝国会突入闘争〟をかちとった。この闘争は共産同＝安保全学連がうちたてた最初の金字塔だった。

一一・二七国民会議第八次統一行動には合化労連と炭労の二十四時間ストを中心に全国二百万が参加。東京では約三万名の労働者、学生が国会を包囲、機動隊五千名のカベを突破して国会構内に突入、構内大抗議集会を実現させた。この闘いの主役は全学連と東京地本傘下の一部戦闘的労働者だった。彼らは三方面から国会に向けて進撃。そのうちチャペルセンター前の全学連部隊は、装甲車のない機動隊のカベをめがけて突撃をくりかえしてこれを粉砕し、突破口をひらいた。学生、労働者、市民がこれに続き、遂に〝神聖〟な国会構内は万余の大衆で埋めつくされ、数時間にわたって占拠闘争をかちとった。

この歴史的大闘争をまえにして、なによりも恐怖したのは、ブルジョアジーではなくて、社共だった。「乱入事件は遺憾」「院内のことは我々がやる。すぐ帰れ」「統一行動の破壊者」「トロツキストの挑発」というお

定まりの反トロキャンペーンの洪水だった。

議会主義者が恐れたのは何故か。

第一に、安保は重い……というつくられた神話を吹っとばして爆発した大衆的エネルギーが、既成左翼の議会主義路線のワクをはみだしたこと。第二に、大衆闘争の爆発は、それ自体が己の日和見主義の暴露に他ならないこと。第三は、歴史的登場をかちとった革命的左翼に、その大衆闘争のヘゲモニーを奪い去られること。

なお、全学連「左翼反対派」を自称した革共同関西派も、一一・二七闘争には批判的だった。〝国会デモにとだわる街頭カンパニア主義は、裏返しの議会主義路線。生産点と切断された街頭デモは、階級力関係をかえない……〟という左翼空論主義をふりまわし、学生戦線での影響力を急速に失った。

全学連は、左右の日和見主義とブルジョアジーの集中砲火のなかで、全く独力で更なる追撃を組織した。国家権力は、全学連指導部二名の逮捕状を用意したが、全学連は徹底的な学内籠城闘争で対抗するとともに、来たるべき一二・一〇第九次統一行動には、再度の国会構内大抗議集会をめざしたたかうと声明。

しかし、一二・一〇闘争は絞殺された。国民会議指導部は、大衆闘争の再爆発を恐れて中央集会、デモさえ中止、炭労二十四時間スト、国労職場集会へと戦術ダウン。止むなく、全学連も当初のチャペルセンター前集会から、日比谷野音集会→東京駅デモにきりかえた。集会には一万名が結集。全学連主流、反主流各自治会旗が乱立する騒然たる雰囲気のなかで、国会デモ中止の決定を下した。なお学生運動史上、反日共系、日共系自治会の両者が、統一集会＝統一デモを行なったのは、この日が最後だった。

歴史的な闘い

激動の六〇年安保闘争における階級攻防の焦点は、来たるべき六〇年一月一六日岸訪米をめぐる一点に凝縮された。

国民会議は、その一カ月前には〝新安保調印のための岸訪米の当日には、メーデーを上まわる大動員で羽田にいたる沿道を埋めつくし、岸首相の車を逆もどりさせる〟とぶちあげた。大衆闘争のあの高揚が彼らをしてそういわしめたのである。全学連も、中央委員会決定にもとづき「冬休み返上、一・一六岸訪米実力阻止、数千名羽田現地へ」を指令した。結局は、これらの方針を最後まで貫徹したのは全学連だけだった。

〈明朝では遅い、今夜だ、敵の機先を制して、即刻空港占拠へ！〉

岸訪米前日の一月十五日午後五時、全学連のレポが「岸の出発は十三時間繰上り、十六日午前八時に決定」という情報をキャッチ、共産同＝全学連合同指導部がただちに都内各大学自治会に緊急動員を指令、学生七百名は空港閉鎖寸前のわずかなスキを衝いて空港ロビーに突入、食堂にたてこもり深夜の徹底抗戦をたたかい抜いた。空港外でもこれに呼応して、二千名以上の学生が岸出発直後まで、夜を徹して雨中の激闘をくりかえした。

岸訪米を許したとはいえ、全学連の十数時間の激闘は、内外に異常かつ複雑な反響をまきおこした。ラジオは深夜の実況放送を流し、外電も事件を大々的に報じた。なかでもプラウダは「岸はカモシカよりもすばやく逃げた。それは羽田における愛国者の闘い」だと評して話題をまいた。またアカハタは岸が「裏通りから泥棒猫の如く」日本「脱出」をせざるをえなかったのは「安保に反対する人民の

世論によるものだ」と憶面もなく論評。ある労働者たちは「その日から四―五日というものは、職場では全学連の話題でもちきりだった」と記録している。

だが、この日の国民会議はまたしても恥ずべき裏切りを演じた。下部大衆や上京した地方代表の激しい突上げを圧殺し、わずか百名の抗議団を羽田に送りこみ、十六日午後になって五千名を、羽田とは程遠く日比谷に集めて訪米抗議集会をもったにすぎなかった。

全学連の闘いは圧倒的な大衆的共感を生みだした。その共感はそのまま既成左翼への批判と弾劾に通じた。そのひとつは、長崎造船日共細砲、日共港地区委員会などの党内闘争宣言→共産同への結集として結実した。とはいえ、以後の事態の推移は、必ずしも共産同の運動組織論の妥当性を裏づけるものではなかった。先駆的学生運動の展開→労働者階級の活性化と流動化→真の前衛党への結集……とはいかなかった。そのために、全学連は独力でたたかいの血路をきりひらかざるをえなかった。ただ、羽田闘争の一カ月後に発せられた知識人十七名による「諸組織への要望」に示されているように、既成左翼の統一戦線論への批判的要望、全学連の闘争への評価は、ひとつの思想的傾向を体現した。この事実は、公認前衛党神話が大衆的に崩落する重要なステップだった。

全学連は、二月末、第二十二回中央委員会を開催、革共同関西派系中執を一掃。さらに三月中旬、第十五回臨時大会を開催、四―五月闘争方針を決定。とくに、この大会では主流派対反主流派が会場入口附近で衝突し、反主流二派（革共同関西派、日共派）は大会をボイコットして独自集会をもち、組織分裂は決定的となった。日共系は四月に東京都自治会連絡会議＝都自連を結成し、組織分裂への第一歩を開始。また、革共同全国委は学生組織**マルクス主義学生同盟（マル学同）**を結成した。こうして学生戦線は、共産同＝社学同、革共同関西派＝社学同左翼反対派、同全国委＝マル学同、同第四インター系の**学生運動民主化協議会**、日共＝**都自連**の諸潮流が形成された。

全学連は、四・二六国民会議第十五次統一行動を全国ゼネストでたたかった。東京・京都ではそれぞれ一万名、五千名を結集。とくに東京では国会正門前抗議集会をかちとり、そのうち三千名が装甲車を突破し、これを阻

自由選書

全国書店好評発売中!!

研究・創価学会

本書は「創価学会のすべて」である。学会四十年の歩みのなかにみた、歴代会長の苦難な闘いから創共十年協定までを克明に検討した決定版

杉森康二 著

定価一二〇〇円

総合雑誌『自由』発行元
自由社
東京渋谷区渋谷1－1－19
〒150 振替東京721333

止しようとした機動隊と激突した。他方、日共系反主流派は清水谷公園に一万一千名を結集、国民会議の国会請願デモに合流した。

その後、五・一三、五・一四闘争を経た五月十九日、遂に政府自民党は衆議院に警官隊を導入して本会議を開会し、新条約を強行可決した。こうした非常事態発生のなかで、労働者、学生、市民は連日国会周辺を埋めつくして抗議デモを展開、全学連はその先頭にたってたたかった。

五・一九約五千名深夜デモ、五・二〇約一万名首相官邸襲撃、五・二六約一万名国会包囲デモ、六・三約九千名首相官邸突入、六・四ゼネスト国労支援約三千名……。反主流派も主流派を若干上まわる動員数で、国会周辺を避けるように平和デモをくりかえした。ただ、特記すべき闘争は国民会議による六・一〇ハガティー米大統領秘書官来日抗議羽田現地闘争を展開したというくらいだった。

安保闘争は最後の大詰めを迎え、全学連は遂にあの歴史的大闘争六・一五国会突入闘争をかちとった。約一万七千名を結集して南通用門を破壊し、うち千五百名が構内に突入した。機動隊はこの学生に襲いかかり、棍棒の雨を降らせ、樺美智子を虐殺した。負傷者実に千名、逮捕一七四名の死闘だった。この闘いと全く対象的だったのは都自連のデモだった。一万五千名を集めて神宮絵画館前で集会をひらき、国会をかすめるようにして東京駅まで平和デモを行なったが、終着点ではわずか三分の一以下に激減した。学生虐殺の報に接したが、都自連執行部提案は、新規参加自治会の猛反対に会い、主流派の死闘を黙殺して流れ解散してしまった。

その後、国会周辺は連日の抗議の人波で埋められた。この政治的高揚のなかで岸内閣は退陣し、アイク訪日は中止された。

なお、記録にとどめておくべきは日共中央と都自連の恥ずべき欺瞞的行為である。日共中央は、国民会議からの全学連除名を終始強硬に主張し続けたり、樺虐殺の政治的責任をこともあろうに「トロツキスト指導部」に転化して、反トロキャンペーンに血道をあげた。そればかりか、都自連は大衆闘争からいち早く召還して連日千名ちかい大カンパ隊を組織、労働者や市民に樺虐殺への同情を訴え、数百万円もの募金を集めてこれを私物化した。これがかの有名な「香典泥棒事件」である。このエピソードこそは、当時の日共の実践的、道義的退廃を象徴する事件であり、彼らが「日共本部デモ」という抗議の洗礼をうけたのは当然だった。

六〇年安保闘争は終わった。この偉大なたたかいの主役を演じた全学連は、七月初旬全学連第十六回大会を開催。三千名を結集した大会は、過去一年半余の死闘を総括し、自己が果たした歴史的役割を鮮明にするとともに、今後も自己に課せられるだろう歴史的任務を提起し、「苦闘の底から……強固な前衛政党の早急な出現を期」しつつ、新しい闘いに向けて進撃を続けていくことを確認した。だが、安保全学連は共産同の劇的自壊という予期せぬ事態のなかで、一挙に瓦解した。この安保全学連の瓦解こそは、以後数年間の革命的左翼自体の混迷と苦闘を告示するものだった。なお、大会をボイコットした日共系自治会は全国自治会連絡会議（全自連）を結成、第二全学連への第一歩を開始したかにみえたが、日共党内闘争のなかで、構改派は自立化し、全自連は解体した。かくて、日共をふくめた全左翼諸党派は、試練にみちた党派再編の激浪にさらされていった。

いちばん大切なもの

家庭。仕事。子ども。恋人。貯金。友人。食べること。音楽。読書。登山。日記。自然。詩集……
大切なものは人さまざまですが、しかし、これを成立させるのは丈夫なカラダがあってこそ。この大切な財産のために、ヤクルト、ジョアばかりでなく食品、住宅、医薬品、化粧品、各種事業と多角的に取りくみ、明るい生活づくりに努力を重ねています。

ヤクルト

本社・東京都港区東新橋1の1の19〒105☎03(574)8960
ヤクルト

第三章　分裂と混迷から日韓へ

ブントの分裂と再編

共産主義者同盟は七月下旬の第五回大会を最後に、劇的崩壊をとげた。文字通り、安保とともに登場し、安保とともに自壊した。

共産同の綱領的立脚点は、平和共存・一国社会主義→世界革命、二段階革命→一段階革命、議会主義→プロ独、平和革命→暴力革命スターリン主義→レーニン主義復権……だった。これを立脚点に、学生運動先駆性論＝同盟軍規定による反帝実力闘争を媒介にして労働者党建設をめざした。だが、この路線は結実しなかった。共産同は労働者への影響力をもつことができず、小ブル学生運動のヘゲモニーを獲得したにすぎなかった。

とはいえ、共産同が指導した六〇年安保全学連のたたかいは、たとえそのたたかいが小ブル急進主義的学生運動だったとしても、問題はその運動が内包するその小ブル主義自体にあったのではない。その運動を媒介にして獲得すべき党主体の内実にあった。共産同はこの総括をめぐって三分解し、深刻な党内闘争を開始した。

革通派は、敗北の原因は、闘争の最終局面に六・一八国会再突入方針を再提起し、かつそれを貫徹しようとしなかった戦術上の日和見主義、なかんずく、共産同の指導理論だった姫岡国家独占資本主義論に示される自己金融論を柱とした資本の延命策をもって現代資本主義の特長とみなすその日和見主義にあった、と批判し、自らは星野論文（星野中「安保闘争の挫折と池田内閣の成立」）を対置して党内闘争の口火を切った。

中間派の**プロ通派**は、総括の環は国家独占資本主義論にはないし、ブント全学連のたたかいは正当に評価されるべきだ。これを無媒介的に総括しようとする星野論文は〝産湯とともに赤子を流すものだ〟として、共産同の遺産を墨守する立場から、革通派の極左主義に反発した。

戦旗派は同盟労対部グループを中心に結成された。学生運動を中心にした革通―プロ通両派の論争は不毛だとして、青山論文（青山到「同盟の革命的再生と統一のために」）、森論文（森茂「いかなる内容を獲得するのか」）によって革共同全国委に移行、合流していった。その主張は、全学連の闘争はたんなる小ブル急進主義＝自然発生主義への拝跪だった、その闘争を指導した共産同はスターリン主義的偏向を根底的に自己批判せず、それゆえに、反帝反スタ綱領ももたず、党のためのたたかいを欠落させるという党組織論上の日和見主義的誤りを犯した……と主張する革共同全国委の批判を受入れるべきだ、というものだった。

このように、共産同党内闘争は、中央レベルでは学連書記局、東大、労対グループとほぼ三分解したが、その他関西派、電通グループ、明大・中大独立社学同、共産主義の旗派

（のち全国社研→マル労同）などの諸分派が相前後して派生した。

その後、プロ通派は解散決議をし、一部が革共同全国委へ合流した。この結果、六一年四月全学連二七中委において、それまで中央委員七十名中わずか十名前後にすぎなかったマル学同が主導権を確立、ここにマル学同全学連＝反帝反スタ学生運動が誕生、ここに党派全学連の第一歩がはじまった。

この反帝反スタ学生運動論は、とうてい学生運動の指導理論とはなりえなかった。「プロレタリアートによる学生の獲得」「プロレタリア的人間の論理」という修養主義によって、革命主体の自己形成、自己変革、階級形成をかちとり、これを媒介にして反帝反スタの党形成を同心円的、算術級数的に拡大していく党路線である。このイデオロギー主義的であるがゆえに宗派主義的運動組織論は、多くの学生活動家を吸引するどころか、激しい反発を呼びおこした。そのために、ブント全学連に代わったマル同全学連は、決して六一年以後の混迷を止揚するものとはならず、それに拍車をかける結果となった。

マル学同対反マル学同の最初の激突は六一年七月、全学連第十七回大会だった。大会はマル学同、反マル学同、日共の三つ巴えの対決となった。反日共各派は、日共代々木派にたいしては共同してたたかった。しかし、日共がボイコットしたあとは、両者は激しく対立した。最後には角材を用いて大会を防衛したマル学同の単独大会で終わった。この日を契機にして、学生運動は向う数年間の冬の時代に入った。

とはいえ、この全学連大会に示された痛苦な現象は、たんに事態の表層のひとコマにすぎない。その本質は、まさに六〇年安保闘争の高揚と敗退のなかで、日本をふくめた全世界の国際共産主義運動、なかんずく帝国主義本国革命運動が例外なく直面した試練の、そのささやかな投影という点にあった。このことは、現代においてなお存続し続けている左翼諸党派が、すべて六〇年安保闘争のなかに源流＝出発点をもっているという事実からも裏づけられる。これら諸党派は例外なく、過去の国際共産主義運動総路線の根底的総括をふまえて、世界帝国主義再編の激動のなかで、帝国主義本国革命＝植民地革命を結合した真の世界革命を担いうる革命路線、革命党建設に向けて、その困難な第一歩を開始せざるをえなかったのである。

まず、共産同＝社学同の再編からみていこう。労働者、学生グループが四分五裂していくなかで、いち早く再建をかちとったのは**関西社学同**だった。彼らはその独自な安保闘争総括＝政治過程論（京都府学連）によって組織体制を維持し、関西の学生運動を引続いて領導し、やがては、共産同再建、三派全学連再建のなかで主要な一翼を担った。

政治過程論は、学生運動の歴史的政治的役割を正当に位置づけつつ六〇年安保闘争を総括し、運動の高次化→階級意識の高次化として、これを認識論的、運動組織論的に論理化したものである。

これに反して、東京社学同グループはめまぐるしいほどの再編過程をたどった。六一年八月社学同機関誌「希望」創刊、同十二月社学同再建準備委員会機関誌「SECT No.6」創刊。社学同は、この反前衛主義＝事務局派との党内闘争を経て、六二年九月、全国大会をかちとった。しかし、六三年十月、社学同東京大会で、革通派系のマル戦派と反マル戦派が分裂し、反マル戦派は渚論文（渚雪彦「帝

国主義列強の抗争の現局面―日朝闘争と革命闘争の勝利のために」）のもとに社学同ML派を結成。東京社学同は**マル戦派、ML派、独立派**の三潮流となった。

渚論文は、旧革通派（宇野弘蔵→大内力）が国家独占資本主義を財政金融政策を軸にした資本主義の政策展開→政策紛砕としての反政府闘争を主張するのは、構改派となんら変わらない、ぶちこわすのと改革の差でしかない……という批判から、大内理論と対立していた同じ宇野派の鈴木鴻一郎の原理論に依拠して、主観的には「没落期の帝国主義」分析を試みようとした。しかし、渚論文は、植民地革命を評価しつつも、日米帝国主義間の矛盾を過大視したために、日本帝国主義の南朝鮮侵略植民地化論→日韓階級決戦論の立場から、原潜寄港のもつ意味を過少評価した。そのために日米反革命同盟論→日帝肩替り論からの批判にさらされ、やがて葬り去られた。

東京社学同は、六四年四月労働者グループ（電通、青年社他）との合流を経て、反マル戦派フラクとして最大組織になり、六五年三月には独立派と統一して**社学同統一派**を結成、さらに、六五年八月に第二次ブント構想のもとに関西共産同＝社学同と統一し、**共産同統一委員会**を結成、ついにその一年後の六六年九月、マル戦派と組織統一を実現し、**第二次ブント**再建をかちとった。

共産同再建大会の基調は、マル戦派が擁立した岩田帝国主義論だった。「日帝フンヅマリ論」と称されたこの危機論型帝国主義論は、「一国→アジア→世界」（三段ロケット論）を骨子とした「生活と権利の実力防衛闘争論」をもって戦略路線とした。この岩田帝国主義論は、初期の第二次ブントばかりでなく、法政大宇野派の影響をうけた中核派藤掛論文などにとり入れられ、中核派の基調になっていった。しかし、共産同内では岩田帝国主義論はベトナム反戦闘争の高揚と深化のなかで、厳しく批判されていった。

なお、先の社学同ML派のうち、独立派との統一→共産同再建に反対したグループは、そのまま社学同ML派を継承し、やがて、毛沢東主義に傾斜、六八年には**ML同盟＝学生解放戦線**を結成した。

次に革共同諸派をみていこう。まず、革共同全国委＝マル学同は全学連の主導権を確立したが、六一年政暴法闘争の過程で共学同問題をめぐって最初の内部対立を露呈。六二年九月、三全総で政治局対立が表面化。同年十一月、大管法東大銀杏並木闘争の統一行動参加をめぐる党内闘争を経て、ついに六三年一月、**中核派**と**革マル派**に分裂する。これが革共同第三次分裂である。主要な対立点は、産別と地区党、大衆運動の発展と党形成をめぐる問題だった。両派は共に反帝反スタを堅持したが、中核派が革共同主義＝党物神崇拝主義の止揚と大衆闘争の戦闘的展開を主張したのにたいし、革マル派は下部細胞→地区党→政治局に体現される革共同主義路線をますます純化していった。

革共同関西派＝社学同左翼反対派（レフト）は、六〇年十一月その名称を**第四インター日本支部（革共同）**＝**青年インター**と改称、第四インターのパブロ主義を継承、学民協グループは国際主義共産党と改称し、それぞれ社青同への加入戦術をとった。その後、分裂再編を経て、六五年八月第四インター日本支部多数派＝学生インター、同BL派＝武装蜂起準備委員会（プロ軍団）などに分裂、前者が第四インターを継承した。

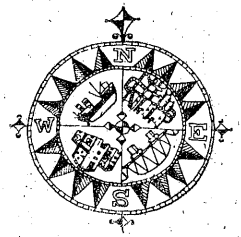
次は社青同である。社青同は六〇年安保闘

争直後に社会党青年部組織として結成された。学生班協議会は早大、東大を中心に徐々に組織を拡大し、解放派分派はやがて社青同中央＝協会派との対立をふかめ、六六年九月都大会で協会派と分裂し、**社青同解放派**を結成、独自の党建設をめざした。当初この社青同学生班協議会は、六一年、滝口論文（滝口弘人「共産主義＝革命的マルクス主義の旗を奪還する為の闘争宣言」）でその理論的基礎を確立した。滝口論文は、労農派マルクス主義を評価し、社民への加入戦術によって社民の影響下にある労働者に働きかけることを組織路線とした。また、綱領路線的には反スタ、反トロ、反レーニン主義に立ち、その前衛党論は官僚主義、外部注入論を否定したローザ主義だった。また彼らはレーニン主義を「思想と理論の二元論」と批判し、イデオロギー主義の立場から社会権力論＝疎外革命論をもって社民への加入戦術を論理化した点に主な党派性があった。この社民左派的体質としての戦闘性が、社民傍系でありながら、革命的左翼への合流を可能とするひとつの要因だった。

次は構改諸派である。日共党内闘争は六〇年十二月八一カ国共産党宣言（モスクワ声明）、六一年日共第八回大会を契機にして一挙に全面化し、構改派脱党＝除名事件に発展。さらに六二年キューバ危機を媒介にした中ソ対立の激化は、日共党内闘争を加速させた。このような過程のなかで、全自連は六一年七月全学連第十七回大会直後に自らの手で全自連解体を宣言。全自連執行部＝構改派は新たに全学連再建準備委員会を結成して構改派学生運動の再建にのりだした。これによって日共学生運動は一時的に消滅した。その後、六二年一月社革新のもとに**共産主義青年同盟（＝共青）**、六二年五月統社同のもとに**社会主義学生戦線（＝フロント）**が結成され、両者は構改連合を形成した。さらに、六五年五月日本のこえ＝**民学同**、六六年七月**社労同**＝**共学同**、六七年二月**共労党**＝**プロ学同**が結成された。ただこれら構改諸派は、厳密な意味では革命的左翼とは規定しえない。構改諸派が綱領路線のうえでプロ独―世界革命をめざす政治的潮流へ合流をかちとったのは、六八年以降の激動を通じてのことである。

日韓闘争と反戦青年委員会の結成

以上概括したように、六〇年安保闘争以後



海に陸に
世界に
伸びる！

日立造船

本社
大阪市西区江戸堀1－6－14
電話06(443)8051

支社
東京都千代田区一ッ橋1-1-1
電話03(213)6611

の党派再編過程は決して平担な道ではなかった。革命的左翼はこの過酷な試練をかいくぐりながら、血のにじむような苦闘を経て、徐々に党形成をかちとっていったのだった。

岸内閣のあとをうけて登場した池田内閣は、所得倍増のバラ色の幻想をかかげつつ、政暴法、大管法、憲法公聴会、原潜寄港、日韓条約締結へと反動攻勢をかけてきた。このなかで、学生運動は新しい再編をみせた。

マル学同は独自路線を志向、これにたいして反マル学同グループ＝社学同、社青同、構改は、全学連第十七回大会から六カ月後、二つの都学連大会から二カ月後の六一年十二月全国自治会代表者会議＝全自代を開催して三派連合を形成した。ところが、この三派連合は翌六二年七月大管法阻止全国学生共闘会議のなかで、改憲阻止闘争をめぐる路線対立のために、社学同がヘルメットと角材で他二派を追いだすという連合のモロさを露呈したのである。

その後、学生運動は六二年秋の大管法闘争で高揚をかちとった。十一・三〇東大銀杏並木集会六千名、十二・六京大全学封鎖（不発）などはその頂点だった。この大管法闘争によって学生運動においては安後世代＝大管法世代の登場さえ語られた。

六三年に入って、学生戦線はさらに新しい再編をかちとった。革共同全国委＝マル学同の分裂、東京社学同第一次再建を経て、同年八月全国学生反戦集会（広島）が開催された。この集会では、構改派が三派連合から脱落すると同時に、新たに革マル派と訣別した中核派が合流をかちとり、新三派連合が形成された。その後、この**新三派連合**は、六四年三月、日韓全自代、同六月三派都学連再建準備大会をかちとった。こうして、革命的左翼は戦闘的学生運動再建に向けて始動を開始、徐々にあの出口なき迷路のドン底からはい上る糸口をつかんだ。

この時期の困難さはこれを担いきった者だけが共有しえた試練だった。党派闘争も、六三年十二月同志社大民青による社学同への凶暴な集団リンチ事件、六四年七月の早大七・二事件（革マル派にたいする中核、社青同、フロント連合によるゲバルト事件）などが多発し、政治状況の困難さをみせつけた。

六四年秋の学生運動はドン底からの離脱をみせた。九月原潜寄港阻止横須賀集会に二千名の動員をかちとったのをはじめとして、一〇・二九ゼネスト、十一・一一、十一・一二など数千名の動員をかちとった。これらの闘争は、質量ともに一段と強化された機動隊の密集したカベを紛砕してたたかいとられた。

新三派連合はこれからの激闘を経て六四年十月、同十二月、全自代を開催、**原潜阻止・日韓会談反対全国学生共闘会議**を結成した。とくに、十二月全自代には革マル派を除く諸党派が参加した。席上、社学同が共闘会議の発展強化をもって当面の学生運動再建方針としたのにたいして、中核派は三派全学連の即時結成を主張、両者激しく対立した。この対立は、結局のところは社学同内の再編が流動化していることに帰因した。なお、日共民青は**平民学連**を経て、同年十二月に七中委イズム再来を告げる民青全学連を再建。これによって二つの全学連、一つの共闘会議が生れたことになる。

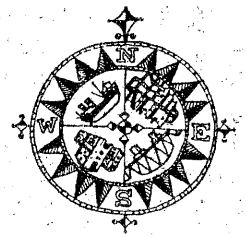
六五年の学生運動は、新しい時代のはじまりであり、夜明けだった。〝安後時代〟は終り、混迷と低迷に終止符をうち、新しい飛躍に向けて転回を開始した。

六一年の再建、六二年大管法の一時的高揚、六三年のドン底、六四年の上向……というのがこれまでの概括的な流れだった。革命的左翼を体現する学生運動が歩んだ、この過去四年間の足跡は、いうまでもなく六〇年安保闘争の総括をめぐる論争を底流にしていた。その限りで〝六〇年安保〟は絶えずつきまとっていた。党派闘争は、ときには大衆の可視領域で、ときには組織の深奥で展開され、地下水のごとく相互に滲透し合った。さまざまな結合、分離、拮抗は、すべて安保闘争がもたらした結果産物であり、党派闘争はすべて安保闘争の総括を基軸にして展開された。日韓＝ボラ潜論争、中ソ論争評価、統一戦線論、運動組織論、その他当面する階級闘争の方針をめぐる論争は、すべて例外ではなかった。諸党派や諸分派はこれを媒介にして、自己整序と組織再編をかちとっていった。また、この過程にひとつの時代区分を与えるものは他ならぬ階級闘争の高揚である。だから、この階級闘争の高揚こそは、あらゆる意味でひとつの時代の終焉であると同時に、確実にひとつの時代のはじまりである。

六五年の二・一七椎名訪韓阻止羽田現地闘争で幕をあけたこの年の街頭闘争は、秋の日韓国会の大詰めを迎え、最後の激闘を展開した。とくに、革命的左翼は、十月―十一月闘争では二千―三千名規模の動員をもって、六〇安保以来久しぶりに国会議面前の坐り込み闘争をかちとり、その先頭にたってたたかった。この坐り込み闘争は画期的な意義をもっていた。六〇年以後国家権力の暴力的な肥大化によって国会デモが厳禁され、国会周辺が反革命聖域化し、赤旗や**ハチマキ**すらむしりとられ、請願という名の羊の行進＝サンドイッチ規制を余儀なくされていた。だから、これらの闘争は、こうした当時の運動の常態化した停滞をうち破るべくしてかちとられたのであり、その限りで、戦闘的学生運動は六〇年安保闘争の挫折をのりこえて完全な浮上をかちとったといえよう。

また、六五年の学生運動は新しい質的飛躍の出発点となった。医学連二千名が医師法改悪阻止闘争に決起したのをはじめとして、後述するように学園闘争が全国各地で火の手をあげたからである。

革命的左翼はこれらの激闘を媒介にして、自己の政治的再編をかちとった。まず先にみたように共産同は、六五年三月社学同再建→



海に陸に
世界に
伸びる！

日立造船

本社
大阪市西区江戸堀1－6－14
電話06(443)8051

支社
東京都千代田区一ッ橋1-1-1
電話03(213)6611

共産同統一委員会を結成。社青同解放派は、同十月社青同協会派と訣別して分派結成を宣言。同二月第四インター再建……などである。革命的左翼はこうした党派再編を経て、二つの注目すべき組織を結成した。闘う都学連再建と反戦青年委員会結成である。

三派都学連は六五年七月に再建された。それがもつ歴史的意義は、多言を費やすまでもない。

次の閉会宣言をして語らせればよい。

「東京都学連は遂に再建された。……安保後の都学連の解体と分裂の中で東京都の学生運動のかかえた困難な課題を自らの力で解決せんと主体的に闘い抜いてきた者にとって、都学連再建は感激の涙なしには語れない……」

この三派都学連再建は三派全学連再建への重要なステップであることはいうまでもない。

また反戦青年委員会はその一ヵ月後に結成された。社会党青少年局、総評青年部、社青同の呼びかけに応えて、労組団体四十二、左翼諸団体十を中心に「ベトナム戦争反対、日韓批准阻止のための反戦青年委員会」として発足した。とはいえ、この統一戦線は所詮は社会党―総評のワク内にあった。その後の事態の推移が示すように、戦闘的青年労働者の広範な結集のなかで、官僚的締めつけは強化され自壊した。しかし、この鬼っ子組織は、親の思惑をはるかにのりこえて見事に成長し、三派全学連とともに、来たるべき激闘をきりひらいた。

六五年の学生運動の高揚を示すもうひとつの指標は、先にふれた全国学園闘争の開始である。まず、六五年一月慶大全塾闘争委員会は、学費値上阻止のために全学スト、学園封鎖、試験ボイコット宣言を発し、慶大学生運動史上初の全学バリケード闘争に突入した。この慶大闘争に呼応して、あらゆるスローガンを掲げて闘争は全国に波及した。

一月電通大（現職自衛隊教官赴任）、静大（寮炊事婦国費雇用）、二月高崎経済大（大量不正入学事件）、四月東大・京大・早大（ロストウ講演阻止）、五月近畿大（総長世襲制粉砕）、長崎大（学館運営）、東京学生会館移転阻止闘争、六月山形大（学寮問題）、七月都留文科大（市当局学内介入事件）……。

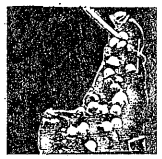
これらの学園闘争は、十二月早大、中大学館闘争として大爆発、あの六〇年代末の全国学園闘争の偉大な先駆となった。

学園闘争の偉大な先駆となった。

学園闘争は、次の三つの客体的・主体的な政治的動因を内包していた。第一は、日韓締結→日本帝国主義の侵略反革命体制の確立→教育の帝国主義的再編をめぐる個別学園における対決。第二は、高度成長下の私学経営の矛盾集積→大衆収奪による処理→全面対決。第三は、大学のマスプロ化と大学の特権的地位の崩壊→学生の不満爆発、運動の大衆化、意識化、先鋭化。

このようにして、学園闘争の戦端はきっておとされた。学生運動はいまや確実に過去と訣別し、新しい第三創成期の前夜を迎えることになった。全学連創設、六〇年安保、そしてあの六〇年代後期の激闘の前夜を……。

第四章　三派全学連の結成―激動の序曲―



全学連再建大会

六六年の街頭政治闘争は、運動の次なる高揚をめざして助走期に入った。とはいえ、学生運動自体は、学園闘争という新しい転回軸を獲得することによって深化、拡大した。

早大闘争は、文学部バリケード撤去を最後に百五十日間にわたる激闘の幕を閉じた。しかし、新たな学園闘争が続々と戦列に加わった。

横浜国大（教員養成制度改悪阻止全学スト）慶大（専門課目削減反対闘争）立教大（学館・生協闘争）東大（五月祭警官パトロール抗議）青山学院大（処分反対闘争）明大（学費値上げ反対闘争）京大（自衛官入学反対・フォード財団委託研究反対）など、学園闘争は燎原の火のように燃え上がった。

三派連合は、このような学園闘争の高揚を背景にして、当面最大の課題である三派全学連結成に向けて、最後の努力をふりしぼった。六六年三月、都学連第十五回大会は「十二月全学連再建」の方針をうちだし、次のような宣言を発した。

「……過去は『分裂と混迷』の季節だったが、それは歴史へ切りこんだ者のみが迎える新生への過程に他ならない。……全国の学友諸君！　『全学連』とは、宗教集団や政治組織に全学連の名を冠せ、党派の官僚体制を作り上げることではない。帝国主義の末端までの支配に触発されて勃発した各地各種の大衆闘争の基盤の上に、その最後的勝利へ向けて闘争拡大を保障するためにのみ、それは建設されなければならない。……本年十二月を目標に『全日本学生自治会総連合』の下からの再建を断乎として追求することをここに宣言する！」

この宣言から九ヵ月後の六六年十二月、全国三十五大学、七十一自治会、千八百名を結集して、三派全学連はついに再建された。革マル全学連、民青全学連に次ぐ、第三の全学連である。第三の創成期を担うべく、三派連合による、この第三の全学連の再建は画期的だった。実に六年ぶり、血のにじむような苦闘のはてにかちとられた偉大な歴史的成果である。大会実行委員長が開会を宣言するや、喚声と拍手が会場をゆるがした。すべてのたたかう人民の期待と熱望を一身に体現して、たたかう全学連は不死鳥のごとくよみがえった。

この再建の歴史的意義を知るには、当時の学生戦線の実体をみれば十分だろう。

「革命的評論サークル」と他称された革マル全学連は、わずか二十自治会を掌握していたにすぎない。彼らは、三派連合の大樹の下に姿を映しだしたカゲでしかない。他人がいのちがけで手に入れた果実を狙うハイエナのごとく、三派連合の隊列のはるか後方から右翼的にあれこれ評論し、他党派批判をもって自己を置きかえ、その批判のおこぼれを糧とし

て生きのびた……と批判された。だから、彼らは決して階級情勢を自らきりひらかなかった。彼らが好んで用いる「カクメイテキ」なるセリフは、その右翼的体質をカムフラージュするための擬装の名辞でしかなかったしその宗派主義は、度し難いセクト主義を必然化したのである。

民青全学連はいうに及ばなかった。「反動的な学問を学ぶことにも意義がある」とするあの珍妙な「勉学闘争論」（前衛）のもとで、勉強することをもって民青同盟員の義務として、日共のカリスマ的支配の強化と勢力拡大に血道をあげた。そんなわけで、六七年前期の学園闘争では、四十校中わずか数校で闘争ヘゲモニーを獲得したにすぎず、民青の歌声は学園キャンパスから絶えて久しかった。

構改派のうち、大阪府学連を唯一の拠点とした民学同は、民青全学連大会にオブザーバー参加を申し入れて断られた。他の構改諸派は、ポツダム自治会の亡霊にとりつかれ、「派閥セクト主義反対＝全国単一全学連再建」なる空論を主張し、自治会共闘組織にとどまった。たたかわざる者ゆえに掲げうる観念＝理想の旗というわけだ。三派全学連はこのような政治指導のカオスのなかで再建をかちとったのである。

大会は初日から激しい論争が渦巻いた。まず、全学連の組織継承をめぐって紛糾した。中核派は第二十回大会を、社学同は第十七回大会を、社青同解放派は第一回大会をそれぞれ主張した。この論争は表面的には数字争いでしかなかった。しかし、各派にとって妥協の余地はなかった。どのつまりは、各党派は六〇年安保闘争の総括と、その総括を実践することによってのみ自己たりえたのである。だから、この継承問題は論争の集約点だった。結局は、たんに再建大会と呼称された。

大会は「侵略と抑圧に抗し、学生の生活と権利を守れ」を基本スローガンとし、次の三点を再建大会路線とした。

①われわれの闘いは、政府・支配者階級の攻撃に対決し、学生・人民の生活と権利を守る闘いである。

②この闘いは弾圧と、非難と、孤立に耐えぬく実力闘争以外に貫徹しえない。

③そのための闘争組織をつくり、闘いの砦＝自治会に結集してたたかう。

なお、中執構成は三派各九名、書記局構成は社学同、中核各五名、社青同解放派三名だった。MLと第四インター＝社青同国際主義派は執行部人事に加わらなかった。

さて、三派全学連は順調にすべりだしたかにみえた。ところが、再建二ヵ月目にして思わぬ椿事に出くわした。

全学連委員長の出身校である明大学費闘争の最終局面で、自治会執行部がボス交渉によって妥結宣言を発し、全学連委員長自身の責任が追及された。この妥協事件をめぐって委員長選出母体の社学同はきわめて不利な立場に追いこまれ、ついに、社学同は委員長ポストを失うことになった。代わって登場したのが中核派委員長である。中核派は〝敵失〟によって委員長ポストを獲得し、以後、有利な立場に立った。とくに、中核派はあの一〇・八第一次羽田闘争以後、他党派から「闘争をショー化している」と批判されたが、彼らはその批判を黙殺して、その地位を社会的にも最大限活用し、勢力伸長をはかった。

それはともかくとして、明大事件はたんに椿事という以上に、重要な教訓をのこした。

過去二年間の学園闘争は、多くの場合は自

然発生的なものであり、必ずしも諸党派によって目的意識的に組織されたものではなかった。このことから分るように、街頭政治闘争と個別学園闘争の位置づけと、相互の関連性は、党派の側においてきわめて不十分だった。三派全学連も例外ではなく、方針提起を迫られていた。とりわけ、学園闘争のよりラディカルな展開は、国家権力の全面的介入を引出し、一キャンパスの闘争は否応なく、これとの全面的対決となった。

早大、東学館、高崎経済大を頂点として、六七年の国際基督教大、佐賀大、法政大、東洋大などの学園闘争は、バリスト→機動隊導入→全面衝突へとエスカレートし、その厚いカベのまえで後退し、敗北していった。だから、闘争はこの対権力との激闘をうち抜かないかぎり、勝利はなかった。このことは、個別学園闘争がそれ自体としてひとつの経済主義的限界性を内包していたことを示すと同時に、学園闘争が、その政治の質において自己を極大限にまで昇華せざるをえないという冷厳な現実を露呈した。

明大闘争はその一歩手前で妥協の道を選んだ。これにたいして批判が集中した。中核派の方針はこうだった。

「右翼体育会、ガードマンから、はては国家権力を使って暴力的に身構えた学校当局の最後的拠り所をつき崩す闘いは、唯一つ学生の大衆的な実力闘争の発展であり……闘いそのものをより目的化し、自覚化され……目的意識と自覚によって武装された闘いが明大闘争に持ちこまれること……」

この中核派の精神主義的な方針にたいして、社学同の方針もほとんど変わらなかったといってよい。

「大衆自らの闘争ヘゲモニーによる実力抵抗部隊の建設（こそが）……来るべき階級決戦をプロレタリア日本革命に転化する主要部隊に発展するであろう」

このようにこの段階の実力闘争路線は、たんなるその志向性、目的意識性、自覚による武装闘争ということが語られただけで、明確に戦略路線化されてはいなかった。「武装ゲバルトによる実力闘争」が、理論的にも実践的にもかちとられるには、もうひとつの階梯をのぼりつめることが必要だった。その意味で、明大事件は、過渡期を象徴する事件だった。

熾烈な主導権争い

六七年に入ってベトナム戦争は泥沼化の様相を呈してきた。米帝国主義の戦争予算は史上最高額を計上し、派遣米軍も、朝鮮戦争の四十七万二千名を上回った。こうしたなかで、六七年一月ベトナム反戦第一波闘争は、三派全学連四百名によって展開された。この日のたたかいは、あの激動の序曲となった一〇・八第一次羽田闘争へと確実に連動していった。

「学生運動がやっと陽の目をみた……」とはある古参活動家の偽らざる実感だった。当時、多くの人たちはあの激動の序曲＝一〇・八羽田闘争は、ある日突然のできごとと考えた。しかし、決してそうではない。第一次羽田闘争こそは、六〇年安保の挫折、新三派連合形成、三派全学連再建にいたる、実に六年間にわたる苦闘を経て、しかもその後向こう九ヵ月にわたる激闘のすえにようやく掌中にすることができた歴史の栄光だったからだ。

革命的左翼は、引続いて第二波闘争をかちとった。二・二六砂川基地拡張阻止闘争において全学連＝反戦は、六〇年安保闘争以来はじめて、独自集会、独自デモをかちとり、こ

の闘争で「反戦勢力」の源流をつくりだした。地元反対同盟青木行動隊長は、千五百名の青年労働者、学生、農民をまえに次のような挨拶をした。

「あの十一年まえの砂川闘争以来、こんなに前進した集会はなかった……。これまでは抗議集会といっても基地に近よることができず、立川市役所前の広場などに集って、犬の遠吠えをするだけでした。それが今日はどうでしょう。このようにして今日は滑走路のまえで堂々と集会をやり抜いたのです」

新学期あけの春の闘争は、総評主催四・二八沖縄返還要求大会からはじまった。その後三派と革マルの激突となった五・二六砂川闘争の都心デモを経て、五・二八砂川基地拡張阻止青年学生総決起集会が現地で開催された。

この日、集会は二つもたれた。三派全学連＝東京地区反戦などの集会と、日共主催の集会である。当初、この日の集会は社共大統一行動として三万名を結集して開催される予定だった。ところが、日共の破廉恥なセクト主義によって不発に終り、結局、地元反対同盟抜きの、全学連＝反戦共催約六千名、日共主催二万名の集会、デモとなってしまった。この日以来、地元反対同盟と革命的左翼は熱い連帯の絆で結ばれた。全学連＝反戦は全国動員で先進的農民の期待に応えた。二・二六闘争と同じように、この日も、負傷者四百名という狂暴化した機動隊の大弾圧にひるむことなく、最後までたたかった。

全学連＝反戦は、その後、六月九日、十五日、二十日、二十五日と連続闘争をたたかった。そして、六・三〇佐藤栄作の第一次東南アジア訪問阻止羽田闘争をうち抜いた。新聞活字にもならなかったこの闘争は、きわめて重要な意味をもっていた。

この日こそは、日米韓反革命軍事同盟再編強化をめざして、日帝のチャンピオン佐藤が反共諸国行脚を開始した日である。全学連＝反戦は、真向うからこれに挑戦状をたたきつけたのである。

七月九日、砂川基地拡張阻止大集会が雨天のなかでかちとられた。この日は社共統一行動がなり、全学連＝反戦も合流した。革命的左翼は一万二千名中半数の動員をかちとった。そして、第一次、第二次砂川闘争と同様に機動隊と激突し、白兵戦を展開した。機動隊は、立川駅前の解散集会に襲いかかり、全学連＝反戦は投石で応戦した。この日の闘争こそは、既成左翼や労働組合レベルの動員の無力さを暴露するとともに、反戦青年委員会が組合のしがらみをうち破り、「自立、創意、工夫」のもとに独自の戦闘部隊として、階級闘争の舞台に第三勢力として登場したことを示している。

三派全学連は、一方でこのような激闘を展開しながら、他方で、その激闘をうち抜くためにこそ激しい党派闘争を展開した。

七月、三派全学連大会は、ヤジ、怒号、つかみあいの場となった。帝国主義の現段階の規定、階級情勢の把握、ベトナム戦争の性格規定、学園闘争の方針、戦術……などをめぐって激論をたたかわせた。たとえば、ベトナム戦争は侵略戦争か、スタと帝の代理戦争か、革命戦争か。ベトナム侵略加担阻止か、参戦国化反対か……。また、学園闘争については、大学の帝国主義的再編か、真理の大学論か、産学協同路線粉砕か、大学防衛論か、教育闘争論か……。

なお、この大会では中執構成が、中核十一、社学同九、解放派五、第四インター二と

なり、中核派が相対多数となった。

秋の闘争は、九・七佐藤訪韓実力阻止闘争ではじまった。三派全学連五百名はサンドイッチ攻撃とたたかい、投石で応戦、かの革マル百名のプラカードデモと好個な対照をみせた。

その後、九・二〇佐藤東南アジア訪問実力阻止闘争を経て、ついに、あの一〇・八第一次羽田闘争がかちとられた。

◆最近の機関紙から（一）

「赤軍」（77年6月5日）
共産主義者同盟赤軍派（プロ革）
・―朝鮮侵略反革命阻止全国政治共闘結成一周年―
・沖縄、三里塚、狭山決戦勝利！
・中央総決起集会へ結集せよ！
・三里塚における4日間戦闘の宣戦布告を反帝反ファシズム社会主義革命戦争の第二歩へ！
・朝鮮南部人民民主主義革命を支持し、中国―朝鮮北部の社会主義継続革命＝根拠地化と結合し、日帝の朝鮮侵略反革命と天皇制ファシズム化を第二次前決で打ち破れ！
・社会主義革命戦争を推進し、武装蜂起―革命軍―ソヴィエトで臨時革命政府樹立！
・人民鉄塔破壊を徹底的に糾弾する！
・人民戦士東山さん虐殺徹底弾劾！
・革命的報復戦貫徹！

「戦旗」（5月20日）
共産主義者同盟（戦旗派）
・5・29東山君追悼戦！
・破壊・虐殺に対し全人民の怒り炸裂！五・六以来連日の報復戦闘い抜かれる!!
・東山君虐殺糾弾・鉄塔破壊弾劾！
・福田反革命の総攻撃を打破る年内開港絶対阻止戦の大爆発を！

「戦旗」（6月5日）
共産主義者同盟（戦旗派）
・日帝―藤林の「退官前上告棄却」攻撃を打ち砕け
・6―7―8月狭山決戦へ
・6・15安保―日韓闘争の大高揚を血債かけ革命的内乱戦かちとれ
・5・13神田武装游撃戦闘の地平うけつぎ内乱・蜂起―内戦へ
・三里塚闘争に敵対する革マル派を弾劾する声明

みどりはふるさとの色。
青空と緑を守り、
電気の
安定供給をめざす。

北陸電力

第五章　一〇・八羽田―激動の開始―

〈羽田〉の衝撃

砂川闘争を経て、六七年七月、三派全学連大会は事実上、最後の大会といわれるほど各派の矛盾、対立が表面化し、その後、共闘はなされつつも統一指導はまったくなされず、各派独自の行動に移っていく。それは主要に、全学連委員長の斎藤克彦（ブント）から秋山勝行（中核派）への移行に伴い、中核派が全学連のヘゲモニーを握るという形で進行し、後の中核全学連、反帝全学連への分裂への端緒として表われたのである。

こうした三派全学連の一定の混乱の中で一〇・八羽田闘争は準備され爆発していった。一〇・八羽田闘争へ至る過程で、三派全学連は九月七日、佐藤訪台阻止闘争、九月二十日、第一次佐藤東南アジア訪問阻止闘争の二度に亘る羽田闘争を経験した。これは、まさに敗北と屈辱の経験であった。デモ隊は、それに数倍する機動隊の壁に阻まれ、サンドイッチ規制とテロ・リンチの中で、何もなす術を持てなかったからである。後に、反戦―全学連の「街頭実力武装闘争」―ヘルメット角材闘争といわれる戦術の背景に、こうした権力との直接的対峙における無力感への反撃という経験的要素があったことも記しておかなければならない。

その意味で一〇・八佐藤訪ベトナム阻止闘争は、機動隊の壁を如何に突破するのかという、実力闘争そのものを問うものとしてあった。同時に、この闘いは、「革命的左翼」が七〇年安保闘争についてなお明確な方針を提起し得なかった状況がこの一〇・八羽田闘争を起点とした一連の街頭実力武装闘争を通して明らかにされてくるという要因を持つものであった。

ここで一〇・八第一次羽田闘争へ至る若干の政治的背景を見ておこう。当時の日本階級闘争を規定するものとして次のことが挙げられる。①一九六五年日「韓」条約締結とその後の高度成長―資本蓄積として日本資本主義が明確に帝国主義として復活し、朝鮮侵略の準備を開始するという状況があった。②外的要因としてはベトナム侵略戦争の北爆再開を契機とした激発があり、ベトナム人民の民族解放闘争の進展もまた次々と伝えられ、日本人民がどのようにしてベトナム人民と連帯しうるのかが問われていた。

こうした政治状況の一大攻防の焦点が、一〇・八佐藤ベトナム訪問を許すのか、阻止するのかとして設定されたのである。

一九六七年、一〇月八日。第一次羽田闘争はあらゆる意味で衝撃的な闘いであった。六〇年安保闘争以降の混迷した革命的左翼が、既成社・共を完全に突破し、「第三の潮流」として敢然と登場し、七〇年安保闘争、七〇年代階級闘争の展望を切り拓くべく闘われたのであり、同時にその実力闘争は、権力の暴

力装置を如何に解体するのかという問題に解答を与える端緒を示したのであった。

全学連と反戦青年委員会五千名の闘いは、階級闘争七年の低迷をうち破って苦闘のすえに遂にかちとられたものである。激動の序幕は開始されたのだ。闘いの先頭に立ったのは、その日はじめて、ヘルメットと角材で武装した全学連千五百名の部隊であった。これまで機動隊の鉄カブト、ジュラルミンの盾、棍棒の完全武装に、素手とスクラムで闘ってきた全学連の学生は、機動隊の反革命ゲバルトに対して、遂に大衆武装による革命のゲバルトを対置することに成功したのである。この闘いによって、六〇年安保闘争直後から、六五年日韓闘争を経る中で飛躍的に強化されてきた機動隊のデモ鎮圧、サンドイッチ規制の下で強いられてきた数限りない屈辱を、学生たちは自ら武装した実力闘争によって粉砕し、鬱屈したエネルギーを一挙に解き放ったのである。戦いは、十月八日早朝、社学同の「鈴鹿森ランプ突破闘争」によって開始された。機動隊の阻止線を完全に突破したこの闘争は、中核派をはじめとした各派や反戦労働者に衝撃を与え、羽田空港に至る穴守橋、弁天橋、稲荷橋に全ての部隊が結集し、機動隊との激しい攻防戦が展開された。

しかし、わたしたちは、この戦いの中で新たな死者の名を聞かねばならなかった。京大生、山崎博昭。

引用をはじめよう。全学連委員長、秋山勝行は一〇・一七追悼集会にむけて次のアピールを送った。

「山崎君の虐殺に抗議し、その死をのりこえて進もうとする全ての闘う学生・人民に全学連は声明する。全学連は必ずやこの死に報い、この虐殺の本当の張本人を摘発し、粉砕するまで闘いぬくだろう、と。……そして時が経つにつれて羽田の正義者は誰であり、犯罪者がどちらの側であったかがますます明瞭に判別できるようになった。その中からあきらかになっていることは、かの全力を尽した全学連の死闘こそが佐藤首相の南ベトナム訪問を最も真剣に受けとめ、くい止めようとした力であり、その必死の努力が全国民に深刻に問いかけたということである。今や、われわれは一層声を大にして主張するだろう。全学連の羽田デモは日本人民が当然やらなければならないことを最も忠実に実行したのであり、戦争協力と再侵略を企む佐藤首相は、日本人民の総意に基き、羽田から飛び立つことを実力で阻止されてしかるべきであった、と。全学連の闘いはあまりにも正しく、佐藤首相の南ベトナム訪問こそはあまりにも許すべからざる犯罪行為だったのである。全学連が一切の困難をのりこえ、国家権力のどう猛な番犬、機動隊の暴力と闘い、全人民の利益と目的を貫き通すために死力をつくしたことは当然すぎる程、当然であった。国家権力は、この対立があまりにも鮮明であり、それが顕在化することを防ぐために必死に全学連に罪をなすりつけようとしている。『一部学生の暴走だ』、『学生が学生を殺した』など、あらゆるデマ宣伝を強め、理由なき不当弾圧で切りぬけようとしている。……」（秋山勝行「全日本・全世界の闘う学生・労働者人民へ」一〇・一七）

虐殺された山崎博昭の死は、その当初から「学生が学生を殺した」という圧倒的な権力のデマ宣伝とともに学生、労働者の耳に届けられた。しかし、ことの真実は、人民大衆の潜在的なエネルギーに対して大きな衝撃を与え先進的人民をして、憤激のルツボにたたき

とんだ。

十月十七日、日比谷野音に全学連、反戦青年委員会六千余名の結集をかちとるなかで「虐殺抗議山崎君追悼中央葬」が行なわれた。革共同・マル学同（中核派）・マル青労同のアピール「プロレタリア解放の若き戦士、故山崎博昭の霊に捧ぐ」は次のように言う。

「故山崎博昭同志。

十月八日、羽田空港の闘いの中で君は斃れた。佐藤首相の南ベトナム訪問阻止の闘いの先頭に立った君は、国家権力の凶暴な弾圧に屈せず闘い抜き、ついに十八才の貴い命を、プロレタリア解放のために捧げた。われわれは、同志山崎の貴い命を奪い、あまつさえその罪を共に闘った仲間におしつけようとしている権力の血に汚れた卑劣な攻撃に、煮えたぎる憤りを押えることができない。……

故山崎博昭同志。だが君の死は日本の労働者学生のベトナム反戦の決意を、全世界の人々に示す力となった。佐藤首相の南ベトナム訪問は、日本のベトナム侵略戦争参戦の決定的段階を画すものであり、十月八日の闘いは、日本が国をあげてベトナム人民殺りくに参加するのを拒否する、日本労働者人民の人間としての責任にかかわる闘いであった。だが、この日羽田に結集した、全学連・反戦青年委員会を中心とする五千の部隊だけが真剣にこの責任を自からのものとしただけであった。……

故山崎博昭同志。君の死は、あらためて全ての日本人民に、佐藤ベトナム訪問の重大な危険と、国家権力の恐るべき正体を衝撃をもって伝えた。十・八闘争を放棄し全学連・反戦を孤立させた革新陣営の弱点と、権力の尖兵と化して労働者人民に襲いかかる日共スターリン主義の正体を、またしてもあきらかにした。……

故山崎博昭同志。今工場で、学園で、地域で、悲しみと怒りにかえて、ゆっくりと起ち上りつつある日本の新らしい革命の足音を聞いてくれたまえ。われわれは君の遺志をつぎ、君の遺影を囲む全日本の労働者人民の先頭に立って、プロレタリア世界革命の勝利のために、断固として進むことを誓う」

最後に、兄、山崎健夫は次のように書いている。「羽田・弁天橋という名は、生涯俺の脳髄に、消えぬ烙印となった」と。それは、すべての先進的な学生、労働者にとっても同じ思いであった。

他方、日本共産党は、何をしていたか？「いったい彼らは十月八日に何をしていたのか。『赤旗祭り』と称して、闘いをサボタージュしていただけではなしに、完全に敵対する裏切りをしていたのではなかったか。日本共産党は羽田デモに敵対し、全学連と敵対し、もって、佐藤首相にこのうえない、後方の支援を与えているのである」（秋山勝行・前同）。ここに日本共産党は完全に革命の戦列から脱落し、自らの反革命性を人民の前に明確にしたのである。

爆発した街頭闘争

一〇・八羽田闘争は、多くの労働者や人民に様々な影響を与えるとともに、全学連、更に革命的左翼内部にも流動を形成していった。

中核派は「山崎博昭虐殺抗議」を軸とした「カンパニア国民葬」から、「ベトナム参戦国化阻止」として人民戦線的な方針をうち出し、続く一一・一二佐藤訪米阻止闘争を明確な方針の下に展開しきれなかった。このことは、北ベトナムをも「スターリン主義」とし

て切り捨て、ベトナム民族解放闘争を評価し得なかった限界と、「予定した方針以上の」攻防戦であった第一次羽田闘争において他党派にくらべて相対的に組織的心理的打撃をうけていたからである。確かに多くの部分において、この闘争は「予想した以上」の衝撃を与えたものであった。

他方、社学同―社青同は、「侵略加担阻止」「ベトナム反革命戦争阻止」として位置づけ、とくに、社学同は「組織された暴力とプロレタリア国際主義」として羽田闘争の総括を次のように提起していった。

①六〇年安保についで革命的左翼が階級闘争の前面に登場

②既成左翼の統制外にある市民層の抵抗闘争の存在

③反暴力キャンペーンの洪水のなかで、革命的左翼への人民大衆の深い共感

④プロレタリア人民大衆の直接行動主義の抬頭

⑤社共の無力化と大衆の不信感の増大→革命的左翼への共感と連帯

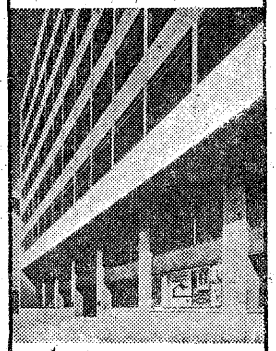
羽田闘争以前からみられた中核派―社学同・解放派反中核派連合の分岐は羽田闘争、そして続く六八年佐世保闘争においてより明確になっていく。

中核派は「現地集中闘争」を主張し、反中核派連合は「首都―現地全国闘争」を主張する。中核派はいわば「一点突破・全面展開」であり、反中核派連合は「全国政治闘争」であった。こうした相異を持ちつつも、佐世保エンタープライズ寄港阻止闘争は五日間に亘る徹底的な街頭実力闘争を展開し、多くの労働者・市民の共感を得て果敢に闘われ、続く王子野戦病院開設阻止闘争、三里塚闘争へとその質は引き継がれていった。

六七～六八年の一連の反戦―全学連の闘いはすぐれて街頭実力武装闘争の形態をとり、それだけに実力闘争の評価をめぐって多くの論争がなされ、そして分岐が形成されてくるのであった。

中核派、社学同、ML派等は、街頭実力武装闘争を評価する立場から「武装することによって七ヶ月の激動を勝利的に展開し、七〇年安保闘争を切りひらいた」（中核派）、「組織された暴力とプロレタリア国際主義の前進」（社学同）等として総括し、左派を形成していった。一方、革マル派は「街頭実力武装闘争

東関東を地盤に
関西・東北を
ネットする



常陽銀行
本店　水戸市南町2丁目
頭取　青鹿明司
店舗数　104か店

は小ブル急進主義であり、革命情勢を夢想している。現在は組織的力量を場所的にたくわえることが必要だ」として「待期主義的組織方針」（中核派）を出し、右派の立場に立った。構改派もまた、これに組したのであった。解放派は「いったん持ったゲバ棒を二度と手離そうとしないのは誤りである。問題は街頭のエネルギーを生産点に還流し、労働者と結合していくことが必要だ」として中間派に位置していく。

七〇年安保闘争前段階で「街頭実力武装闘争」が一方における「プロレタリア国際主義」とともに重要な論争課題になったのは、七〇年をめぐる政治的社会的状況に大きく規定されたものであった。即ち、七〇年安保は六〇年安保闘争とははっきりと峻別される構造を持っていた。

それはまず第一に、ドル・ポンド危機に象徴される国際通貨管理体制―IMF・GATT体制の崩壊の危機が具体化し、戦後世界体制そのものが根底から再編されんとしており、その再編の一環として日米安保条約が位置づけられたということである。具体的には、相対的安定期における〝六〇年安保〟が日帝の敗戦帝国主義からより自立への道を進むためのブルジョアジーからの攻撃であるならば、七〇年安保は、「日米共同反革命軍事同盟」として戦後世界体制の崩壊的危機を日帝自身も共同歩調をとって乗りきることを示したところの、いわば日帝の世界帝国主義の一翼への参加を公然と示したものといえるのである。

第二に、こうした戦後世界体制の崩壊的危機を促進した要因として、ベトナム革命の前進があり、チェ・ゲバラの「第二・第三のベトナムを」に象徴されるように、ベトナム革命戦争と呼応するように、フランス五月革命、ドゴール退陣、アメリカにおけるブラック・パンサー党、SDS、ウェザーマン等の黒人闘争、ベトナム反戦―「徴兵拒否」の闘い、学生運動の爆発、西ドイツ・SDSを中心とした学生運動の昂揚、さらに中南米ゲリラ闘争の頻発、マレーシア暴動等、先進国、第三世界を問わず、世界的な激動があった。同時に、チェコ問題にみられるスターリニズム体制の危機として露呈し、戦後世界体制そのものの根底的危機の真只中に、七〇年安保はあったのである。

第三に、七〇年安保の特徴として、日本帝国主義が六〇年代高度成長の結果として、過剰商品、過剰資本の滞貨を排出するという、文字通り帝国主義の本性を露わにし、対外政策において、具体的には朝鮮・アジアに向けた侵略・反革命の準備を開始したことである。そのために、沖縄の侵略前線基地化を日帝の第一級の課題とし、自衛隊の強化、国内における帝国主義的再編を、米帝を後盾に、貫徹せんとしていたのである。その意味で、資本主義・帝国主義の暴力装置が前面化されたのである。

こうした七〇年安保の特質が七〇年安保闘争を規定し、「街頭実力武装闘争」すなわち軍事の問題と、全世界の階級的昂揚およびスターリン主義、民族解放闘争の評価が、論争の課題としておしあげられたのである。

七〇年安保に向かうこうした状況、そして一〇・八羽田闘争以降の一連の街頭実力闘争の地平を踏まえて、如何に闘いを展開していくかが問われた一九六八年は、一方で分解・再編の時期でもあった。

三派全学連は、一九六八年七月、中核派の単独開催による「全学連全国大会」をもって

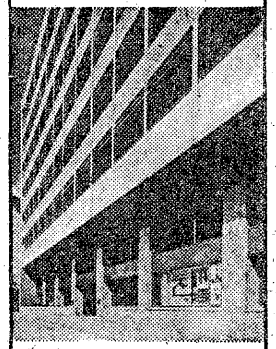
中核派と反帝全学連（社学同、解放派、ML派）に分裂、さらに社学同とML派、解放派の対立を経る中で分解を繰り返し、各党派全学連に縮小再生産されていったのである。

党派にあっては、ブントの分裂が典型であった。その分裂内容は民族解放闘争の評価と革命戦略をめぐる論争であった。すなわち再建ブントの指導理論であった岩田帝国主義論が、体制危機論―日帝フンヅマリ論として待機主義的傾向を持ち、革命戦略は「一国―アジア―世界」（三段ロケット論）として措定され、中国、キューバ、ベトナムの第三世界革命との結合環を持たない「先進国革命論」であり、多くの限界を持っていたのである。こうした岩田帝国主義論に依拠するマル戦派が、一九六八年三月、共産同第七回大会において、一月佐世保闘争の総括の分岐ともあわせて、理論的にも組織的にも、まず分裂する。マル戦派に対し、関西ブントは「組織された暴力とプロレタリア国際主義」を踏まえた「世界同時革命論」をもって批判した。

こうした分裂・分解状況の中で、さらに階級的昂揚は持続し、ますます拡大し、一〇・二一国際反戦デーの爆発を迎えるのである。一〇・二一闘争は、同時多発的な様相を示しながら、新宿騒乱闘争へと至るのであるが、各派のスローガン・攻撃目標に大きな分岐があり、それ自体、当時の党派性を示すものとしてあった。ブントは、「ベトナム革命戦争勝利、安保・NATO粉砕／」を軸に「七〇年安保―日帝のアジア派兵への道、日米反革命軍事同盟粉砕／　世界―一国同時革命の旗の下、沖縄米軍政打倒／　米軍基地撤去／侵略前線基地化阻止／」をスローガンとして日帝の軍事外交路線の焦点として、防衛庁闘争を提起した。中核派、ML派、第四インター等は、「米軍タンク輸送車実力阻止」闘争としてベトナム反戦闘争の一大攻防として位置づけていき、他方、解放派、革マル派、構改派等は「反戦反政府闘争」として国会闘争を展開していった。

それぞれの攻撃目標に対して果敢な闘争を展開し、さらに新宿騒乱闘争へと集中していった一〇・二一闘争は明らかに七〇年安保闘争を展望する闘いであり、同時に、七〇年代階級闘争に向けた陣型構築が、この一〇・二一闘争の総括論争を通して模索されていくのであった。

東関東を地盤に
関西・東北を
ネットする



常陽銀行
本店　水戸市南町2丁目
頭取　青鹿明司
店舗数　104か店

第六章　大学叛乱と全共闘運動

全国学園闘争の爆発

一九六七年一〇・八第一次羽田闘争以降の反戦青年委員会―全学連を軸とした闘争が、「街頭実力武装闘争」として極めて機動戦的戦術をもって展開されていた反面、日本帝国主義の、上からの帝国主義的再編があらゆる社会領域にかけられ、同時に戦後相対的安定期に形成された様々な様式、慣習、組織が内部から解体されていく状況がこの時期に形成された。その典型が大学叛乱である。

六〇年安保が全学連主流派を最先端として展開され、六七年一〇・八羽田闘争以降の爆発が三派全学連の結成によって準備されたように、日本階級闘争のエポックが革命的インテリゲンチァによって切り拓かれてきたという事実は看過できない。確かに、階級的立脚点の曖昧性と、学生運動と労働運動との結合環の弱さ、インテリゲンチァにおける小ブル主観的な傾向など、多くの限界を持つとはいえ、権力との攻防を最先頭で担い、その鋭敏さ故に、矛盾を敏感に感じとり、常に時代の曙光を照らすという現実は、最大限に評価されねばならない。六八～六九年の全国学園闘争の爆発は、まさにそうしたものとしてあった。

全国学園闘争の爆発を生み出した要因は、六〇年代の高度経済成長政策によるインフレ基調と中高級労働力不足という状況の中で、日帝ブルジョアジーは、大学を労働力再生産工場、ブルジョアイデオローグ生産工場として再編攻撃をかけてきていた。こうした再編攻撃は、六〇年代中期に連続的に、学費値上げ、寮・学館の管理強化（自治権問題）、カリキュラム改編等々として具体化し、それに対する闘いとして、六四年、慶大学費闘争、六五年、早大学費・学館闘争、六六年、中大、明大学費闘争と、学園闘争が連続的に開始された。これらの闘いは未だ個別改良―経済闘争の限界を持ちつつも、この過程において、慶大の自主カリキュラム形成、早大における産学協同路線の暴露、中大の武装行動隊の登場など、後の全共闘運動の先行的な質と形態を形づくっていった。こうした一連の学園闘争が、六七年一〇・八以降の街頭実力武装闘争と結合しつつ、個別学園の枠を突破して、「大学革命」のスローガンを提起し、ブルジョア秩序を根底から揺るがせ、権力闘争にまで登りつめていったのが、六八～六九年の東大、日大を先頭とする全国学園闘争であった。

全国学園闘争は、例えば、東大闘争において医学部の人違い処分撤回闘争を発火点として一挙に爆発したことに象徴されるごとく、累々と築かれてきた矛盾の部分的発現に対する即時的自然発生性に基づく闘争として出発した。そして、それは、現代世界における危機の現実形態が管理操作社会と呼ばれる政治危機の繰り延べ手段を媒介にし、同時に経済

的危機を慢性インフレとして引き延ばし、その矛盾が市民社会に多重的にしわよせされ、特に小ブル学生層、労働者、農民に集中的にしわよせされるという世界的な構造の中で爆発したのである。だからこそ、自然発生的な闘争として開始されたこの全国学園闘争の闘いの射程は管理操作体制そのものとしてあったのである。また世界的に共通の構造が同時的に進行したが故に、フランス五月革命、西ドイツSDS、アメリカ等、全世界的なスチューデント・パワーと同質のものとして、日本の全国学園闘争も展開されていったのである。

こうした六〇年代中期から露骨化し、中教審答申―目的別大学・大学院大学構想・インフレ攻撃としての学費値上げ・筑波大学設置等によって具体化した教育の帝国主義的再編と世界的な管理操作体制に対する反逆が、全国学園闘争爆発の背景である。

東大・日大闘争の過程で、それは以下のように具体化される。

東大においては、医学部粒良不当処分（六八年三月）問題から発し、七項目要求を媒介にして全学的な闘争へと進展していった。この闘いが単なる要求闘争から大学解体闘争へ飛躍していったのは、国大協路線による教授会自主規制粉砕闘争を通じてであった。東大闘争はこうした中で、大学自治の一切の幻想性を暴露し、「自己否定」として、自らの依って立つ学生としての存在―労働力商品化の拒否としてその闘いの普遍性を示していった。

一方、日大においては、六八年五・二一集会を皮切りに、授業料不正使用に対する闘争として一挙に全学化し、同年九・三〇大衆団交を勝利的に展開しながらも、佐藤首相の介入により九・三〇確認事項・団交確約の破棄という結果に至る。日大全共闘は闘争の過程で、いまや大学は産学協同路線として、産業と大学がそれぞれ独立に存在し規制するというだけでなく、大学そのものが企業化している、即ち、教育資本としての大学の実態を暴露したのであった。

東大―日大闘争を先頭とした全国学園闘争は以上のような経過をたどりつつ、いくつかの点で全く新たな質をもった闘いであった。それは①闘争の世界的普遍性、②闘争の日常性に対する根源的変革志向―自己否定等、とともに、③組織形態として全共闘―全学共闘会議としてポツダム自治会の幻想性を打ち破っていった。ポツダム自治会は一種の代行主義と、多数決の原理に基づく間接民主主義であるのに対して、〝全共闘〟は直接民主主義であり、「行動隊」としての要素を持った組織として形成されていった。そして、④「反大学」「自主講座」として学問・思想を点検し再構築する作業に入っていった。反大学自主講座は、学園の枠を越えて労働者、学生、市民に開放されたものとして位置づけられ、教える―教えられるという関係性を点検し、自主的に運営された。

こうした思想的・社会的構造を持った全共闘―全国学園闘争は、六九年一月十八～十九日、東大安田講堂攻防戦を一大頂点として燃え広がったのである。大学闘争が「大学革命」「帝大解体」をスローガンとし、個別改良闘争にとどまらず、敵権力との直接的攻防となる要因は既に明らかにしたが、六八年一・一八、一九、安田講堂攻防戦こそ、大学という社会の一角からブルジョア支配秩序が音を立てて崩れていくことに恐怖した権力が一大決戦の場として攻撃を開始し、それに対して全国の先進的学生、革命的左翼が一丸となって闘い抜いた、まさに歴史的な闘いであった。

同時にこの安田講堂攻防戦は、六七年一〇・八羽田闘争以降の闘争の地平と七〇年安保大会戦、七〇年代階級闘争の方向性を問う一大メルクマールでもあった。

「全共闘」への各派の対応

ここで各派の論点を概括的にみていこう。

ブントは、全共闘運動を「コンミューン的団結」として評価し、安田講堂攻防戦を「帝国主義的再編に対する闘争を全人民的政治闘争へと転化させ、同時に『バリケード戦』『解放区』を全人民化した」として、安田講堂攻防戦と呼応しつつ展開された神田地区バリケード市街戦―神田カルチェ・ラタン闘争を位置づけた。

中核派は、大学を「安保粉砕・日帝打倒の砦」とし七〇年安保闘争に革命的合流をかちとることを基本方針とし、「今日では学生運動の方がむしろ闘争の通常の姿であり、労働運動の現状の方が例外的なものである」として「先駆性」論的な評価を下した。

ML同盟は、「帝国主義大学解体・二重権力の創出・人民戦争路線・解放戦線建設」として位置づけ、主体をいかに形成していくのかに力点を置いた。

解放派は、「教育の帝国主義的改編粉砕、産協路線粉砕」として産業合理化によって生み出される「専門奴隷」の構造を粉砕し、産業合理化・産学協同路線に真向から対決する行動委員会＝評議会運動の構築を提起した。

このように「街頭武装闘争と陣地戦の結合」（ブント）、「砦論、先駆性論」（中核派）、「二重権力、人民戦争」（ML派）、「反合評議会運動」（解放派）など、それぞれの相異を鮮明にしながら四・二八沖縄闘争を経て七〇年安保に向けて闘いは進展していくのである。

そして、革マル派は、「現在、必要なのは学生と地区反戦など、できあいの少数勢力をもって〝革命闘争〟の青写真を作るのではなく、労働者階級を組織することである」として現実の闘争から召還し、東大闘争から「夜逃げ」をするという形で、他党派、全共闘から日和見主義と批判された。

東大闘争は、安田講堂攻防戦をいくつかの問題を残しながらも、戦闘的に闘い抜くことによって歴史的刻印を示し、その地平を継承する形で、京大を始めとした全国の大学に闘いの火は燃え広がり、火の粉をまき散らしていくのである。

一九六九年一月、この年バリケード封鎖で越年した大学は全国で十五校、即ち、東大、東京教育大、東京外大、電通大、日大、中大、明学大、青学大、芝浦工大、山梨大、富山大、大阪大、神戸大、関西学院大、長崎大。同二月、闘争中の大学はさらにその数を増し、京大、立命館大、大阪市大、岡山大、和歌山大、関東学院大、福島医大、お茶の水女子大など、全国で七十余校を数えた。それらは、寮の管理運営権をめぐる闘いであったり、自治会のヘゲモニー争いであったりという様々な契機をもちつつも、六八年以来の全国学園闘争で培われたように、そのあらゆる契機が全学化し、根源的な問題提起になりうるという意味で、実にラディカルな闘争として、燎原の火の如く燃え広がったのである。そして特徴的なことは、こうした全共闘運動を中心的に担ったのは「党派」よりむしろ「ノンセクト・ラディカル」の部分であったことである。東大闘争における自己否定論に象徴されるように、全共闘運動はストレートに権力闘争というよりも、社会革命・文化革命としての高度な質をもった思想運動であったといえよう。それだけに「日常性の点検・批判」として、多くの学生が運動の底辺を担い、展開されていった。

こうした「ノンセクト・ラディカル」の闘いの典型が東大、日大闘争であり、また京大における「バルチザン」の登場であった。「京大バルチザン」は全共闘運動の組織形態であった〈戦士共同体〉として〝五人組〟を核とした運動展開と、旧来の党派運動の限界を示すかのように、地域闘争、公害闘争、少数民族闘争に着目し、「おおらかさとたくましさとういういしさ」（滝田修）というような作風と倫理を提起したのである。こうした運動が「全国全共闘連合」の組織化へと向かい、党派の運動と相対的独自に展開されていく。

しかし、状況は「ノンセクト・ラディカル」「全共闘運動」の自然成長的進展を許さなかった。東大安田講堂攻防戦が、それ自体革命的闘争でありつつも、結果として機動隊にバリケードを撤去されてしまった。さらに打ち続く大学闘争においても権力＝機動隊の壁は厚く、バリケード自主撤去、大量逮捕、大学治安立法攻撃など、刑事弾圧を前面にした権力の攻撃に対し、いかに対決していくのかが、多くの戦う学生、労働者に問われていったのである。一九六九年九月五日、全国全共闘連合（議長山本義隆東大全共闘代表、副議長秋田明大日大全共闘議長）の結成は、「ノンセクト・ラディカル」と「党派政治」の展望なき野合として存在し、七〇年闘争へ登りつめる過程において、階級闘争そのものに対する規制力は急激に失われていくのであった。共産主義者同盟赤軍派の公然たる最初の登場が、九・五全国全共闘結成大会の会場である日比谷野音であったことも、極めて象徴的なことだといわねばならない。

こうした側面をもちつつも、全共闘運動の示した根源的な問題は、その後、反公害、入管、地域闘争などとして継承されていくのである。

第七章　七〇年安保闘争

現地闘争から中央闘争へ

七〇年安保闘争は、六〇年安保闘争とは明確に質的転換したものであるということは既に展開した。要約的に述べるならば、①ベトナム革命戦争の進展と全世界的な労働者、被抑圧人民の革命的昂揚、先進国においては、アメリカ、フランス、西ドイツ等の学生運動、黒人闘争、第三世界においてはベトナムを始めとし、アラブ＝パレスチナ、中南米ゲリラ闘争等の爆発があり、「労働者国家」にあっては中国文化大革命、ソ連のチェコ侵入等、激動は続いていた。即ち、全世界的な戦後体制の根本的変革期として、六〇年代後半から七〇年は存在したのである。②ベトナム革命の進展により、帝国主義の盟主としての米帝がNATO、安保として反革命軍事同盟を強化再編するという国際反革命同盟の一環

として日米安全保障条約が位置付けられたことである。③また、安保自動延長攻撃にみられるように、日本資本主義そのものが六〇年代高度成長によって産業再編―独占の強化と資本蓄積を一定貫徹し、明確に帝国主義としての本性をむき出しにしてきていた。ベトナム侵略反革命戦争に公然と加担し、朝鮮を始めとした侵略反革命の準備を開始し、それに向けて国内の帝国主義的再編を強行してきているのである。ちなみに「安保自動延長」という、いわば肩すかし攻撃は、社会党、共産党を始めとした議会主義派に幻想を与え、七〇年代の修正主義、社会帝国主義登場の道をより明らかに指し示すものであった。

このような特徴を持つ七〇年安保に対して革命的左翼は一九六九年十一月佐藤訪米阻止闘争を最大の攻防環として押し出し、四・二八沖縄闘争を闘い抜いていくが、同時に七〇年安保大会戦に向けて革命的左翼内部に大きな流動をまきおこしていく。

七〇年安保大会戦は、六八年一〇・二一闘争の一大爆発として具体的に開始されたといってもいいだろう。六七年一〇・八羽田闘争以降、展開されてきたヘルメット、角材の闘いは、火炎ビンと鉄パイプの登場としてエスカレートし、羽田、佐世保、王子、成田という、いわば現地闘争に基づいた政策反対闘争という地平を、国会、防衛庁、首相官邸攻撃という中央権力闘争として措定していったことである。

ブントは「中央権力闘争とマッセンスト」という方針を提起し、大阪中電マッセンストを始めとする反戦派労働者のストを組織しつつ、中央権力闘争を展開していった。中核は学生の先駆性をテコに「全学連」の強化を図り、闘争の量的拡大をもって七〇年安保を闘い抜こうとし、ML同盟は人民戦争の陣型を模索し、解放派は「反合実力闘争」の展開を七〇年闘争に結合せんとしていた。

こうした「武器」のエスカレートと全共闘、反戦派労働者の昂揚をテコに六九年四・二八闘争は展開されたのであった。四・二八沖縄闘争において、「奪還」(中核)か「解放」か「侵略前線基地化阻止」(ブント)かといった論争を展開しつつ、八派共同声明にみられるように内ゲバの回避と現場での共同行動という暗黙の了解のうちに闘いは展開され、七〇年安保闘争の焦点として「沖縄」が前面に押し出されていったのである。即ち、七〇年安保大会戦の共有のスローガンは「安保粉砕、日帝打倒、沖縄勝利」であった。

これに対して敵権力は「破防法」攻撃をもって革命的左翼の壊滅に乗り出してくる。破防法、ファシズム攻撃といかに闘い、安保粉砕、日帝打倒、沖縄闘争に勝利していくのかがすべての革命的左翼に問われてきた。それに最も敏感に反応したのがブントであり、赤軍派の登場であった。赤軍派の母体であり、マル戦派分裂後の第二次共産主義者同盟の基調である一九六八年、八・三論文(「世界プロレタリア統一戦線・世界赤軍・世界党建設の第一歩を」――いわゆる過渡期世界論)は、次のように展開する。

①国際主義(世界革命)として問われた戦略的内実こそは、国境を越えた反革命に対して、国境を越えたプロレタリア革命戦争に他ならないこと、②安保、NATOを頂点とする国際反革命同盟は、その内部に一定の矛盾をはらみながらも、世界帝国主義として君臨することによって自己貫徹しており、ベトナム侵略反革命戦争も単なる強盗戦争としてはとらえきれないこと、③これを打ち抜くプロレタリア革命はレーニンの「帝国主義戦争を内乱へ!」という受動的待機主義では対応しきれないこと。④それは帝国主義の侵略反革命に対決し、国際階級危機を世界革命に転化せよという過渡期世界の前段階決戦を打ち抜くスローガンとして措定されるべきであること。従って、⑤現代革命の戦略は「世界=一国同時革命」であり、⑥また組織された暴力(プロ独)に関しては、それを打ち抜くためには「暴動―内乱型の党」ではなく、革命戦争を遂行できる「内戦型」の党であり、その党は「世界プロ独―世界党―世界赤軍」として組織せねばならない、とした。

ブントはこの八・三論文を公約数的に確認しつつ、連続的に闘争を展開し、四・二八闘争に至るのである。四・二八沖縄闘争に「共産主義突撃隊」(R・G)を組織し、その中心を担った赤軍派フラクは、四・二八闘争を敗北として総括し、同盟政治局と対立していく。六八年一〇・二一闘争、六九年東大安田講堂攻防戦を通し、同盟政治局の無方針に対し「左派フラク」を形成していた部分は、四・二八闘争の総括論争を通して「赤軍派フラク」としてその分岐を鮮明にしていくのである。「赤軍派フラク」は当時の四・二八から秋に向けた情勢を「デモよりも大きく革命よりも小さい」(レーニン)として捉え、この昂揚を突破するカギを「赤軍建設」とし、秋の方針を「なし崩しファシズム攻撃に対して徹底的に闘い、例え闘争自体は敗北しても世界革命戦争に向けた新しい質が形成される」として「革命的敗北主義」、「前段階決戦(秋蜂起)→世界革命戦争へ」という路線を前面に打ち出す。ASPAC闘争から新宿全通闘争に至る過程において、この分岐はさらに鮮明となり、七月六日、明大和泉校舎での内ゲバ(仏議長、重傷のまま破防法容疑で逮捕、のち九月二十九日、望月上史死亡)へと発展し、赤軍派は八月二十八日、神奈川県下で結成総会を開くに至る。

当時のブントはそれ自体、連合党的な限界を持っていたが、後に情況派、叛旗派として現われる右派ブロックは統一戦線党、自然成長的党的な人民戦線的要素を強め、全共闘運動に拝跪していく傾向を有しており、中間派は動揺しつつも、組織防衛という一点で赤軍派の突き出した問題に答えきれないでいた。

ブントの分裂、赤軍派の登場は、当時機動隊の厚い壁に包囲されていた「ノンセクト・ラディカル」、「革命的左翼」に少なからぬ衝撃と影響を与え、特にノンセクト・ラディカルの中から自然成長的に武闘派を生み出していったのである。

前段階蜂起の敗北と十一月闘争

七〇年安保大会戦は六九年佐藤訪米―日米共同声明粉砕闘争を一大メルクマールとして、秋に一切が集中された。この闘争で「軍事」の先端攻防を目的意識的に追求していったのは赤軍派だった。赤軍派は武装ゲリラ戦を、大叛戦争、東京戦争として繰り返し、九月五日、全国全共闘結成大会においてブント諸派を粉砕し、革命的左翼、人民大衆の注視を浴びることとなった。

この頃の雰囲気を次の引用はかなり的確に伝えていると思われる。

「この集会(全国全共闘結成大会―註)は大会当初から不安と期待、いら立ちと動揺が、全会場を覆い尽し、それは演説が続く度に一層深く暗いものとし始めた。―出口なき後退―これが会場の暗黙の了解となりつつあった。権力の一層厳しくなる弾圧、それは先行的に革

命的左翼を粉砕し始め、次々と弾圧は強化されていく。大学立法の強行施行、これを粉砕しようとする全共斗の斗いは、徹底抗戦も空しく個別撃破されていく。……この不安と動揺を未来への期待と飛躍へ、それこそ、我我赤軍派の登場であった」（「赤軍」一号）

しかし、十一月五日、大菩薩峠における前段階武装蜂起に向けた軍事訓練で五十余名の部隊が一斉逮捕されるに及んで、六九年秋の蜂起は挫折する。

一方、佐藤訪米実力阻止を目指す七〇年安保大会戦は、十月闘争（ブント）か十一月闘争（中核派）かという重大な戦略的対立を含みつつ秋へとなだれ込んでいった。

そして、事実上最後の大衆集会となった一〇・一〇明治公園十万人大集会、一〇・二一街頭実力闘争へと発展していった。

つづく十一月十六日、十七日、佐藤訪米阻止闘争は、国電蒲田駅を中心に、各派学生、全共闘、反戦などによるゲリラ的戦闘として展開される。ここでは各派のスローガンと当日の動きを簡単に追ってみよう。

中核派は「総武装決起で機動隊をせん滅し、佐藤訪米を阻止せよ！百万人の進軍で羽田空港を占拠せよ！」とし、再度にわたり蒲田駅から空港方面への突入をはかり、あやめ橋付近で機動隊と激突した。

ML派は「全力をあげて佐藤訪米阻止！羽田決戦へ！」とし、十六日品川駅付近で機動隊と激突、街頭バリケードを構築。翌十七日には京浜梅屋敷駅から第一京浜国道へ、さらに蒲田交番を襲撃。

解放派は「羽田占拠、佐藤訪米実力阻止、徹夜闘争で羽田へ進撃せよ！」とし、東京駅で乱闘、のち京浜国道にバリケードを構築。

ブントは「機動隊粉砕、首都制圧、羽田占拠で佐藤訪米を阻止せよ！」とし、蒲田駅周辺でゲリラ戦を展開。

また、フロント、プロ学同も東急池上駅周辺でバリケードを構築し、革マル派も「圧倒的労学の組織化を基礎に訪米実力阻止闘争の一大爆発をかちとれ！」として大田区池上付近で闘争を展開。各派、深夜におよぶ機動隊との激突を繰り返した。

しかしこの点、佐藤訪米阻止闘争は、火炎ビン、爆弾等の武器のエスカレートをはらみつつも、また全共闘も情況に十分対応しえずに、大勢としては武装カンパニアに終わり、千四百九十三名という空前の大量逮捕をもって七〇年へと突入するのである。

共産主義者同盟赤軍派機関誌「赤軍」は、訪米阻止―羽田武装占拠闘争の敗北について次のように語る。

「一一・一六～一七の訪米阻止―羽田武装占拠闘争は、秘かな我々の内心の期待にも拘らず、やはり何事も起こすことができず、二千人にも及ぶ逮捕を許す中で敗北し、今秋安保決戦は幕を閉じたのであった。佐藤は、日本＝世界、労働者・人民の血みどろな闘争と憤激の声を尻目にヘリコプターで羽田に到着し、悠然と米国に飛び立っていったのである。全国に二百数ケ所、十数万に及ぶ首都―全国を包む巨大な規模の戦闘、蒲田―品川、東京駅を中心として、新宿―池袋等の無数の諸軍団の火炎ビン―ゲバ―バリケード戦闘。学生のみならず、ほぼ戦闘の中核を占めつつあった戦闘的な青年労働者の広汎な層。日本労働者・学生・知識人等・プロレタリア・人民は、全世界に際立つ比類ない戦闘性、英雄性を発揮したのであった。全戦闘を牽引した四千名以上の中核的な突撃隊の大半が逮捕されても闘いは持続されていったのである。

だが、この比類ない日本労働者・人民の戦闘にも拘らず、この戦闘性は真に未来を代表する革命的戦闘力には転化されることなく、敵権力の布陣の質と量に抗すすべもなく一〇・二一に引き続き再び完全に敗北せしめられていったのであった」（五号）

開始された中核・革マルの〈内ゲバ〉

七〇年安保闘争は「日本共同声明」による「七二年沖縄返還」に焦点が移され、中核派を始めとして多くの革命的左翼は「革命戦争派」とは対極をなした武装カンパニア闘争路線を疾駆し、こうした中でML同盟は「人民戦争路線」を明確にし、七〇年四月―六月闘争を武装闘争として貫徹しつつも、その後、武装の問題をめぐって解体していく。更に日共山口左派との分離から形成された日共革命左派は「人民戦争―遊撃戦」を方針とし、ゲリラ闘争反基地闘争を繰り返していく。一方、赤軍派は六九年前段階蜂起挫折の総括として「国際根拠地―蜂起の軍隊―国際地下組織」を打ち出し、七〇年三月三十一日には、日航よど号ハイジャック闘争を、フェニックス作戦として衝撃的に闘い抜いていくのである。

六八、六九年の闘いは、このように一方では中核派、解放派等の大衆武装＝武装カンパニア派を生み出し、他方では日共革命左派、赤軍派等の革命戦争派潮流を形成しつつ七二年沖縄闘争へと進展していく。

七〇年は以上の様な状況の中で、七・七華青闘の新左翼批判として具体化した入管闘争、更に小西叛軍闘争、十二月コザ暴動、釜ケ崎暴動、狭山差別裁判控訴審再開等、革命的左翼そのものを問う闘争が展開されていったのである。

なお、七〇年安保大会戦における武闘派の死闘に対して、反武闘派的な対応を試みたのは革マル派だった。革マル派は「他党派の運動を喰いつぶすための『党派闘争』の暴力的＝政治的展開をその内実とする」（中核派）党派闘争を一段と強化し、多大の犠牲をはらった武闘派、なかんづく中核派への批判を集中し、あの「革共同戦争」の始まりとなった。そして、七〇年八月海老原リンチ事件を契機に、革マル派による「階級的復讐戦」が宣言されるにおよんで〈内ゲバ〉は本格化していったのである。

国際化時代の
ワールドバンキング
BANK OF TOKYO
国際貿易金融 預金 内外送金
東京銀行
本店／東京・日本橋
国内31 海外147・海外コルレス網4000余
海外旅行に安全・便利な――
東京銀行ドル・トラベラーズ・チェック

第八章　本格的武闘の開始とその敗北

連合赤軍の闘い

一九七〇～七一年を特徴づける闘いは、外においては、ベトナム革命の更なる進展とインドシナ全域への拡大、中―朝―ベトナムの反米統一戦線の形成とパレスチナゲリラ闘争の拡大であり、内にあっては三里塚の第一次・第二次強制代執行阻止闘争、そして赤軍派、日共革命左派の連続ゲリラ闘争と連合赤軍の結成である。

三里塚闘争の爆発は七〇年安保闘争後の混迷を克服しうるだけの質と構造を持っていた。七二年沖縄返還と軌を一にした三里塚空港開発策動は明確に日本帝国主義が朝鮮・アジア侵略反革命に乗り出すための侵略前線基地化攻撃としてあり、日米共同声明（六九年十一月）の韓国条項「韓国の安全に責任をもつ」に裏づけられたものであった。こうした位置にある三里塚にかけられた攻撃は、同時に農村解体攻撃として社会階級再編の権力の野望もからんで、当時、ノンセクト・ラディカル、地域住民が展開していたところの地域闘争、反公害闘争と結合する質を持った闘いとして展開された。

しかし、九・一六東峰十字路機動隊センメン戦にみられるように戦闘的な闘いを展開しつつも、革命的左翼はそれに応えて方針を提出しうるだけの内容を持ち得ず、逆にそれが暴露され、ノンセクト・ラディカルと農民大衆が闘争の先頭を切っていったのである。

一方、こうした大衆的昂揚を軍事と結合しうることができず、〈革命の軍隊―赤軍建設〉に集中していった赤軍派は、M作戦（資金奪取―連続金融機関襲撃闘争）を連発的に展開し、軍事の自然成長性のうえに七二年武装蜂起を路線化していったのである。

以下、七〇年代初頭の日本階級闘争にあまりにも深い刻印を残した〈連合赤軍〉の問題に若干詳しく触れてみよう。それは連合赤軍をめぐって諸党派の状況もまた逆に鮮明になるであろうからである。そして、このことは、われわれがこたえていかねばならない課題の大きさを、あらためて照らし出すであろう。

共産主義者同盟赤軍派は、大菩薩闘争、よど号ハイ・ジャック闘争を闘い抜き、同時に大菩薩闘争による大量逮捕、ハイ・ジャック闘争によるその後の幹部の連続逮捕という主体の側の条件と、①ベトナム革命進展、②日米共同声明の実質化―朝鮮侵略反革命と戦争に向けた帝国主義的再編、治安体制強化、③資本に買収された帝国主義労働運動と修正主義日「共」の伸張という客観的条件の中で、「第二次綱領論争」を開始していく。

即ち、「階級闘争の発展は前蜂路線の根底的止揚を要求した。蜂起主義・待期主義に伴なう同盟赤軍派の矛盾の激化は第二次綱領論争を必然的に要求した。思想・綱領問題の解

決を通して、党主体を高め、同盟赤軍派―赤軍の待期主義、軍事無政府主義、小ブルジョア性を止揚しぬくこと、革命的情熱に溢れた、年若き同志たちを真に共産主義者として打ち鍛えることが要求されたのである」（「連赤総括に向けて」Ⅱ集）

第二次綱領論争のその内容とは、旧来の路線を「戦略なき戦術主義」、「党建設なき戦術主義」として批判し、更に「共産主義者の能動的実践を措定しえず、〝プロレタリアートの高次の自然発生性に拝跪し、それを共産主義運動の歴史的総括として把えていず〟、革命的敗北主義による党建設（前段階蜂起―党）として党を自然発生性に溶解させる下からの党建設」として批判している。

こうした総括から以下のような方針が提出される。即ち、a、世界的持久戦の昂まりと世界革命戦争の即時的対峙段階への移行、b、党―軍―革命戦線の陣型構築と、この陣型の内部規律としての過程的共産主義の実現、c、戦略的持久戦と戦術的即決戦として、即ち具体的には世界武装プロレタリアート論を陣型構築の問題に変え、前段階蜂起を連続蜂起―ゲリラ戦の開始に、そして国際地下組織建設を国際ゲリラ闘争の貫徹として先進国革命戦争―プロレタリア国家の根拠地国家化―後進国革命戦争との戦略的呼応をなしていく、というものであった。こうした内容から、赤軍派在アラブ支部―日本赤軍が形成され、国内では建党―建軍―遊撃戦に突入し、連続M作戦を展開していくのである。

そして、一九七一年一月、「赤軍特別号」は、七二年沖縄返還を帝国主義の軍事外交として敵階級との攻防環をうち出し、七二年武装蜂起を提起するに至るのである。しかし、この七二年蜂起路線は赤軍派の獄中部分から猛烈な批判を受けとらねばならなかった。それは、待機主義、主観主義、政治的軍事的路線の内容抜きの提起として「この〝右翼的、日和見的、受動的小蜂起〟の傾向が〝都市ゲリラ主義〟を批判することによって隠蔽されている」（塩見孝也）という厳しいものであった。しかし赤軍派指導部は軍事―非合法のリアリティを武器として獄中の声をリアリティの欠如だと批判し、大衆的蜂起準備運動―連続的遊撃戦―七二年蜂起として突き進む。

同年三月、大菩薩闘争敗北以降の赤軍派獄中部分の意見発表の場として発刊され、獄中と獄外を結ぶパイプとなって、実質上内部通達の役割をも担った「獄中通信」は、その第七号の序において次のように書き記している。

「同志たち、もう戦場での我々の報告を権力に握られた言葉で行なうのは、不可能になっている。戦いによってのみ、我々の意志一致、伝達は可能でしかない。軍事、非合法の領域が余りにも多くなり、それが絶対的で主要な我々の言葉になったからである。

しかし、ここでは特別号に対する同志達の批判に応えよう。批判は以下の二点に集中していた。㈠、軍事抜きの右翼的変質。㈡、革命戦争を担っている部分に対する左翼スターリニズムなる把握。我々はかかる批判をそのまま受け入れ、自己批判することはできない。特別号の基調は、あくまで前蜂路線転換後、我々が失っていた戦略、戦術を『前蜂路線』＝第一次赤軍派（H・Jまで）の根底的総括から確立を目指していた。とりわけ革命戦争の開始に焦点をあわせた、第二次綱領論争―党活動の産物として提起したものであった。……特別号が、塩見同志の指摘するように七一年戦術の不明確という決定的限界を有

していたことは事実であり、我々は自己批判する。そして、そのことが同志達の批判を集中させたことを自己批判したい。これは、特別号での革命戦争の開始が未だ不充分にしか意志一致されていなかったことの現れであった。しかし、我々は今、実践的にこれを克服する道を歩んでいる」

そして更に獄外赤軍派指導部は、党―軍一元化をますます強く推しすすめ、〈党―軍―革命戦線〉の陣型を自ら解体し、中央軍への集中―山岳軍事訓練へと急激に煮つまっていくのである。こうした過程で、一二・一八（一九七〇年）上赤塚交番襲撃銃奪取闘争―柴野春彦虐殺―を闘い、二・一七（一九七一年）真岡銃奪取闘争を闘ってきた日共革命左派神奈川県常任委員会と戦術的結合を深め、一九七一年七月十五日をもって統一赤軍―連合赤軍を結成していくのである。結成宣言はいう。

「全国のプロレタリア兄弟諸君！　先進的学生、知識人諸君！

一九七一年七月一五日、共産主義者同盟赤軍派中央委員会、並びに日本共産党（革命左派）神奈川県常任委員会は、各々の中央軍、人民革命軍の組織合同を決定した。

この決定は、六〇年代日本階級斗争の革命的伝統を継承、飛躍させた画期的地平にかちとられた。この画期的地平とは、六〇年代後半の日本プロレタリア人民の偉大な国際主義的暴力斗争の昂揚と、それを担った大衆的軍団、行動隊を、『人民の軍隊がなければ、人民のすべてはない』プロレタリア人民の軍隊に発展させた『プロレタリア革命の魂』の復活ともいうべき地平であった。共産同赤軍派、日本共産党（革命左派）の『党の軍隊』として建設された中央軍、人民革命軍は、この画期的地平を切り拓き、歴史的な〝武装〟と〝遊撃戦〟を確立した。……

『赤軍』は、プロレタリア革命党の指導の下に、世界革命、暴力革命、プロレタリア独裁、永続革命等、マルクスが提起し、レーニンが創造的に発展させたプロレタリア革命の原則的観点、毛沢東が提起した持久戦戦略とその陣型及び遊撃戦争の戦略問題の教訓をもって武装されたプロレタリア軍隊であり、帝国主義ブルジョアジーを打倒すること―プロレタリア人民を革命戦争に組織すること―マルクス・レーニン主義を創造的に発展させること―を同時一体的に斗いとることによって成長する革命軍である。『赤軍』は、世界―日本革命戦争に献身的に参加しようとする全てのプロレタリア人民にその門戸を開放している。『赤軍』こそ、開始された日本革命戦争を代表するプロレタリアートの『武器』であり、『赤軍』の成長こそ、日本革命戦争を前進させる『力』である。武装し、斗うプロレタリア人民と一体化した『赤軍』は遊撃戦の全面的展開の中で全人民総蜂起の陣型をかちとる推進力である。『赤軍』は、全人民総蜂起―日本革命戦争の勝利から、休むことなく米帝国主義打倒、ソ連社会帝国主義打倒―世界革命戦争勝利へ前進し、世界プロレタリア人民の軍隊＝世界赤軍の中核を担うだろう」

しかし、結成宣言はこれで終わってはいない。統一された赤軍の機関誌「銃火」は〝付〟として次のように書いた。

「統一された『赤軍』は中央軍と人民革命軍の連合軍である。この連合軍は、米日帝国主義に対する遊撃戦の着実な実践によって、新たな兵士を加え、統一革命軍になるであろう。連合軍は、遊撃戦を何よりも展開し、建軍武装斗争の中で幾多の困難にたちむかい、犠牲を払って確立した軍事路線を深めるであろう。軍事路線を深める中で、共産同赤軍派中央委員会と日本共産党（革命左派）神奈川県常任委員会は、それぞれの路線を検証し発展させ、新党結成をかちとる覚悟である。尚、イデオロギーの問題については、今後、整理し、提起することを確認する」

右の文章において、イデオロギー的相異を残しながらも軍事路線で統一すると表現されているように、反米愛国主義と、安保粉砕・日帝打倒、プロレタリア社会主義革命戦争派との結合は奇異なものであったが、「銃によるせん滅戦」のリアリティの中で、〈連合赤軍〉は一つの既成事実として獄中赤軍派の多数をも含めて受けいれられ、とののち、進展していくのである。

しかし、権力の重包囲下にあって次第に追いつめられ、連合赤軍は「山岳根拠地―軍事訓練―七二年蜂起」を路線化し、ついには権力との対決における問題の矛盾を権力との攻防関係で克服できず、隊内共産主義化論として小ブル道徳修養主義に陥り、〈総括―同志殺し〉という悲惨な結末をまねいたのであっ

新左翼運動史年表

57年

1 27　日本トロツキスト連盟結成
4 27　沖縄・砂川全国学生総決起集会

58年

7 8　学生・労働者四千人、砂川基地突入
11 1　国際行動デー、八十一校で授業放棄
12 1　日本革命的共産主義者同盟結成
5 25　社会主義学生同盟結成
6 1　日共中央と学生党員が党本部で衝突
12 10　共産主義者同盟結成

59年

1 1　全学連、日共に意見書
4 28　全学連、安保反対第一次統一行動
5 15　安保反対第二次統一行動
6 5　全学連第十四回大会、ブント指導権確立（委員長・唐牛健太郎）
25　安保反対第三次統一行動
8 26　革共同第二次分裂
10 30　全学連、反安保全国ストライキ
11 27　安保反対第八次統一行動、学生労働者二万人国会突入

60年

1 16　岸訪米阻止羽田闘争、全学連、羽田突入、唐牛委員長逮捕
4 26　全学連、国会正門前で機動隊と衝突
5 19　自民党、国会で安保条約強行採決。翌日にかけて国会を数万人が包囲
5 26　安保改定阻止国民会議空前のデモ
6 10　全学連反主流派、ハガチー来日反対闘争。全学連、反安保統一行動
6 15　全学連、二万人国会デモ。先頭部隊国会南通用門に突入、警官隊と衝突。

18　樺美智子死亡、翌日にも数万の抗議デモ
安保条約自然成立、労働者・学生・市民三十万人国会包囲
7 4　全学連第十六回大会。反主流派は全国自治会連絡会議（全自連）結成
8 9　ブント・安保総括をめぐり、戦旗派・ブロ通派・革通派に分裂

61年

4 5　全学連第二十七回中央委員会、革共同指導権確立
6 2　政暴法反対闘争。連日国会へデモ
6 15　全学連、政暴法粉砕・池田内閣打倒
六・一五一周年集会

62年

4 25　全学連、アメリカ核実験再開に連日の抗議デモ
9 28　憲法調査会の中央公聴会阻止実力闘争。連日デモ
11 30　大管法反対全国統一行動

63年

4 1　革共同第三次分裂（中核と革マル）
6 15　原潜阻止・日韓会談粉砕統一行動
7 5　全学連第二十回大会。革マル派、全学連の主導権をとる
10 10　東京社学同マル戦派とML派に分裂

64年

3 20　韓国特使金鍾泌来日反対闘争
6 19　憲法改悪阻止・日韓会談粉砕全国青年総決起集会
8 2　日韓会談粉砕・憲法改悪阻止・全国労働者学生反戦集会

た。

だが、同志虐殺という否定的側面を影としてもちつつも、果敢に展開された「軽井沢―浅間山荘銃撃戦」は二重の意味で革命的左翼に絶大な衝撃を与えたのである。それは「軍事」の問題であり、また「共産主義者への階級的立脚点」の問題であった。

連合赤軍をめぐる総括は多岐に亘り、まさに百家争鳴の状態を呈した。共産主義者同盟赤軍派自身は、その頃、あいついで出獄してきた大菩薩闘争被告グループを中心に再建作業に入り、総括観点を赤軍派にとどめず、革命的左翼総体に向けて展開せんとした。しかし、後に「臨時総会派」といわれる再建グループが「赤軍派の歴史は軍事力学主義をテロリズムへと純化する過程、学生運動の激化の中で生まれた戦斗団が、それを指導すべき党の解体という条件の中で自己を独立化していく過程としてあった」(「再建のために」)として軍事清算主義の方向で総括を開始し、「下層プロレタリアートに依拠」するという階級的基盤の明確化をはかる、それ自体、連合赤軍の限界を克服する要素を内包しつつも、総体として「経済主義」に陥っていった。臨時総会派グループは、赤軍派―連合赤軍の軍事路線をテロリズム、唯銃主義として断罪しつつも、綱領的一致をかちとれるところまで統一されていなかった。この再建赤軍派―臨時総会派の主な闘いは、一方で、山谷を軸とした寄場闘争、また一方で、八・二五共闘会議を軸とした潮流の運動としてあった。

こうした寄場闘争は日本階級闘争の欠落部分を明らかにするとともに革命的左翼の間に少なからぬ流動を起こしていったが、結局は党的に領導しえず、「東アジア反日武装戦線」に典型される「窮民革命派」「辺境革命派」を生み出していくことになる。

更に、ベトナム革命連帯―プロレタリア国際主義を基軸にした**八・二五共闘会議**が結成され、旧ML同盟の一部から生じた「解放委員会」、関西ブントの一潮流である「レーニン研究会」、構改派から生じた「赤色戦線」などを結集して、赤ヘル潮流を形成してきた。しかし、〝ベトナム革命支持〟以外の統合環は不明確であり、さらに党形成を志向するのか統一戦線なのかも、また不明確な中で、共同闘争機関として影響を与えてはいたものの、一年続いて解体していった。

65年	2 1	慶大学費闘争、全学無期限スト
	3 30	社青同解放派結成
	6 9	ベトナム戦争反対国民行動
	7 8	都学連再建第十四回大会(中核・社学同・解放)十一大学・二十六自治会
	8 30	反戦青年委員会結成
	10 15	日韓反対全国青年総決起集会
	10 29	日韓阻止全国統一行動
	11 6	日韓条約衆院特別委強行採決。抗議闘争
66年	2 10	早大学費闘争、全学無期限スト突入
	5 30	原潜寄港抗議行動。連日デモ
	9 1	第二次共産同再建
	12 17	全学連再建大会。三十五大学・百七十八自治会(委員長・斎藤克彦)
67年	1 20	明大全共闘、学費値上げ大衆団交
	3 2	善隣会館で日共党員と中国人留学生衝突。ML派支援
	3 12	高崎経大、全学無期限ストへ
	7 9	ベトナム侵略反対・砂川基地拡張阻止大集会
	10 8	佐藤訪ベトナム阻止羽田現地闘争、山崎博昭死亡。これ以降三派のゲバルト路線が日常化
	10 21	ベトナム反戦集会
	11 21	第二次羽田闘争
68年	1 15	佐世保エンタープライズ寄港阻止闘争、一週間現地で激闘

一方、中核派は連合赤軍の銃撃戦に大きく影響されながらも、連合赤軍を戦略なき戦術主義、党建設抜きの軍事路線として批判した。しかし、連合赤軍の後、軍事と対革マル戦をめぐっての論争が展開されて、労働運動派が後退し、対革マル戦推進軍事派が主流を占めていく。こうした中で、革共同中核派人民革命軍武装遊撃隊は、一九七三年春、「軍報」編集委員会名義で軍事機関誌「雲と火の柱」の発行を見る。「今日のわれわれにとってのスローガンは、武器を！ 武器を！ 武器を！ である。あらゆる可能性を通して武器を確保せよ！」(「雲と火の柱」創刊号)

「軍事」をめぐる分解

七〇年安保大会戦から連合赤軍敗北に象徴される七二年(それは沖縄返還の年でもあった)に至る過程で、大きな分解流動をもったのはやはり共産主義者同盟(ブント)であった。一九六六年、第二次ブントが結成されて以来、六八年マル戦派の分派(のち同年九月、労働者共産主義委員会〔怒濤派〕)、十一月、前衛派をそれぞれ結成)、六九年赤軍派の分派として分解を経てきたブントは、七〇年に、**叛旗派、情況派**への分解、七一年、**日向派**と**蜂起派**への分解、そして日向派との分解過程で構築された、いわゆる一二・一八路線の中での**RG派**、**烽火派**、**神奈川左派**への分解として細分化を進めていく。更に、日向派は、**日向戦旗派**、**西田戦旗派**、**国際主義派**と分解し、蜂起派も、**仏派**と**蜂起左派**へ、烽火派も**全国委員会派**、**ML派**、**ボルシェヴィキ派**へ、情況派も**ローテ派**とのちの**遊撃派**へ、叛旗派も**三上派**と**神津派**へと分解を進める。

ここではあまり多岐に亘るので詳しく立ち入ることを避け、叛旗派、情況派の分解と日向派、蜂起派、さらに一二・一八路線とその後の三派への分解について簡単に触れてみよう。

ブントの分解はすぐれて「軍事」と「組織」をめぐるものであった。それは、一九六九年七・六明大和泉校舎での内ゲバによる赤軍派の分派という一大エポックをもって一挙に顕在化していった。先にも触れたように、六九年秋をめぐる方針、七〇年安保大会戦をめぐる方針をいかにするのかを直接的契機とした赤軍派の分派は、それまでのブント内の矛盾を露骨に明らかにしていった。それは第

69年	2 16	中大学費値上げ闘争、白紙撤回
	3 10	三里塚闘争。全国から数千の労働者・学生・農民参加。機動隊と激突
	3 28	王子野戦病院反対闘争。基地突入
	4 3	マル戦派、共産同から分裂
	4 26	国際反戦統一行動
	5 31	日大闘争、三万人大衆団交要求デモ
	6 15	六・一五記念首都総決起集会
	6 17	機動隊、安田講堂占拠の学生排除、全学ストへ。東大・日大闘争激化へ
	7 14	三派全学連分裂(中核と反中核)
	9 30	日大全共闘、両国講堂で大衆団交
	10 8	羽田闘争一周年集会、集会後新宿で米タン阻止闘争
	10 21	国際反戦デー、新宿、防衛庁、国会、大阪御堂筋等でデモ、騒乱罪適用
	1 9	東大全共闘、教育学部奪還闘争。民青系と衝突
	1 18	安田決戦、二日間にわたって激闘、神田でもバリケード戦、全国各地の大学で闘争激化
	4 28	沖縄闘争、東京、銀座、お茶の水などで騒然。中核、共産同に破防法アスパック粉砕闘争
	6 8	大学立法粉砕闘争、早大で集会
	7 10	広島大死守闘争
	8 17	早大死守闘争
	9 3	

二次ブント自身が、一定の最大公約数的一致をなしつつも、いわゆる連合党として結成され、単一綱領的一致まで押し上げられることなく、六七年砂川、羽田闘争以降の激動を担ってきたという問題であった。それ故、ブントは全学連―反戦をいかに指導するのか、どのような戦術を提起するのかという、いわゆる大衆運動の最左派へゲモニーを担うということを党派性としていったのである。こうした限界性が赤軍派の登場をもって一挙に噴出した。

赤軍派分裂の背景は既に述べた。この時は、赤軍派を最左派として、右派がいわゆる叛旗派、情況派であり、中間左派がBL派(のちの日向派、一二・一八路線派)、中間右派が仏派であったといえよう。

赤軍派の分派以降、最初に分派したのは三多摩反戦を中心としていた叛旗派であり、その理論内容は国家を共同幻想体として把握し、そうした構造を打ち破る大衆叛乱として闘いを措定するというものであった。

次いで情況派が分裂した。情況派は松本礼二、長崎浩などをイデオローグとし、都労活―全労活―反戦青年委員会の左派としてその位置を定めたが、帝国主義労働運動の登場の中で一定程度その位置を占めつつも、大衆叛乱民主主義運動の枠内にとどまり、「軍事」と「組織」をめぐる党内闘争からは分解していったのである。

仏派(蜂起派)は宇野経済学の危機論に依拠し、「先進国武装闘争―蜂起論」を打ち出し、宇野経済学批判―反スタ・マルクス主義批判を打ち出しつつあったBL派との分岐を鮮明にしていった。

BL派もまた中間左派という相関関係の中で、内部的には様々な傾向を孕んでいた。それは、ブント九回大会を前後しての日向派と一二・一八路線ブントとの分裂として、まず、顕在化した。「世界同時革命」か「世界―一国同時革命」か等として戦略論争はあるものの、主要には組織問題をめぐっての論争であった。

日向派は「ソビエト論」を提起すると同時に組織論的には「黒寛」に依拠した共産主義的人間論と排他的組織論を出してきた。一方、一二・一八路線は、第一インターナショナル規約における「経済的隷属が全てを規定する」という基本テーゼをベースに資本主義

70年

9 5 全国全共闘結成。三万人日比谷に結集。赤軍派登場
9 20 京大時計台死守、街頭バリケード戦
10 10 安保粉砕・佐藤訪米阻止大統一集会
10 21 闘争全国各地で爆発。新宿・高田馬場等東京騒然。逮捕者千五百人
11 5 赤軍派、大菩薩峠事件
11 16 佐藤訪米阻止闘争、品川・蒲田で機動隊と衝突、二千人逮捕
3 31 赤軍派学生、よど号ハイジャック闘争、金浦空港から平壌へ
4 28 沖縄デー。各地デモ
6 14 全国全共闘、反安保集会
7 7 蘆溝橋事件三十三周年記念。華青闘、新左翼批判、入管闘争に問題提起
9 30 三里塚、立入調査で成田空港公団側と激闘
10 8 羽田闘争三周年。入管闘争
10 21 国際反戦デー。各地で集会、デモ
12 18 京浜安保共闘、板橋で交番襲撃
12 20 沖縄・コザ市で暴動。騒乱罪適用
2 17 京浜安保共闘、真岡の銃砲店襲撃
2 22 千葉県・成田空港公団、第一次強制代執行

71年

6 15 全国全共闘分裂(中核と沖共闘)
6 17 明治公園の集会で鉄パイプ爆弾
8 6 広島反戦集会。連合赤軍誕生のビラ
9 16 三里塚第二次強制代執行、連日機動

批判を綱領的基軸にしつつ、「スターリン主義批判、反スタトロツキズム」と規定し批判していった。同時に、一二・一八路線は「恒常的武装闘争」を提起し赤軍派の軍事路線を「党建設なき軍事路線」と批判しつつも、七一年秋に入り、すぐれて「軍事」をめぐっで三分解していくのである。

即ち、一二・一八路線の分解はRG派、烽火派、神奈川左派の分解として顕在化した。烽火派は下層プロの評価を軸に、大衆運動の再構築を軸にし、神奈川左派は「赤軍派の評価と介入戦術」を軸にし、RG派は党=軍事委員会、RG=政治軍隊として、党―軍一体化の組織論を提起した。

当時、いわゆる武闘派としての二派―赤軍派と革命左派、そして八派としての新左翼潮流があり、この八派と二派の評価が七〇年安保大会戦の総括と七二年沖縄返還をめぐる大きな分岐として存在した。ブントの分裂はこうした潮流に対していかなる態度をとるのか、即ち武装を組織するのか、大衆叛乱、武装カンパニアになるのかという政治的背景を持って展開されたのである。

一方、中核派は、七一年十一月十四日、渋谷暴動、十一月十九日、日比谷暴動をはじめとして軍事と大衆カンパニアの折衷路線としての「暴動路線」を闘い、いわゆる「決戦論」として大衆の最左派を形成しようとしていた。

解放派は評議会運動をベースにしつつも党形成において明確な方針を提起しえず、「解放派のボルシェヴィキ化」を路線とする一部を生み出しつつも、評議会ソビエト運動として労働戦線のヘゲモニー獲得を目指したが、後の連合赤軍・軽井沢浅間山荘銃撃戦・粛清についても、右からの反応を示した。

マルクス主義青年同盟は解放委員会とレーニン研究会とが統合して形成された新党であるが、外部注入論のドグマ化とブント主義の清算という路線の中で内部崩壊を深め、現在では、人民大衆から遊離し、「街頭宣伝左翼」に陥っている。

時代を先取りしたハミダシ人間、北斎から乱歩まで23人――
にっぽん先駆者物語
木本至著　B6版／980円
流動

72年

9 25 隊と激突。警官三人死亡
10 24 沖青委、皇居突入
東京都内三ケ所で爆弾爆発。本格的爆弾時代へ
11 14 沖縄闘争、渋谷で激闘
11 19 日比谷大暴動。中核派千八百人逮捕
12 24 新宿でツリー爆弾爆発
2 19 連合赤軍、浅間山荘に籠城
2 28 機動隊と銃撃戦。陥落
3 7 リンチ事件発覚、妙義山中で一遺体発掘。13日までに十二遺体、総計十四。新左翼各派に大きなショックを与える
4 28 沖縄デー。中核派集会に反戦自衛官登場
5 30 赤軍派、テルアビブ空港襲撃
10 21 国際反戦デー、全国数百カ所でデモ
11 8 早大川口君リンチ殺人事件。以後、連日の追及集会。28日には文学部学生大会で革マル執行部をリコール

73年

1 1 森恒夫、東京拘置所で自殺
4 2 早大入学式。黒ヘル乱入で中止
9 15 革マル派神奈川大の反帝学評を襲撃、二人死亡
10 20 革マル派、全国の中核派拠点を襲撃
10 21 国際反戦デー
11 8 川口君虐殺一周年闘争。中核派・解放派と革マル派の内ゲバ激化

第九章　七〇年代の諸党派

日本赤軍の闘い

一九七二年春の連合赤軍敗北に始まる国内の闘争の停滞と混迷・内ゲバ状況とは相対的独自に、実力武装闘争を展開していったのがアラブ赤軍―日本赤軍であった。日本赤軍―赤軍派在アラブ支部形成の理論的背景は、赤軍派第二次綱領論争として既に述べた。

共産同赤軍派とパレスチナゲリラ―PFLPとの出会いは、七〇年三・三一よど号ハイ・ジャック闘争と同年のPFLPによる旅客機四連続ハイ・ジャック闘争の貫徹という戦術的共有と、一方では六〇年代後半からの、それぞれ歴史的・社会的相異をもちつつも顕在化してきた世界の武闘派・ゲリラの全面化であった。PFLPのハイ・ジャック、米ウエザーマンの連続爆破闘争、ブラックパンサーの市街戦、中南米の都市ゲリラ―同志奪還闘争、カナダFLQの闘争、スペイン・バスク解放戦線の闘争としてうち続き、それらがベトナム革命戦争、中―朝―ベトナムの国際根拠地化と結合しつつ、エルドリッヂ・クリーバーの「世界解放戦線」の提起へと至った国際武闘派の一翼に、日本赤軍は〈世界党―世界赤軍―世界革命戦線〉の陣型構築という路線をもって参加していったのである。

PFLP＝パレスチナ解放人民戦線と共産主義者同盟赤軍派の共編著として刊行された『アラブゲリラと世界赤軍』は、その序で次のように宣言する。

「われわれが戦闘の途上、日共革命左派の同志たちに出会ったように、世界にも、われわれと肩を組むことができる仲間が多くいる。……PFLPの同志たち！　熱砂の中に、自らの生を、真紅の血で彩っている兄弟たち！　世界革命戦争の最前線を形成し、硝煙と銃声の中で、英雄的に勝利を獲得しつつあるインドシナの革命戦士たち！　世界革命戦争の大後方を形づくり、新たな世界的反攻を準備しつつある中国、朝鮮、北ベトナム、キューバの同志たち！　革命的情熱を真紅に燃え上らせ、英雄的に闘いを持続している、朝鮮の、アラブの、われわれの赤い星たち！　……」

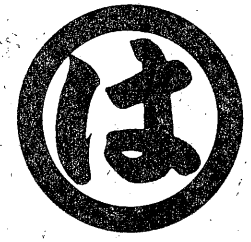
〈世界党―世界赤軍―世界革命戦線〉の陣型構築という、こうした路線の具体的な最初の展開が、七二年五・三〇、テルアビブ・リッダ空港における岡本公三、安田安之、奥平剛士三戦士によるPFLPとの共同軍事行動、ディル・ヤシン作戦であった。「武装闘争こそが最高のプロパガンダである」というPFLPとの共同テーゼに基づいて展開されたこの作戦は、戦後の革命的左翼に初めて戦争と国際主義的団結を現実のものとして示し、国内革命派に大きな衝撃を与えたのであった。

しかし五・三〇リッダ闘争に対する国内各派の反応はまちまちで、大部分は沈黙を守った。公然と出された評価はRG派の「国際義勇軍として断乎評価する」と、怒濤派の「パレスチナ解放闘争に連帯した五・三〇闘争支持」更に国内赤軍派の「テルアビブ闘争を支持し、さらに世界党―世界赤軍を組織せよ！」という評価を数えるにすぎない。しかし、プロレタリア国際主義―パレスチナ解放闘争についての党としての論争は、ほとんどなされず、国内での連帯活動は党主導型というよりもむしろ「ノンセクト・ラディカル」を中心に、「VZ58」「IRF情報センター」を始めとした各支援戦線が形成されていくのである。

このように国内の革命的左翼は、「国際主義」を語りながらも現実には「一国主義」を軸として論争が行なわれ、一方、中核派・革マル派は、更に内ゲバの泥沼に進んでいった。

日本赤軍は五・三〇リッダ闘争の後も、PFLPを始めとする世界の武闘諸派と結合を深め、七三年七月、日航四〇四便ハイ・ジャック闘争、七四年一月～二月、シンガポール・クウェート作戦、同九月、ハーグ仏大使館占拠・同志奪還闘争、そして七五年八月、クアラルンプール同志奪還闘争を展開（戸平和夫、西川純、坂東国男、松田久、「東アジア反日武装戦線」の佐々木規夫の奪還に成功）し、更に医療隊等を組織し、難民キャンプのパレスチナ人民との結合をも深め、プロレタリア国際主義を実践として表現していった。こうした闘いの中で日本赤軍は、欧州を中心とする各国の革命派との結合を獲ちとり、自らがもっていたコスモポリタニズム的傾向を克服し、アラブからアジアを、さらに日本を射程に入れた闘争を展開し、日本の共産主義者との結合を具体的に求める段階にきたのである。

国内の革命的左翼の状況は全体として未だ混迷と停滞の時期であった。この背景には、七二年連合赤軍敗北により日本の革命的左翼が根本的総括を迫られ、同時に七〇年七・七華青闘の新左翼批判とそれに続く在日中朝人民からの告発、七二年沖縄闘争の敗北によって、抑圧民族の一員と化している日本の新左翼の根源的な問い返し、狭山差別裁判の全人民化による部落差別への共産主義者としての立場の点検、女性解放運動等、文字通り、革命派の思想性と、どの階級に依拠して闘うのかが根本的に問われる段階へと入っていったのである。沖縄・狭山・三里塚・入管、こうした課題に如何に答えていくのかが日本階級闘争の最重要の問題であった。七〇年代初頭



かんづめ
ソーセージ
大洋漁業

のこうした階級課題のつきつけは、旧来の日本階級闘争の限界をえぐるものであり、共産主義者の主観主義、急進民主主義を逆に照らし出す闘いとしてあったのである。

再編化の動き

現在の状況の特徴は、七五年ベトナム革命の勝利と帝国主義の盟主米帝の敗北に始まる全世界的な激動の開始として分析されるであろう。

ベトナム革命の勝利、米帝の敗退は、米帝のドル散布の負債がドル危機、IMF・GATT＝国際通貨管理体制の崩壊としてさらに具体化し、また、いわゆるオイル・ショックをも併せて世界の帝国主義諸国を深刻な危機に落とし込むという状勢を形成した。即ち、国際通貨管理体制の中でインフレと危機の引きのばしをはかってきた資本主義が、もはやひきのばしをなし得ず、一方ではスタグフレーションとして経済危機を深め、他方ではその矛盾の転嫁として、資源と市場をめぐる市場再分割戦―侵略反革命と人民圧殺、白色テロのファシズムを強化するという攻撃に出ているのである　日本帝国主義もまた例外ではなく、むしろそうした攻撃の最先端を果しているのである。具体的には朝鮮・アジア侵略反革命と天皇制ファシズムの強化として現実化してきている。

こうした帝国主義ブルジョアジーの攻撃の転換と同時に、七〇年代中期―後期の特徴をなすものとして、ソ連社会帝国主義の公然化と、ユーロ・コミュニズムとして「プロレタリア独裁」放棄の下での平和革命路線といった修正主義の伸張がある。日本においては、社会主義協会、日共、革マル派の反動的役割があり、さらに帝国主義労働運動としてのIMF・JC、同盟の伸張があり、これらの潮流が帝国主義の一群として組み込まれることがより公然化し、明確化してきている。

また、中国における文化大革命、批林批孔運動、四人組批判という激変―革命の大発展は各国の毛沢東派ばかりでなく革命的左翼全般に多大な影響を与えるものであった。

こうした政治情況に、それぞれの総括を踏まえて如何に応えていくのかが、全ての革命的左翼に問われており、そのような中で、ここ数年、一定の混迷と混乱を内包しつつも、再編化の動きが見られる。以下、具体的にみてみよう。

赤軍派は、「臨総派」が自らもっていた下放主義、経済主義故に明確な指導性を喪失し瓦解していき、その後、主要に連合赤軍総括をめぐる党内闘争を繰り返し、七四年一〇月、**プロ革派**の結成に始まり、**マルクス・レーニン主義派**（神奈川）、**紅旗派**、**日本委員会**（派）へと、主として四分解していく。それぞれの政治的内容については詳述を避けるが、プロ革派―マルクス・レーニン主義派（神奈川）が、いわゆる「止揚派」として自己規定し、プロ革派は塩見孝也を理論的主柱として「粛清された一二名の立場―プロレタリア革命主義の立場に立ち、反帝反社帝プロレタリア社会主義革命を勝利するために、単一党・プロレタリア武闘共闘を組織し、七〇年代革命勢力（アイヌ・在日朝鮮人・部落・日雇下層労働者等）に依拠する」という路線をうち出し、現在は「反社帝重視の反帝反社帝二重対峙戦を第二次前段階決戦で闘う」という路線を提起してきている。一方、マルクス・レーニン主義派は、高原浩之をその理論的主柱としてプロ革派から分離し結成され、「マルクス・レーニン主義党を建設し、社会主義国民族解放闘争

お金のため方・ふやし方…

いままでどおりでいいのかな――

はじめての方もお気軽にどうぞ…

みどりのコーナー

株式、債券、投資信託…証券には数多くの種類があります。あなたの目的、資金に合わせて、経験豊かな専門家が、ご質問やご相談にお応えいたします。お積立て、名義書換えなど、事務手続きも《みどりのコーナー》へお申しつけください。

山一證券

東京都中央区八重洲5の1の1（〒104）
電話・東京(273)5111(大代表)

と結合し、安保粉砕・日帝打倒・米帝追放・プロ独社会主義革命へ！」を基本スローガンとしている。この両派は現在、互いに「プロ革派は下層を中心とした大衆の自然発生性に陥り、テロリズムに走っている」（ML派）、「ML派は新清算主義として登場している」（プロ革派）と相互批判しながら対立を深めてはいるが、その論争は活性化したものだとはいえないのが実情である。

「日本委員会」は、連合赤軍を「思想的・戦術的誤まりはあったが、基本的には正しかった」と総括し、また「紅旗派」は「共産主義と労働運動の結合」「「全ての共産主義者は団結せよ」を基軸としつつ、関西ブントの「ボルシェヴィキ派」と結合して形成されたが、軍事問題やブントの総括を明確に提起しえず、労働者に拝跪する経済主義の傾向を孕んでいると見られる。

また、革共同中核派と革マル派、さらには解放派（革労協）のあいだで死闘が展開され続けている。

中核派は「カクマルせん滅—内乱の開始」として、革マル派を反革命と明確に規定し、対カクマル戦争を権力闘争—内乱の開始と位置づけ、内ゲバを更に深め、特に、七五年三月一四日、革共同中核派書記長（当時）本多延嘉虐殺ののちは、全面的な死闘の様相を呈してきた。これはすでに単なる内ゲバといった現象的な代物を越えて、革命的左翼の総敗北以降、強固な組織的貫徹力によって、唯一、その孤塁を守り抜いてきた武闘派＝中核派と、反武闘派＝革マル派との死活をかけた、（いや、武闘派総体の死活をもかけた）党派闘争とみることができる。しかし「反革命カクマル戦争」を基調としながらも、運動方針では人民戦線的傾向と軍事路線の間を動揺し、組織的力量はもちつつも、未だ全人民を領導する内容を提起できてはいない。

このように、それぞれの方針を提起しつつ、ここ数年、日本革命的左翼の内部には、分裂よりも統合をという傾向が深まり、七五年九・三〇闘争を契機に、ブント系を中心として「侵略阻止政治共闘」（プロ革派・戦旗西田派・遊撃派・プロレタリア派・全国委派等）が形成されるが現場共闘を軸としたものにすぎず理論的統合環は提起しえず、各派独自の方針をベースにした共闘の域を出ていない。更に、毛沢東派の連合の動きが進展し、「日本労働党」が結成され、現在「左翼連合」を提起している。しかし全体としては党派の再編と連合の機運はあるものの、現実化にはまだ遠いのが実情である。

こうした新左翼各派の状況の背景には、この間の階級関係の明確な煮つまりがあり、総括論争の段階で足踏みしておれる状態ではなくなってきたという条件がある。階級関係の煮つまりとは、先にもいくらかふれたように、世界的な規模での根底的危機状況の中で、日帝自体がますます侵略と反革命を強化し、侵略戦争に向けた権力再編—天皇制ファシズムの登場をもって人民を圧殺し、自からの支配を維持延命させようとしてきていることである。

三里塚に於いて、日帝—福田内閣は、成田新国際空港七七年年内開港の大号令をかけ、暴力的・ファッショ的にことをなそうとし、五月六日、岩山大鉄塔を抜き打ち的に撤去、至近距離からのガス銃水平打ちによる東山君虐殺という暴挙を行なっている。

狭山差別裁判においても、上告棄却策動を強化しており、「部落地名総鑑」問題など、露骨な部落差別攻撃の強化を行なってきてい

自分の名前だけに
大切にしたいネーム
大野
シャチハタ
ネーム
あなた自身を大切にすることが、あなたの名前を大切にすることにつながります。親から受け継いだ貴重な名前ですもの、一日とおろそかにしたくないですね。ご家庭で、オフィスで、ポンとネームを押すたびに、今日一日の手応えを確かめてください。いい名前にいいネーム。一緒に歩いてみましょう。

る。

また一方、労働運動においては、春闘三連敗にも明確にあらわれ、七七年春闘においてより露骨化してきた、労使協調を軸とした帝国主義労働運動＝ＩＭＦ・ＪＣ、同盟主導型のストなし春闘が定着し、日帝ブルジョアジーは、こうした帝国主義労働運動と結託し、社会党、日共等の修正主義、排外主義運動をかこいこみつつ、闘う労働者には刑事弾圧を前面に出した闘争圧殺を強めている。

これに対して、既成指導部を深部から突き崩しながら闘いを展開している労働者の闘いは、未だ少数ではあるけれども、今後の方向を、照らすものとして、注目しておく必要があるだろう。

結語

革命的左翼の二十年にわたる死闘の到達点とは何か。それは、革命的左翼が七〇年の華青闘の「七・七批判」に応えて、最も抑圧され、収奪されている人民との闘う連帯と結合を目ざし、人民の苦闘を真に共有しうる闘いの質をかちとりつつあるという一点である。

このことは帝国主義本国階級闘争にとっていかなる意味をもっているか、われわれは、この点に関して正しい認識に到達することが決定的に重要である。

革命が他ならぬ戦争であり、戦争が他の手段をもってする政治の延長である限り、戦争＝革命の政治は、一点の曇りもない政治的正しさ＝真の階級的普遍性をもたなければならない。革命運動＝革命の政治は、この階級的普遍性を獲得することによってはじめて、階級的真理を実現しうるし、階級的な個の存在と意識性の同質性を獲得しうるし、生死を賭した政治たりうるし、最後の勝利への手段を獲得しうるのである。しかもこの階級的普遍性は、決して帝国主義本国の買収された上層グループのなかには存在しえない。それは、最も抑圧された下層グループ人民の闘いとその闘いとの血塗られた連帯と結合のなかにしか存在しえないし、被抑圧植民地人民との国境を越えた連帯と結合のなかにしか定立しえない。この立論の妥当性は、一七年ロシア革命以後のすべての帝国主義本国における革命運動がたどった軌跡と、それと好個な対称をなす植民地革命戦争の今日的勝利という二つの歴史的事実の中にある。

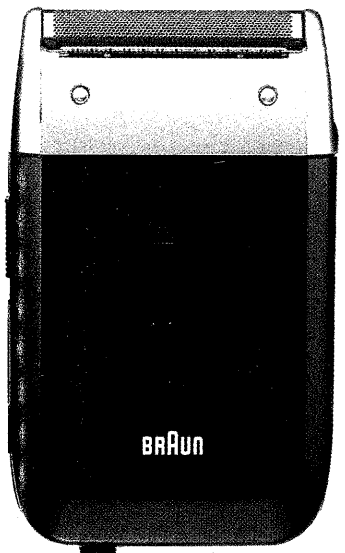
この意味で、革命的左翼が担おうとしている反差別＝解放闘争への連帯と合流こそは、革命の原点への下向であり、上昇である。

革命的左翼は二十年間の苦闘を経て、かかる下向＝上昇志向を媒介にして、今、ようやく真の未来史への巨歩を開始しつつあるといえよう。

なお、革命的左翼の歩んだ二十年間の足跡を概括しえたとしても本稿はあまりにも不十分である。個々の闘い、個別党派の消長・綱領＝路線論争、政治展開などの様々な歴史過程を歴史全体の中に通史として位置づけたとは、到底いえない。とりわけ革命的政治潮流として登場した革命派労働運動については、ほとんどふれることができなかった。それは別の機会に稿をゆずりたい。

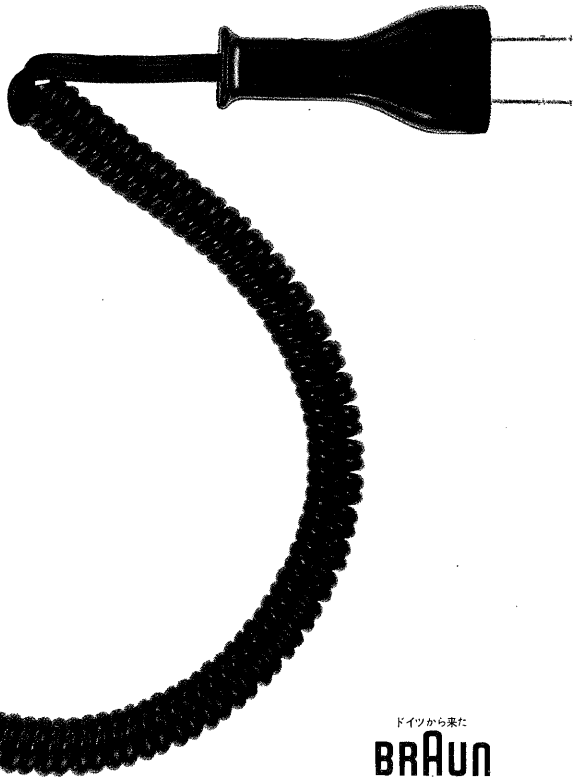
罰と功徳の転変きわまりない人生を描く
小説創価学会
陶郷栄一著
四六判上製 980円
流動

Braun synchron 100
6,400円のお求めやすいブラウン シンクロン。



シンクロンの新しい仲間…《ブラウン シンクロン100》。お求めやすい価格で新発売。網刃は、厚さ0.05ミリ、六角と平行四辺形を組み合わせた理想のシンクロン網刃。剃り残しを知りません。さらに、剃りにくい部分もはやく確実に剃りあげる薄形です。カールコードは扱いやすい固定式。剃る機能に徹した《ブラウン シンクロン100》。すべてのパーツをそろえて、アフターサービスも完ぺき。

ブラウン シンクロン100
本体（カールコード付）……¥6,400
ブラウン・ジャパン株式会社
〒231 横浜市中区山下町25 TEL045(681)7951



ドイツから来た
BRAUN

別章　治安弾圧とフレームアップ

はじめに

革命的闘争の発展は、必然的に権力の反革命攻撃を呼び寄せる。闘う側の持続的な行動が、そしてなによりもその闘いの内包する波及力は、弾圧のエスカレーションをもたらさずにはおかない。闘いが支配秩序―治安の根幹を揺るがし、あるいは支配構造の許容し包摂しうる枠組を突破する質をもつとき、支配の形態を問わず、権力の本格的な治安弾圧＝直接的な暴力支配のメカニズムは動き出す。

弾圧は、個別の闘いの圧殺、報復から、組織、運動体への解体攻撃、無差別の見せしめ弾圧、さらにはいっさいの革命的ないし反権力的思想そのものに向けられていく。その過程で、「民主主義」の仮構ははぎとられ、支配と抑圧のシステムのより「高度」な再編が意図される。それを「平和裡」に「国民的合意」の見せかけのもとに実現することが現代帝国主義に与えられた課題であり、これに対して、国家の暴力支配を白日の下にさらけ出すとともに、弾圧の深化、拡大を闘いのバネとし、加えられた打撃を反撃の糧に転化していくことが、革命的左翼と戦闘的人民に課せられたテーマとなる。

六七年一〇・八以降の革命的左翼と戦闘的人民の闘いは、この国の権力機構に深刻な衝撃を与えた。六五年日韓闘争で、機動隊のサンドイッチ規制の壁に封じ込められた少数の異端者たちは、角材と石という原始的武器をもって、機動隊の防衛線を文字通り粉砕し、羽田空港への最終阻止線である三つの橋をふさぐ装甲車を奪い、炎上させた。問題は、山崎君虐殺によって闘争が鎮静化するのでなく闘いが党派間の相克をすらエネルギーに転化して、拡大の一途を辿ったこと、佐世保、王子、成田を経るなかで、広範な人民の共感が生じ、なかでも現場の群衆が戦闘に加わっていったことにある。

ベトナム人民の不屈の闘いに先導された世界各地の反乱と呼応する闘いは、またこの国における高度成長の神話の崩壊を知覚しはじめた民衆にも、衝撃を与えたのだった。

引きつづく日大・東大をはじめとする全国学園闘争は、新しい闘争主体をおびただしく産み落とし、警察は六八年一〇・二一まで、守勢に立たされたまま黒星を重ねる。しかし、この過程で、弾圧機構は〈新左翼〉を弾圧対象として戦略的に捉え、これを基軸に据えた治安維持―支配秩序再編強化のプログラムを実行に移しはじめる。

機動隊員の大幅増員と装備、機動力の強化、加えて「群衆対策」の進展によって、六九年十一月蒲田をピークに、街頭を制圧した弾圧機構は、七〇年代にはいって、闘争のゲリラ戦的展開に悩まされることになるが、これを機に予防弾圧の質を前面に押し出し、フレームアップの手法をテコに、際限のないエ

スカレーションの道を突き進んでいる。幻の反革命王国をめざして。

山崎博昭から東山薫までの十年間、数知れぬ人々が権力の刃に生き血を吸われ、傷つき、身体の機能を破壊された。よく闘った者も、また闘っていなかったものも、闘うつもりのなかった者も、牢獄にたたきこまれた(ている)。裁判という茶番のなかでは、長く執拗な反撃が続けられている。すでに忘れられようとしている弾圧との闘いが、いまの闘いの不可欠の一部を構成している。

前線と後方の区別は、七〇年代の治安弾圧の深化のなかでは、さしたる意味を持たなくなった。三里塚野戦病院における東山薫虐殺は、そのことの追認にほかならない。

六〇年代後期の治安弾圧

一〇・八羽田以降の街頭実力闘争に対して権力側は、なによりも暴力の独占的行使権を誇示する意味からも、金にあかせて機動隊の人員と装備を増強し、訓練を重ねる一方、人民の側の原始的武器を奪い、戦闘部隊を圧殺することを意図した。いわば当然の反応である。六八～七〇年度の三年間に、警察庁は警察官一万六千人の増員を実現しているが、うち機動隊が実に八千二百人、ほかに公安課要員(私服)一千名が一挙に増強された(他は外勤警察官)。しかも、正式に機動隊員として認められた増員ワクは二千五百人であって、五千二百人は外勤警察官増加の名目でヤミ増員されている。

この時点で警察官総数は約十八万人に達することになるが、こうして警察力の飛躍的な肥大化、そして警察機構全体としての警備・公安主導の体制＝政治警察化が実現していく。この国特有の全国すみずみまで敷設された派出所制度とそこに駐在し、巡回する外勤警官がこの間公安情報収集の末端触手として徹底した教育を施されている事実を考え合わせれば、日本国警察がなまじっかな軍隊などおよびもつかぬ、実力をそなえた、国内向けとしてはまさに世界一の弾圧機構であることがわかる。そしてもちろん、この巨大な官僚組織は具体的な闘いのなかで垣間見ることができるように、怖れおののかねばならぬような代物では全くない。

街頭実力闘争に対する弾圧部隊の第一の任務は、闘争参加者をできるだけ肉体的に痛めつけることであった。逮捕し、身柄引渡しの手続きを完了してからでは遅い。自らの安全を確保したうえで、抵抗力を失った人間を数人がかりでリンチする場面にこそ、暴力についての国家の独占権は見事に表出される。同じ理由からガス弾、ガス液の成分は「改良」され、遂には毒ガス抜きの硬質プラスチック製の模擬弾が併用されるに至る。火薬を装てんしないからといって、この弾丸に殺傷以外のどんな効用が期待しうるだろうか。ついでにいっておけば、七〇年代に入って続出する人民の側の「武器」としての「爆弾」の圧倒的多数は、よかれあしかれ性能的、構造的に殺傷力をもたぬ物体であった。警棒、ナチス棒はもとより、ジュラルミン楯、ヘルメット、軍靴等もまた加害用の武器としての機能を兼ね備えていたことは周知のとおりである。

六七年

2・26	砂川基地拡張阻止闘争	一〇人
5・28	〃	五二
7・9	〃	四七
10・8	佐藤訪ベト阻止羽田闘争	七五

(山崎博昭虐殺)

11・12	第二次羽田闘争	三四七
六八年		
1・15	佐世保闘争（飯田橋事件）	一三二
1・16	〃（博多駅事件）	五
1・17	〃（平瀬橋）	二七
18	〃（佐世保橋）	一五
	〃（日比谷）	一〇八
19	〃（佐世保橋）	二八
	〃（外務省）	九一
2・20	王子闘争	三六
26	成田闘争	一七
27	王子闘争	六
3・3	〃	四九
8	〃	一五七
3・10	成田闘争	一九八
28	王子闘争	八一
31	成田闘争	五一
4・1	王子闘争（榎本重之虐殺）	一二〇
2	〃	九
8	〃	二八
15	〃	四六
（王子闘争 計六三二人、成田闘争 計二六六人）		
4・21	ベトナム反戦闘争	二七
26	ベトナム・沖縄闘争	一二六
27	〃	二一七
28	〃	六四
5・30	反戦統一行動	四四
6・7	全学連統一行動	二四〇
6・21	安保粉砕・アスパック阻止 全学連統一行動	四三
6・26	米軍燃料タンク車輸送阻止 統一行動	三六
6・28	東洋大闘争	一七二
	アスパック粉砕御堂筋デモ	四二
7・17	米軍弾薬輸送阻止闘争	
21	〃	五二
22	〃	
7・20	日大闘争	六四
7・27	三木外相訪豪阻止闘争	六三
7・31	米タン阻止闘争	八
8・1	〃	六九
8・17	大阪空港軍事使用反対闘争	四四
9・4	日大仮処分執行阻止闘争（警官一名死亡）	一三二
7	日大闘争	一二九
12	〃	一五四
22	米タン阻止、国鉄五万人合理化粉砕闘争	一九五
10・8	羽田一周年闘争	一九三
21	国際反戦闘争	一〇五六
11・7	沖縄闘争	四七一
12	日大（芸）バリ防衛戦	四六
12・21	上智大闘争	五二
六九年		
1・9	東大闘争（対民青）	五二
〃	（七学部集会）	一四九
18	〃（法・列品館）	二四四
〃	〃（神田・本郷）	六七
19	〃（安田講堂）	三七六
〃	（お茶の水）	八〇
29	日大闘争（千葉）	四〇
2・4	沖縄ゼネスト支援闘争	四二
12	関西学院大闘争	八七
2・21	中大奪還闘争	二二二
27	電通大闘争	一二九
3・1	京大入試粉砕闘争	七三
3	〃	
4	東大闘争（駒場）	四一
21	京都府立医大闘争	四七
22	〃	
25	日大奪還闘争	四六
4・10	東京外語大闘争	一二八

12	日大奪還闘争	一二七
4・28	沖縄闘争	一〇七七
5・31	愛知外相訪米阻止闘争	三六九
6・8	アスパック粉砕闘争（小田原・伊東）	四四〇
9		
11	日大バリスト一周年闘争	四六
15	反安保統一行動	二二二
28	新宿西口フォーク集会	六四
8・4	大学立法粉砕闘争	一一八
5	〃	
17	広島大闘争（バリ防衛）	五六
18	〃	
9・3	早大闘争（バリ防衛）	九〇
5	全国全共闘結成大会	五五
20	京大闘争（バリ防衛）	一二一
22	〃	
30	日大奪還闘争	三五六
10・10	羽田二周年闘争	一四四
21	国際反戦闘争	一五〇五
11・13	佐藤訪米阻止闘争（新宿・銀座・大阪、糟谷孝幸虐殺）	三二二
16	佐藤訪米阻止闘争（蒲田）	一八五六
17	〃	三〇〇

右表は六七～六九年の主要な闘争における逮捕者数（全国）である（便宜上警察側資料を多用しているので人数に正確性を欠くおそれがある）。

街頭、学園の闘争力をそぎ落とすために、第二次羽田闘争から「大量検挙方式」がとられた。大規模な闘争の場合には、事前に都内各警察署の留置場の「欠員」分から逮捕予定者の概数を弾き出すこともある。逮捕の名目としては、佐世保闘争で法大を出発した部隊を飯田橋駅に至る路上で挟撃した予防検束事件で、凶器準備集合罪が適用され（一三二名中五名起訴、二審無罪、最高裁逆転有罪）て以来、この法規が立法時の附帯決議（政治闘争には適用しない）を無視して、街頭実力闘争鎮圧用のかっこうの治安法規として乱用される。予防検束とともに闘争現場では、騒乱罪的効果（全員検挙）をうるために使われた。

古典的な公務執行妨害罪も、同じ佐世保闘争の博多駅事件に見られるように、いいがかりをつけ（身体検査の強要）ておいて、一方的に「混乱状態」をつくり出し、片っ端から逮捕する、という拡大適用がまかり通ってくる。とっておきの騒乱罪は六八年一〇・二一新宿で、また破防法は煽動条項が六九年四・二八、同十一日大菩薩、七一年十一月沖縄闘争に適用されていく。

こじつけの名目による大量逮捕は、当然ごく少数のみの起訴という結果を招く。起訴できない被逮捕者が大量に出ることは、そのまま逮捕の不当性を意味するが、弾圧する側にとっては、〃せっかくバクった〃者をみすみ

COTTON-100%
さわやかに着る《肌着》
□さわやかなローヤルソフト
お肌と衣服との間の湿度は44%がもっとも快適です。高級エジプト綿のもつすぐれた吸湿性、通気性を最高に生かした日清紡ローヤルソフト肌着は、快適さの条件をよくそなえた肌着です。
日清紡
ローヤルソフト
□高級肌着
綿100%

す次の闘いへ送り出すのはいかにも惜しい、とじつけて逮捕できた以上、とじつけの起訴もできるはず、ということになる。六八年後半から大量起訴―長期拘留の路線が定着していく。裁判所は公判を開く前から被告人を悪質事犯と認定し、隔離政策に積極的に協力することで、治安機関の一翼としての立場を鮮明にする。警察、検察、裁判所の連携がここに確立し、裁判所はさらに保釈金の吊り上げによって、闘争の財政面からのしめつけに加担した。

前記別表逮捕者数の推移は、他方でこうした弾圧の深化にもかかわらず、闘いの火の手が燃えさかって行ったことを示している。とりわけ治安機構にとって大きな問題を提起したのは、街頭戦の現場における群衆の存在であり、闘いを経るごとにその数も、戦闘性も高まることであった。群衆を現場に近づけないこと、戦闘部隊と地元住民を対立させること、「過激派＝暴力集団」のデマゴギーをまきちらすこと、要するに分断と孤立化に向けてあらゆる策略と工作が執拗に展開された。戦闘部隊が解散しはじめてからの新宿・騒乱罪発動は、多分に民衆への恫喝の意味が込められていた。

群衆対策から一歩進んで、警察を「市民の守護役」に位置づけ、防犯協会、交通安全協会、自治体、町内会などのチャネルを通じて地域社会にくいこみ、とりこんでいくC・R作戦（コミュニティ・リレーションズ）が広範に進められた。闘いの舞台が学園に移っていくなかで、都内各所に警察キモ入り、マスコミちょうちん持ちの「暴力学生から市民生活を守る」自警団が組織されていった。

あつかましさも度を通りこしたC・R作戦というデマゴギーの組織化は、七〇年代治安弾圧の体系の基底に据えられることになる。大学当局を屈服させ、懇請を条件つきで認めたうえで、バリケード撤去用の新兵器を含む十分な装備と兵力でキャンパスに乗り込み、解放空間を軍事制圧していく。あとは、さしずめ植民地現地軍ともいうべき、学内右翼、体育会、職員、民青、ガードマンによる自警隊がうけつぐ。

学園を追われ、数多くの仲間を奪われ、街には石はもちろん砕くべく舗石もなく、鉄路は金網で覆われた。六九年一〇・二二高田馬場、新宿、一一・一六、一七品川―蒲田一帯で、厳重な検問体制を突破して出没した闘争者たちは、乏しい武器で激しく闘い、敗北した。

一一・一三、大阪の佐藤訪米阻止集会で、府警機動隊の無差別襲撃の中で頭部を警棒で強打された糟谷孝幸は、歩行不能のまま逮捕された。両手錠で一キロ引きずり回され、昏倒したまま九時間の間手当を受けることなく死に至らしめられた。

七〇年代の治安弾圧(1)

弾圧機構は、〈安田〉から〈蒲田〉に至る六九年を「勝利の年」と総括した。安田攻防戦に先立って「機動隊の任務と努力に対する理解と認識が十分、都民、国民に徹底され〈デモクラシーを守るわれわれの機動隊〉としての意識が一般に高められるよう努力せよ」と訓示した弾圧部隊総指揮官は、一年後次のように語った。

「昨年を通じて、治安警備の方向は、おおかたの支持を得つつ、警察の任務を遂行するデモクラシーの下における治安の、その一つの実験であったともいえようと思うのであります。世界の国々で、社会主義国家はもとより先進民主主義国家といわれる国々において、

暴力の挑戦にどのように対応しているでありましょうか。あるいはそれらの国々が、必ずしも到達していない警察運営の一つの重大な規範を、わが警視庁が先頭に立って生み出すべき実験を試みたといってもよいのかも知れない」（警視総監秦野章七〇年年頭訓示）

秦野は「デモクラシーの治安の根本というものは、攻撃ではなく守りであり、すなわち予防が最も大切である」と説く。暴力の挑戦すなわち腐敗した体制への挑戦を、巨大な物理的攻撃力をもって圧殺するだけでなく、その力をもって行為として現われる前に予防せよという。要は、反体制思想の抹殺を人民に対する分断支配の徹底化のなかで果たすという実験を、七〇年代の警察の課題として設定したわけである。かくて七〇年代の治安弾圧は、一段と攻撃的性格を露わに、乱闘服ではなく私服を前面に立てて進められていくことになる。思想を摘発し、人民を工作する仕事が中心になるからである。

しかし、弾圧機構は再び黒星を重ねる。七〇年三月末に赤軍派のハイ・ジャックが成功し、沖縄、三里塚が決戦段階を迎えた七一年には、再び大規模な行動が盛り上がるとともに闘いはゲリラ戦的性格を強めた。「爆弾」が多発し、警備部隊が奇襲攻撃にせん滅される事態が生じた。六・一七明治公園の沖縄集会では鉄パイプ手りゅう弾で機動隊員三十数名が重軽傷を負い、九・一六三里塚では砦を攻撃している間に、東峰十字路で機動隊一個大隊が火炎びん攻撃でせん滅され、三警官が死亡、十一月には沖縄、東京で機動隊員各一名が逃げおくれて焼死した。

同年中に発生した「爆弾事件」は東京を中心に五十数件に達し、その大部分は警察施設を目標とするものであった。多くは威力の小さいデモンストレーション効果を狙ったものであり、製造技術面でも幼稚で、爆発に至らないものも少なくなかったが、末端の外勤警察官に不安と動揺を与え、警察の威信に泥を塗る役割を果たした。十一月沖縄闘争のピークに向けて「爆弾」は激発の様相を強め、一〇・一八日石ビル郵便局（小包爆弾・誤発）、一二・一八土田国保邸（小包爆弾）、一二・二四新宿追分交番（Xマスツリーにセット）の三件では六・一七の手りゅう弾とともに、例外的に威力の大きい爆弾が登場、死傷者を出した。

日石ビルで誤発した二個の小包の宛先は、当時、現職の警察庁長官後藤田正晴と成田空港公団総裁今井栄文、土田は当時警視庁警務部長、現警視総監、これに先立って八月には警視総監公舎でも「未遂事件」が発生している。大幹部が相次いで標的とされたことは、警察にとって由々しい事態と受けとめられたようである。

日石ビル事件につづいて十月下旬には都内の交番が連続的に狙われ、警視庁は爆発物警戒取締本部を設置した。十一月沖縄国会を前に、世界一の能力を誇る警視庁は警官死傷事件とあまたの爆弾事件に対して、ただ一人の「犯人」も捕えられない状態に陥った。しかし、政治的弾圧機関の捜査能力、弾圧能力というものには、事件が必要なときは事件を発生させ、犯人が必要な際はそれをつくり出す仕事も含まれる。報復とみせしめが求められている時に、手をこまねいていることは許されない。

十一月早々、弾圧機関は警視総監公舎爆破未遂事件のフレームアップを強行するために、別件デッチあげ逮捕に着手、「爆弾犯人」づくりのあとに引けぬ作戦に踏み出す。一一・一〇沖縄ゼネスト闘争の警官死亡に

は、救出活動に当っていた松永優の殺人犯デッチあげを実行に移し(七六年無罪確定)、十二月に入ると、九・一六の報復と三里塚闘争の圧殺を狙って、三里塚青行隊への集中反復弾圧を開始、別件逮捕のくり返しの末、八カ月後には「傷害致死」フレームアップを実行した。十一月中には八月の朝霞自衛官殺害事件で、「赤衛軍」グループを逮捕、この謀略的要素の強い事件を材料に「過激派狩り」の布石を進めた。「赤衛軍」は「総監公舎」被弾圧者とも結びつけられ、三里塚青行隊等とも相関づける幻のゲリラ組織のデッチあげ、それによる「ゲリラ諸事件」の一挙的「解決」も意図されたが、この構想は破産する。しかし、その過程でマスコミを駆使した情報操作＝デマ宣伝によって、「過激派＝社会の敵、警察＝正義の味方」のイメージづくりを進める効果は十分に果たしたし、デタラメな「自供」にもとづく滝田へのデッチあげ別件指名手配(強盗予備)を口実に、マスコミ操作と表裏一体をなす思想、表現レベルでの広範で隠微な弾圧が試みられた。

攻勢的弾圧の突破口を形成した「総監公舎」フレームアップの過程で、①別件逮捕方式を政治弾圧に公然と発動したこと、②しかもその別件自体を周到な計画の下に、民間人を協力させ目撃者に仕立てあげてフレームアップしたこと、③既存の判例からしても到底爆発物取締罰則(以下爆取と略称)に該当しない物件を非科学的ペテンまるだしの「科学鑑定」によって、爆取の「爆発物」にとじつけ、④他方では爆取を適用できそうにない事実をもとに軽微な罪で片付くと被疑者を欺し、ウソの「自白」をとりつけるキメ手としたこと——などは、開始された弾圧の新しい質を端的に表示するものであった。

「爆弾事件」と呼ばれるものに、おしなべて適用された爆取は、明治初期帝国議会開設以前に、自由民権運動を圧殺するために藩閥政府から布告された、専制支配のための治安弾圧法規であり、爆発、不発、未発のいかんを問わず、死刑—七年以上の刑を使用罪として規定している。その罪は客観的な基準によって成立するのではなく、「使用者」の頭の中にある「治安を妨げる目的」の有無による。最高裁は、戦後の議会で廃止手続きがとられていないことを根拠に、これを合憲としているが、現憲法の罪刑法定主義のたてまえとつじつまを合わせるために、物の威力が一定程度以上(爆弾らしく)あることを判例で示した。(最近の判決はこの基準も無視し始めた)

爆取が、七〇年代治安弾圧のキメ手として乱用され出したのは、たんに「爆弾事件」が多発したからでなく、権力の恣意的運用、際限ない拡大解釈を可能とする前近代の弾圧法規としての性格にあり、したがってフレームアップを行なうためにも適しているからである。最近の事例(七七年五月)でも、現実の事件とは無縁に、爆取を名目とする家宅捜索が全国一せいに二十ヵ所も行なわれている。被疑事件とは、数年前に被疑者Mが爆発物を所持したというものである。これが全くデタラメな話であることは、同時に自宅から任意同行された当のMが逮捕もされず数時間後に帰されていることからも明白である。Mとはほとんど無関係の人が関係をデッチあげられ、住居を荒らされる。目的は〝過激派人脈〟の探索(人々の住所録調べ)であり、その他の情報収集であり、いやがらせである。これもまたC・R作戦の一環というべきなのであろう。

それはともかく、「総監公害」フレームアップが進行中に発生した土田邸、Xマスツリ

ゴルフに釣りに磯料理……●政府登録国際観光旅館
〔登旅第142号〕
●国際観光旅館連盟会員
●日本観光旅館連盟会員
●日本交通公社協定旅館
伊豆あじろ温泉
ホテル 静洋閣
オート● レストラン〈ヒロ〉
HIROH
TEL熱海(0557)68—2211・東京案内所(03)445—1415
447—0071
BW 64レーン
山手線五反田駅から歩いて2分
GOTANDA
BOWLING CENTER
GOHO 東邦地所株式会社
東邦観光株式会社
＊東京都品川区東五反田2丁目9番1号
＊〒141 TEL 447—0161(大代表)

ーの爆弾を機に、七一年末警視庁は「極左暴力取締本部」を設置、秘密警察組織の公然たる形成に着手するとともに、首都の警察機構の政治警察化の方向を明確に打ち出した。同本部の表向きの初仕事は、外勤警察官を総動員しての「アパート・ローラー作戦」であった。土田邸、Xマスツリーで、警察官以外に死傷者が出た事態をフルに活用して、市民に「爆弾」に対する恐怖と嫌悪感をうえつけ、「過激派」らしき者を選別し、あぶり出す。一方では「爆弾闘争」からいっさいの政治性を抜きとって「狂気のテロ」「爆弾魔」宣伝を行ない、他方では「新左翼」＝危険な政治集団（潜在的爆弾犯）のイメージ操作によって、反権力的行動と思想を危険視する社会的風潮を組織していく。C・R作戦を徹底化する新たな地域活動が、「過激派狩り」だけでなく、体制批判封じ―体制囲い込み、市民社会の管理の強化を目的としていたことはいうまでもない。

地域の組織活動を支え、その前提条件を整備する機能は、マスコミのデマゴキッシュな「反過激派」キャンペーンが担った。人民を分断して密告、スパイを強要し、あるいは「協力者」と「過激派」に分類したうえで、協力者同士を相互監視させるという「アカ狩り」「魔女狩り」の再現は、マスコミの協力を不可欠とするものであったし、この作戦の展開過程それ自体が、すでに十分骨抜きになっていたマスコミを確固たる権力の友に組み込んでいくものとして展開された。おりしも七二年二～三月に発覚した連赤の同志殺しは「過激派」を「病理現象」にすりかえるために、出来すぎともいうべき恰好の素材となった。

支配する側の暴力性の強化を「市民警察」へのイメージ・チェンジをはかりながら実現していくムシのいい手品が成立していく過程は、もちろん分断支配の初歩的原則が貫徹し、フレームアップの土壌が成熟する過程である。「ゲリラ退治」のために回収された「市民的自由」、黙認された官憲の「多少の行きすぎ」が、復元不能のものとして市民社会にのしかかってくるのに手間はかからない。

この時期、「過激派退治」の触手は、例えば反公害住民闘争の先がけとなった水俣病闘争に向けられた。自主交渉要求のチッソ本社すわり込みに対し、ガードマンに協力して警視庁が介入、逮捕者を出しはじめたのが、やはり七一年十二月。ガードマン、職員の襲撃に対して、患者の川本輝夫代表を逮捕、傷害罪で起訴したのは、連赤事件のほとぼりさめぬ五月であった。いまになって狭山暗黒判決の東京高裁寺尾は、検察官の公訴権乱用を批判して、公訴棄却判決を出した。

公訴権乱用の事例としては、例えば全く同じ時期に行なわれた、連赤関連の「犯人蔵匿・隠匿犯狩り」がある。屈服した兵士の自供から、彼らが潜行中になんらかの接触をした人々を洗い出し、相手に応じ、その出方に応じて（接触の態様によってではなく）処分を決めていく。これまた爆取同様に、「近代法」的見地からきわめて問題があり、それだけにやたらには使われなかった法規だが、こちらは刑が軽い（二年以下、但し、「爆取犯」が対象とされている場合は、同罰則九条により十年以下と重くなる）。それだけに処分は弾圧する側の恣意にゆだねられる。逮捕するかしないか、勾留をつけるかどうか、起訴するかどうか、罰金で済ませるか公判請求するか。つまり、治安弾圧を貫徹していく過程―強権をバックに人民を従順な羊に変えていく過程がそこでは演じられ、羊となることを拒否する者は、たとえ

相手を知らなかったたまさかの接触者でも公判まで持ち込まれる。なにしろ屈服した兵士の「自供調書」が都合よく出来上っているのだから、本人の自供はなくて済む。この弾圧は、まさにアパートローラーを補完する恫喝の意味をもっていた。バチルスと見立てた「過激派」を市民社会に接触させないために、「接触感染」した可能性のある人々を、市民社会からはじき出すこと。「過激派」らしい者がまわりにいたら、密告しないとひどい目に合いかねないと思い知らせることである。

この法令が、悪名高い連赤がらみということで、無批判に多用された実績から、これを別件逮捕の名目に利用する道がひらけた。「土田邸、日石郵便局」事件関連の大フレームアップは、他の容疑で指名手配中だった増淵利行と接触していた人々に対する「犯人隠避」容疑による呼び出し、別件逮捕が乱発されるなかで遂行された。

七二年九月から七三年五月までかかってつくりあげられたこのフレームアップは、七一年以来の治安弾圧の実績のうえに立つ弾圧側からの一つの中間総括としてある。別件逮捕の乱発、前後八ヵ月にわたる「むし返し逮捕」の乱用に示される強引な違法捜査の積み重ねが、松川以来の大フレームアップとして結実した。それを彼らは臆面もなく「板金捜査」と名付けた。標的の周辺から真偽とりまぜた「自白」と「情報」を文字通りタタキ出していくやり方だからである。

これが「総監公舎」フレームアップが裁判闘争の過程で早くも破綻を露わにした後に、同じ警視庁公安部のヘゲモニーで進められたこと、この間に「ゲリラ戦」もすっかり鎮静化してしまったこと、政治と無縁に生活してきた「一般市民」までが、「凶悪爆弾犯一味」に加えられたこと、そこに七一年来の治安弾圧の深化のさまと、それをめぐる力関係が反映されていたといわねばならないだろう。

七〇年代の治安弾圧(2)

七四、五年の連続企業爆破と日本赤軍の海外での活動にからむ弾圧は、秘密警察組織の暗躍と弾圧の国際化を柱に、思想弾圧、違法捜査の公然化という方向で展開した。これが治安戦略の新たな段階を示すメルクマールである。弾圧の方法論としては、フレームアップが日常化した。

弾圧は、裁判所の協力の下に、まず、めったやたらの見込み捜索として開始された。七一年の「爆弾」とはスケールのちがうアジア侵略企業爆破に、マスコミのヒステリーは一回りも二回りも増幅したし、いまや爆取なり日本赤軍がらみの名目がつけば、捜索令状ぐらいはどんないい加減な資料による請求に対しても、フリーパスで出るようになった。

具体的な手がかりがなければないほど、誰もが疑われる資格をもつことになり、「闇夜に鉄砲」のガサ、パクリも、公安情報収集の観点からは、無収穫とはなりえない。不当捜査の対象とされた当事者の抵抗力だけがブレーキとなりうるし、抵抗力のなさは不当捜査にはずみを与える。

このなかで思想・表現領域に対する権力の介入もエスカレートした。三菱重工爆破の五日後、警視庁公安は神田・ウニタ書舗から、日共が武闘時代に作成した初歩的な武装闘争教本といわれる「栄養分析表」の店頭在庫を全部数押収した。処分取消を求める準抗告は東京地裁で棄却された。その理由書で判明し

たことは、警視庁がデタラメな資料によって捜索差押令状を東京簡裁から入手した事実、そして準抗告裁判所（東京地裁）は、ウニタ側の主張を一方的に無視したうえで、警視庁公安の創作に加えるに、同「分析表」が三菱重工爆破に関連性をもつかのような虚構をつけ加えたうえで、「出版物自体が犯罪を構成する」と論証ぬきの判断を下していた事実であった。ウニタ側の事実誤認と違憲を理由とする抗告に対して、最高裁は「抗告理由にあたらない」と棄却。

この決定によって、警視庁公安は、今度は「××闘争を拡大せよ」との論文を掲載した政治機関紙「赤軍」十一号を、爆取煽動罪に該当するとして、ウニタ他数ヵ所を捜索した。同紙の編集・発行者と断定され、従って捜索令状に被疑者と記載されたTは、この時の捜索現場の一つである友人宅に、自分を被疑者とするガサの最中にたまたま現われたが、事情聴取もうけず、のちになって全国指名手配される。今年五月逮捕されたTは、自分が同紙の編集・発行にタッチしていず、その組織にも関与していなかったこと、したがってこの事件は恐るべき言論抑圧事件であるとともに、悪質なフレームアップであることを勾留理由開示公判で明らかにした。Tは黙否のまま不起訴となった。

こうしたわけのわからない話も、当時弾圧機関が、直接的には企業爆破捜査の糸口発見のために手当り次第見込み捜査をやったものであり、ついでに爆弾非難の「世論」に便乗して、言論、出版物弾圧の実績づくりを意図したのだという事情を知ることで、それなりにわけだけはわかってくる。この種のインチキ捜査という名の弾圧、強権による情報収集が現在の治安弾圧のひとつの側面として、密かに進められていることは、前出の最近の事例からもうかがえよう。

いずれにせよ、企業爆破と日本赤軍に関連して、なんらかの「見込み」を得られるかもしれない見込みによる、従ってまぎれもない違法捜査が、さまざまな思惑をこめて強行され、強制的「任意捜査」もまじえて、結果としては反体制勢力に関する膨大な情報が集積され、「情報収集ルート」が開拓されたと考えられる。

七五年五・一九の東アジア反日武装戦線一斉逮捕は、秘密警察部隊の暗躍による、より直接的な違法捜査の結果といえる。ここで注目に価いするのは、警察側の明らかにした筋書きによると、企業爆破をダシに弾圧機構が住民対策を強力に推進したのは、被逮捕者を掌中におさめた後であったという事実である。

（七五年）▽四月十九日、警視総監土田の記者会見「民間情報だけが頼みの綱」と市民の捜査協力要請▽四月二十一日、警察庁長官浅沼から全国の警察本部に「事件の未然防止、査捜活動を強化せよ」と指示（外勤、交通のおまわりにハッパをかけたもの）▽四月二十二日、警視庁で「緊急防犯協会長会議」土田が捜査協力を要請、各支部単位で都内のマンション、アパート十九万戸の洗い直しへ▽四月二十五日、警察庁「緊急管区警察局長会議」、警察の全組織を爆弾事件捜査に投入する「非常事態宣言」。

「民間のご協力のたまもの」として東アジア反日武装戦線を「アタマからシッポ」までとらえ、「爆弾犯根絶」を揚言した治安機構にとって、同じ反日武装戦線の声明を伴った同年八月の北海道警爆破、七六年三月の道庁爆破はたいへん都合の悪いことであったし、ま

さに威信をかけた捜査活動が強行された。現場に発する捜査がデッド・ロックにのりあげるなかで、純然たるヤマカンで大森義久にぶち当った官憲は、彼がアイヌモシリ独立に関心を持つ人物であること（その所持する本から）を根拠に、「爆発物製造に供する器具、材料の使用」を名目とするこじつけ逮捕を強行、完全黙否する大森をしゃにむに爆破犯に仕立てあげる路線を突っ走った。「自白」強要のための取調べは、公然たる暴行、肉体的拷問をまじえ、過去の弾圧経験、フレームアップ経験の蓄積を生かし、凌駕する強烈なものであった。「総監公舎」や「土田・日石」、大阪の「西成あいりんセンター爆破」のフレームアップでは、屈服しない者がいても、「共犯者」とされたものを「自白」に登場させることで、容易に起訴できた。大森は単独で弾圧されたために、捜査官憲のあせりは深刻だった。札幌地検は、高検、最高検との協議の末、結局完黙のまま、道庁のみの起訴に踏み切ったが、それはむしろ「状況証拠」のみでも起訴しないわけにはいかなかった事情をこそ物語っているだろう。マスコミに逆煽動された検事は、冒頭陳述書に「大森が完全黙否を続けていることは、犯行を認めたことを意味する」と記し、裁判所からその記述の取消しを命じられた。

警察の拷問的取調べが失敗したあと、東京地検から呼び寄せられて大森と対決した検事松浦の論理を少し長いが引用しよう。現代の思想検事は、こんなふうな「説得」を一日十時間もしゃべりまくる。

「ぼくはね、今まで多くの過激派といわれる人たちを調べてきたが、心やさしい若者ほど、より過激な行動に走るということを知った。爆弾左翼といわれている人々は、みんな心やさしい若者ばかりだ。しかし、そのなかでも東アジア反日武装戦線の諸君のような人間には、今まで出会ったことはなかった。しばらくはあのような人間は現われないと思う。

天皇お召列車爆破事件、いわゆる虹作戦では、逆に彼らのほうから、われわれにこの事件を起訴せよとつめよってさえきたんだよ。大道寺君らにいわせれば、東アジア反日武装戦線の闘いは、天皇爆殺闘争を闘いの根底に据えることで、他の爆破闘争も、その本来の意味をもつものだ、ということだったんだ。つまり、彼らは捕っても、あくまで自分たちの闘いを堅持せんとした。黙秘という小ブル的な精神とは全く無縁な人たちだったんだよ。

君はチロンロップって知ってるか。アイヌ語でどこにでもいる生き物という意味で、エゾギツネを指すそうだ。昔はその名のとおり北海道のどこにでもいたんでしょう。そしてそのように呼ぶアイヌもまた、どこにでも平和に暮していたことでしょう。しかし、現在私たちはチロンロップを見ることができない。たまに山奥のハイウェイで、車にひかれたという話は聞くが、われわれシャモが侵略し、住みづくようになってからは、チロンロップは殺され、生き残ったものも山奥へ追いやられてしまい、その数も激減してしまった。アイヌもそれと同様に、シャモの侵略によりどんどん辺地へ追いやられ、絶滅させられようとしている。表立ったアイヌの反乱も今は途絶え、アイヌは沈黙を強制され、耐えることを強制されている。

君は、そのアイヌになり代って二発の爆弾を投げたんではなかったんだろうか。だが、君は今日まで黙秘してきた。そして語ろうと

はしていない。一方、マスコミは無責任な記事をたれ流しつづけている。爆弾マニア説に代表されるように、君の真の姿はどんどんゆがめられてしまう。君はこのまま黙っていてもよいのか。権力のデマ宣伝を許し、闘いの本質が日に日にねじまげられていくのを許していいのか。

アイヌの人や朝鮮の人が、君は何をいうんだろうかと注目している。もし、道庁爆破をやった者がアイヌであったとしたら、彼は君のように黙秘し、マスコミのデマ宣伝を許しておくだろうか。絶対に違う。彼らは声を限りに叫ぶだろう。ウタリに向って、闘いの真の意味を語り続けるだろう。

もし、私が君の立場だったら、私もそうする。自分が行なった闘いを最後まで引受けていくこと、最後まで命をかけて防衛していくことは革命家にとっては、ごくあたりまえのことだ。そして、私ならたとえ私が道庁爆破を実行していないとしても、おれがやった、と叫ぶよ。なぜならば、裁判で日本人のアイヌモシリ侵害の犯罪を糾弾していくという闘いができるからであり、その闘いが今まさに与えられんとしているからだ。それにこの機会を逃したら、果たしてそれ以上の闘いができるかどうか疑問だからだ。

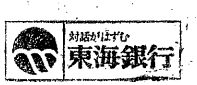
革命家とは、革命のためだったら喜んでおのれの命をもささげる人間をいうんでないだろうか。革命の前進に役立つのであれば、喜んでおのれの命を捧げる人間をこそ、真の革命家というのだと思う。違うだろうか。君は道庁、道警爆破を両手にひっさげて法廷に立つべきだ。そして、アイヌ、朝鮮人の怒りを日帝にぶっつけていくべきだよ。天皇、首相、北海道開発庁長官、道知事、道警本部長らを証人として法廷へ引きずり出し、日帝のアイヌモシリ侵略、占領の犯罪、朝鮮人の強制連行、虐殺の犯罪を弾劾していくべきだ。そうすれば、この裁判が必ずやアイヌモシリ独立闘争の一つの役割を果たすことになると思う。

ぼくはね、君が北海道を離れる寸前に捕まったということは、アイヌのカムイが君を引き止めたんだと思っているよ。君は命をかけてアイヌのために闘ってきた。その君が北海道を離れるということは、どういうことだろうか。アイヌを見捨てるということだ。かつて君自身が否定したはずの、唾棄すべきシャモに逆もどりするということだ。違うかね。君は、いや違うおれは決してアイヌを見捨てることはしない、必ずや、またどこかで爆弾闘争を続けるつもりだというかもしれない。だがな、日本の警察はそんなにあまくはないよ。もし、この事件が不起訴処分になり、ここから出ることができたとしても、君はもう二度と爆弾を作ることはできないし、もちろん投げることはできない。

君はね、自分が逮捕されたのは、日本人に殺されたアイヌと朝鮮人の怨念が君を引き止めたんだと考えるべきだ。確かにこれからは外にいた時のように爆弾を投げることはできない。しかし、例え両手両足をもがれても、残された口を武器にして、裁判で日帝を弾劾する闘いを続けていくべきだ。闘いを続行する限りにおいて、君はアイヌの人たちや、朝鮮の人たちとともに生きることができるはずだ。狼や大地の牙、さそりの諸君は、しっかりと足場(自供調書のこと)をつくった。彼らは今それを利用して、裁判闘争で日帝と闘っているんだ。さあ君もそのために、足場をつくりあげろよ。一緒にその作業を進めていこうではないか」(大森義久意見陳述から)

(長〜いお付き合い)

小さな手のぬくもりが、何かを話している。
心から心へ、今日から明日へ。
ふれあう手から、
長い長い親子の付き合いが始まっている。
東海銀行も全国200余店、皆様の暮らしのお手伝いとして
長〜いお付き合いを大切にしています。



〔2〕

論文抄録——新左翼の思想と戦略——

反帝・反スターリン主義

黒田寛一『現代における平和と革命』

一九五六年のスターリン批判とそれにつづく国際共産主義運動の動揺、とくにハンガリア事件は、明らかにスターリン主義の限界状況を露呈させたのであった。だが、それにもかかわらず、このスターリン主義を克服するための理論的および実践的な努力が、国内的にも国際的にも、きわめて微弱であり、緩慢であったことは、否定しがたい事実である。とはいえ二〇世紀現代の世界史的現実の進展、プロレタリア世界革命の壮大な展開は、かならずや同時にスターリン主義の克服として実現されるであろう。いや、そのための闘争は、フルシチョフらのネオ・スターリン主義官僚の居直り工作や欺瞞をあばき粉砕しつつ、現に執拗につづけられている。

マルクス主義者だと自他ともに任じているほとんどすべての人々が、スターリンとスターリン主義について完全な沈黙をまもっている時に、フランスの哲学者H・ルフェーブルが、哲学上の生きた現実的諸問題、スターリン哲学の誤謬やエンゲルス唯物論の欠陥をあばきだし、左翼的批判の一典型をしめしたことの意味を、マルクス主義哲学者G・ルカーチが非スターリン化を要求してたちあがったハンガリア勤労大衆とともにたたかってクレムリン官僚に逮捕されたこととも関連して、われわれは十分ほりさげるべきである。

かつてのわれわれもまた、現代唯物論の俗流化に抗してたたかってきた。現代マルクス主義理論戦線の頽廃は、しかし俗流化とか偏向とかいった簡単な問題ではない。その根は深くかつ広い。それは正統派マルクス主義を僭称しているスターリン主義が、まさしく虚偽のイデオロギーでしかないからだ。このゆえにわれわれは、たんに俗流化に抗してたたかうのではなく、まさしくスターリン主義の虚偽性とその現実と運動そのものを粉砕し克服するために決起すべきである。これをなしとげるための革命的批判は、たんに理論戦線の頽廃を弾劾するだけの理論的批判の段階と水準に釘づけされてはならない。

反スターリン主義の戦線が実践的にも理論的にも結成され、反スターリン主義のイデオロギー闘争は組織的に物質化されなければならない。このことは、スターリン主義や社会民主主義で汚染された既成の指導部の裏切り行為によって方針と方向をうしなっている幾百万の勤労大衆のまえでの直接的な宣伝や煽動と有機的にからみあわされつつ実現されなければならない。革命的プロレタリアートの政治闘争を権力の確立へむかって指導しうる革命的共産主義者の大量の創造と結集が、集眉の課題であるからだ。左翼戦線における今日のイデオロギー闘争は、まさにこのような現実的課題にこたえるものでなければならない。

かつてはスターリン哲学の誤謬を批判しながらも、今日ではトロツキズムに憎悪の感情をすらいだき、しかもトリアッティ主義者の一群と協力しつつ反トロツキストへ転落した堕落せる反スターリン哲学のエンゲルス主義者。かつてはルフェーブルのマルクス主義的ヒューマニズムを高く評価しながらも、今日では完全にかたく沈黙をまもっている平和ボケした文芸評論家や昭和哲学史家たち。あるいはアヴァンギャルド芸術家と自称しながらも、「日本にレッキとして実在する前衛党」などとアナクロニズムもはなはだしいタワゴトを平然とはきだす「老芸人」。さらに、かつてはヘーゲル禍におちこみながらもある創造的な情熱をもって研究活動をしていたが、今日ではスターリン式経済学のおとし穴に完全にはまりこんで身動きできなくなっている経済学者たち。かつてはスターリンや毛沢東の教条主義的解釈でお茶をにごしていたが、彼らの権威失墜以後はもはや解釈の対象をうしなって、ただ手をこまねくか、さもなければクレムリン系の小ネオ、スターリン主義者やトリアッティ主義者の二番せんじで、からくも自己の余命をたもっているにすぎない自称現代マルクス主義者の一群。

そしてまたスターリン主義の克服をその社会民主主義化の方向に発見して自己陶酔におち入っている政治学者たち。……ほとんどすべての日本マルクス主義者と名のる人たちは、すでに完全に死滅しつつある。自己の哲学の敵ですらあるルカーチをクレムリン官僚からうばいかえそうと立上ったJ・P・サルトルや、党員権をハク奪されながらもマルクス主義者としての自己の信念と確信を貫徹せんとしているH・ルフェーブルなどのような気骨ある理論家や思想家は、宇野弘蔵・埴谷雄高・吉本隆明などをのぞいて、ほとんど全くあらわれなかったといってよい。

それほどまでに既成の左翼戦線は瓦解してしまっているのだ。クレムリン系の平和運動のお先棒をかついできた日本ブラグマチストたちもまた、暗礁にのりあげてしまった今日の平和運動とともに息もたえだえのありさまであり、日本学生運動の全体としての革命化を白眼視さえしているのだ。

今こそ革命的左翼は、こうした現状を打破し変革するために、あらゆる分野において、その戦線を整備し、プロレタリア解放を実現するための新しい創造の出発点に結集するのでなければならない。

しかも今クレムリン宮殿ではソ連共産党第二一回臨時大会が、七〇カ国のスターリン主義者党の代表者や西ヨーロッパの記者をもまねいて開かれ、かのスターリン批判で動揺し亀裂を生じた彼らスターリン主義陣営の再整備のしあげをなしつつある。一方ではソ連の軍事的優位を背景としながら、ソ連国民経済発展七カ年計画をひっさげて、帝国主義諸国との平和的な経済競争をよびかけるとともに、他方では、ユーゴスラヴィア修正主義にたいする批判とモロトフらの反党グループの断罪とを強力に前面におしだし、かつ人民公社問題で水をさしたことをフルシチョフはケロリと忘れたかのようによそおいながら。……平和共存を戦略化している彼らスターリン主義者の、いわゆる「社会主義」建設と「共産主義」への移行は、しかし依然として危機をはらんでいる。なぜならそれは、はげしい両体制間の軍拡競争を同時に推進する形でなされているからであり、堕落した労働者国家の勤労大衆が、スターリン主義官僚による生産力水準の飛躍的増進のための官僚統制と支配のもとでの労働強度の強化によって、あらたな疎外を必然的に拡大再生産してゆくほかないからである。国有生産手段としてのMTCの解体に頑固派スターリン主義者が反抗しつづけていること、また前近代的な生産様式がなお支配的な中国の後れた農村経済が、確固とした技術的基礎もなしに行きすぎた集団化＝公社化されつつあることなどは、彼らの民族共産主義の立場とあいまって、過渡期社会建設途上の諸矛盾をいよいよ蓄積する方向を今後倍加してゆくであろう。こうして第二、第三のハンガリア革命、つまりソ連圏における政治革命が勃発する物質的基礎が、克服されずにドグマ化され、あるいは社民化されたスターリン主義のイデオロギーや官僚支配とに合体されつつ、強化されざるをえないであろう。これを世界革命の前進のためのスターリン主義官僚政府打倒の闘争へ発展させてゆくこともまた、今日の革命的共産主義者たらんとするものの任務である。こうしてわれわれは、現段階における世界革命戦略を「反帝国主義・反スターリン主義」にしぼりあげざるをえない。

（一九五九年）

第一次ブントの思想

共産主義者同盟「全世界を獲得するために」

このような一九五九年の現代についての検討から導かれる結論はなにか？

それは世界資本主義の危機の成熟であり、この危機を逃れでる道、世界プロレタリヤ革命と共産主義の勝利の客観的諸前提の成熟であり、そして、この前提の存在にもかかわらず国際共産主義運動の勝利を阻害しているプロレタリアートの指導部の危機による人類の歴史的危機である。

そしてこの指導部の危機の克服の道は、ただ一つ――一切の公認の共産主義運動の指導部に対するあらゆる幻想からプロレタリアートを解き放ち、真の革命的マルクス主義の再生にもとずいた革命的左翼を独立させ、このもとに革命的労働者を結集させることによってのみなされるという結論である。

われわれは、「自己の見解や意図を隠すことを恥とする」がゆえに公然と宣言する。

階級闘争を裏切り続けた公認の国際共産主義運動の指導部との思想的、理論的、政治的、断絶をあらゆる権威主義から解きはなって行うことなくしてはプロレタリア革命、共産主義の勝利はありえない!!

階級闘争の利害に先行する仮空のなかに存在する組織原則の神話を否定する。

真実にマルクスの思想を語り、これを物質化するために、あらゆるブルジョア的合法の枠に制限されずに、これを打破し、議会演説や口さきだけの抗議に満足しないで大衆を行動にひきいれ、プロレタリアの利益を守るために闘いを拡大し、民主主義を拡大し、燃えたぎるブルジョアジーに対するプロレタリアートの直接の突撃に、――**社会主義革命の成功を導く能力をもつ革命的前衛を結集せよ!**

社会排外主義に転落した第二インターの英雄と訣別するのみか「分裂者」の罵倒を加え、排外主義者との「統一」を叫ぶ中央派に対しても苛借のない闘争を行って革命的左翼の独立性のために闘ったレーニンを想起せよ。

革命的左翼の独立性をかちとることは現在の労働運動指導部の分裂の過程をして、真のプロレタリアートの期待に応える分裂ならしめるであろう。

あらゆる怯懦と懐疑をふりすてて、「分裂者」の恫喝と脅迫に屈することなく、革命的左翼の結集を組織せよ!

われわれは一切の権威主義から解放され、かぎりない情熱と行動力をもつ若き革命的労働者、インテリゲンチャの同志諸君に訴える。ブルードン・ワイトリング等の小ブルジョア社会主義者と決裂し、真のプロレタリアート解放の理論をうちたてたマルクスの事業もボルシェヴィズムに武装された組織をつくりだしたレーニンの事業もまた、若き彼らの青年時代に、あらゆる大家たちの日和見主義へのあくことのない批判と闘いのなかでその基盤がつくられたのである。

プロレタリア革命の勝利的武器としての階級的前衛は、労働者階級の日々生起せる闘いのなかで、うむことのない真に階級的な方針のもとに、その先頭に立つことによって、そして休むことをしない、意識的な日常的な思想的理論的組織的闘争によってのみ創成されるであろう。

そして階級闘争の劇的展開のなかで真に革命的方針で、労働者階級の多数を獲得しながら大衆的革命政党として成長するであろう。

一方では、既成の公認政党内部の日和見主義的潮流との歴史的な闘いの経過から、他方では、ブルジョアジーとの非妥協的な闘争の過程から、一九五八年暮結成された「共産主義者同盟」はかかる階級的前衛への結集のもっとも意識的推進体として存在する。

この同盟の当面の任務は「他のあらゆるプロレタリア党と変るものではない」

すなわち、「階級へのプロレタリア階級の形成、ブルジョア支配の打倒、プロレタリア階級による政治権力の獲得」である。

そして、同じ名の一九四八年の同盟が強調したごとく、次のことによって他のプロレタリア党と区別されるにすぎない。

すなわち一方では「プロレタリアの種々な国民的闘争において国籍とは無関係な、共通のプロレタリア階級の利害を強調し、それを貫徹することにおいて。

他方ではプロレタリア階級とのあいだの闘争が経過する種々の発展段階において、常に運動全体の利益を代表する」ことにおいてである。

われわれは「全プロレタリア階級の利益から離れた利益をもっていない。

プロレタリア運動をその型にはめようとする特別な原則をかかげるものではない」

同盟の目的は「階級対立にもとずく古いブルジョア社会の止揚、および階級と私的所有のない共産主義社会を建設するにある」（共産主義者同盟規約（案）第一条）そして「この目的を達成するためには、プロレタリアートによる全世界の革命的変革をおいてはないことを確認し、プロレタリアート解放の第一条件たるプロレタリアートの国際的団結とブルジョアジーに対する明確な敵対的意識の喚起を阻んでいる公認の共産主義指導部とみずからをはっきり区別し、それとの非妥協的な闘争を行い、**新しい革命的階級的政党の結成をめざして**」（同上規約第二条）いるものである。

したがって、われわれは宣言する。

われわれはプロレタリアートの階級的意識の覚醒を阻んでいるあらゆる既成の社会主義者に対する批判者として立ちあらわれるであろう。

それと同時に批判を自己目的として満足している小ブル的な革命的空文句のお喋りたちとも無縁である。（略）

思想と、理論と綱領との単なる論争によってのみ、創造しようとする、ブルジョア的なお喋りのグループたちが呟く組織の前に綱領を、行動の前に綱領、という言葉に反対してわれわれは、日々生起する階級闘争の課題にこたえつつ、**その実践の火の試練のなかでのみ**、プロレタリアート解放の綱領が生れてよう。われわれは闘争の保証を「戦略規定」ではなく、**諸階級の相互関係のうちに**求める、と答える。

すでに存在する労働者政党に対するわれわれの態度もまたマルクスによって示された道である。

われわれはセクト主義に反対する。

われわれは労働者階級の直接当面する目的や利益を達成するために闘う。

……どこにおいても、現在の社会的、政治的状態に反対すらあらゆる革命運動を支持する。

われわれは、どこにおいてもすべての国の民主主義的労働者、諸政党との結合と協調に努力する。だが「現在の運動のなかにあって同時に運動の未来を代表する」われわれは、かれらの空語と幻想、日和見主義に対して批判的態度をとる完全な権利を保有する。

われわれは、自己の見解や意図をかくすことを恥とし、常に公然とその見解を宣言するであろう。

あらゆる嘲笑と罵言、脅迫と懐柔がわれわれを包囲するだろう。

ブルジョアジーからも、そして小ブルジョア評論家からも、そして既成の労働者政党の指導部からも!!

だが一つの妖怪にしかすぎなかった一八四八年の同盟がさし示した道が巨大な国際的運動となって、ブルジョアジーを震撼せしめたごとく、一九五九年に点ぜられた一つの火花はやがて燎原を焼けつくす野火となるであろう。

共産主義の勝利は不可避である。

（一九五九年）

◆最近の機関紙から（二）

「解放」（77年6月1日）
革命的労働者協会

- 6・15政府打倒中央闘争へ／
- 二・一一復讐戦の更なる猛攻で反革命中枢全員を打倒せよ
- 急迫する上告棄却策法絶対阻止の臨時体制打ち固め
- 5・23狭山最高裁決戦圧倒的に爆発／
- 11月開港阻止／空港爆砕／の連続的決起を／
- 鉄塔破壊―戦友東山虐殺に大逆襲の怒り爆発
- 段階を映する反革命組織弾圧への助走の開始に総力対決せよ！

「世界革命」（6月27日）
日本革命的共産主義同盟（第四インターナショナル日本支部）

- アジアと三里塚を結び12月開港阻止へ戦線を強化せよ
- 三里塚闘争と闘うアジア人民との合流を
- 日韓連帯／アジア・アフリカ人民の交流反帝共同戦線を

第一次ブントの理論的基礎

姫岡玲治「民主主義的言辞による資本主義への忠勤」

＊

国家資本主義は、株式会社制度の極度の発展の結果、それを自己否定してあらわれた内部金融を資本形成の主要な槓杆として蓄積をおこなう特殊なる世界史的発展段階なのである。そのような意味で国家資本主義は、より高度に発展した生産力に即応して生まれたものであり、したがって、たんにそれを政策の結果としてではなく、経済的諸関係そのものの変化としてとらえるべきだというツィーシャンクの指摘は正しいといわねばならない。

この国家独占資本主義段階においては、少数の支配的株主の利害が、「会社それ自身」の利害としてあらわれるばかりでなく、「幻想的な共同性」としての国家が介入することによって、階級関係の隠蔽は、さらに新しい色彩が加えられることになる。しかし、個別的金融資本のそれぞれの有形無形の抵抗があるにしても、権力による私的所有を集中的に擁護するものに他ならないことは、例えば自己金融現象にもっとも明瞭にあらわれているといってよい。

しかし、この国家独占資本の「公的」性格に幻惑されて、あたかも「国有化」が、独占資本の権力に対する全面的な制限をもたらすかの如き、倒錯した観念が一連の「構造的改良論者」の中に生みだされつつあることは、周知の事実である。「大独占体にたいして打撃を集中し、これを非難のまっただなかにつきおとし、孤立させること、その権力を制限し、その破壊を目的とする対策を提案し、採用することが必要になっている。」（民主主義・社会主義」二七一ページ）と、トリアッティは、第八回大会の壇上から呼びかけた。「われわれは、工業および金融のもっとも大きな私的独占体の国有化をのぞんでいる。それは、「社会主義ではない」が、私的独占体を制限することによって「経済的民主主義」を具現するであろうからである。

たしかに彼等がよく援用するように、レーニンも、戦争の渦中にある帝国主義ロシアの「させまる大破局」を前にして、銀行、シンジケートの国有化、営業の秘密の廃止、その他の統制の方策を、革命的プロレタリアートの前に提起したのであった。しかし、レーニンは、国有化の綱領を、それ自体なんらかの超階級的な、民主主義的な内容を有するものとして無条件的な支持をそれに与えたりはしなかった。きたるべき経済的大破局に対するそのような諸措置はまさに革命的プロレタリアートをして、自己を支配階級にたかめることによってのみ実現されるであろうことを自覚せしめずにはおかなかったであろう。そのような具体的状況においてのみ、それはプロレタリアートの具体的任務たりえたのである。

「帝国主義戦争は社会主義革命の前夜である。そしてこれは、戦争がその惨禍によってプロレタリアの蜂起を生みだすからだけではなく――もし社会主義が経済的に成熟していないならば、どのような蜂起も社会主義を生みだしはしないであろう――国家独占資本主義が、社会主義のためのもっとも完全な物質的準備であり、社会主義の入口であり、それと社会主義と名づけられる一段のあいだにはどんな中間段階もないような歴史の階段の一段である。」（「させまった破局、それとどうたたかうか」全集第二十五巻三八六ページ）だが、このような物質的諸条件の成熟の故に、まさに革命的プロレタリアートの主体的な活動は、一層の緊急の課題として要求されたであろう。「一般に歴史では、とくに戦時には一ヵ所で足ぶみをしていることはできない。前進するか、それとも後退するか、どちらかにしなければならない。共和制と民主主義を革命的な方法でたたかいとった二十世紀のロシアでは社会主義にむかって何歩かすすめないでは、前進することはできない」ロシアが帝国主義戦争にまきこまれ、階級的利害の接触する渦巻の中に突入することによって、二月の革命が生みだした「中間的民主的政府」に断乎たる階級性の宣明を要求し、たとえ「革命の祖国防衛」というかくれ文句のかげにかくれてではあっても、戦争の継続を擁護したものは、必然的に「帝国主義的共和主義者」への転落を余儀なくされた時期なのである。同じように、レーニンのかがげた要求を社会主義にむかって大胆にすすむことによって実現せんとする試みを投げすてたものは「不可避的にケレンスキー、ミリユコフ、コルニーロフのところまで」つまり資本の代弁人にまで転落することになるであろう。

今日においても、国有化の要求は、大衆の革命的な沸騰状態の中で、権力獲得の過渡的な要求として具体的に提起されるのでなければ、資本主義の法則性にしたがって、国家資本主義による私的所有の補完を結果する改良主義へと転落するより他ないであろう。そのような危険にたいする保障をイタリア共産党は、どこに求めているのであろうか。彼らは、レーニンとは異って「憲法による民主的政治闘争」にそれを見出したのであった。しかし、社会主義への漸進的な道を切り開くという、この民主的政治闘争の結果は、国際主義的階級観点の放棄と人民戦線戦術の絶対化に導いた統一戦線戦術の日和見主義、超階級的民主主義の固定化によって、おそらくは徹底した客観主義としか批評しえないような次のような図式をもって、彼ら自身によって予め見通されることになったのである。「経済的要求と政治的要求のための労働者階級の闘争は周知のように傾向的法則である資本主義のあの法則の実現に、障害をなす傾向があり、またじっさい障害になる。この衝突からたえず新たな問題と新たな矛盾が生れ、資本主義の一般的諸法則の範囲内で、新たな発展、生産のあらたな組織形態、新たな労働規律、したがって又、ふたたび運動全体のあらたな目標が決定されてゆく。……資本主義はいっぽうで譲歩をよぎなくされるが、他の方法でとりかえそうとつとめ、このようにして闘争は新たな土台のうえに、再燃したし、またたえず再燃する。」（「フランス共産党の批判にたえる」「現代革命の展望」一八〇頁）

彼らは、レーニンの綱領から、その階級的内容をうばいさり、民主主義的言辞によって、資本主義への忠勤を証明しているのである。

（一九五九年）

解放派の思想

滝口弘人

「共産主義＝革命的マルクス主義の旗を奪還する為の闘争宣言」

資本制奴隷所有者の全体制に対する組織的反逆の意図を公然と表明し、資本に対する労働のあらゆる闘争に於て、労働者階級の歴史的任務―個々の不正ばかりでなく、不正そのものと対立し、矛盾の結果ばかりでなく、矛盾の前提そのものと闘い、すべての人間性を奪われているが故に人間性の完全な回復の為に、直立した巨人の偉軀をもって起ち上り、それと共に全被抑圧人民の政治的解放と、それに止まらず人間的解放にまで導く外には自己を解放し得ないところの労働者階級の歴史的任務、即ちこのプロレタリア共産主義革命の限りなく偉大な歴史的事業を前面に押し出し、この事業に自らの全行程をしっかり据えつけようと決意している、全国の革命的同志諸君に訴える。

我々は何の為に日本社会主義青年同盟の建設を進めて来たか？

それは、わが同盟が結成と共に宣言したように、「階級的な政治同盟」が日本プロレタリアートの今こそ生みだすべき緊要なものであったからである。

真実の階級的政治指導が、現在、特別に要請されている最大のものだとすれば、わが同盟の現状はどうか。

我々の見るところによれば、わが同盟は、様々な労働者的諸団体の個々の特殊性の単なる寄せ集め以上を出ることが出来ず、特殊性の母斑を消滅した全階級的共通性を前面に押し出す真実の階級的政治指導の確立に極めて遅れているばかりか、ますますそれから遠ざかりつつある様にさえ思われる。

一方に単なる行動左翼、他方に単なる手工業的活動、頂点に於ける指導の盲目性と底辺に於ける極度の分散性、これらは、総じて真実の階級的政治性＝真実の革命性からほど遠いことを示し、又、これは〝委員会屋〟のバッコする官僚主義の芽を育成することを示す。これこそ、我々が革命的同志に激しく注目されるよう訴える最初のものである。

何故、真実の階級的政治性が現在特別に必要なのか？

日本に於ける階級闘争は、世界史に繰り返し現われ、ほとんどその度にプロレタリアートの最も重大な敗北に終ったところの、一つの歴史的過程に突入しつつある。この歴史的過程の性格は、日本の労働者階級がそれを骨髄に徹して認識し得ないならば、又もや、歴史に学ぶことに失敗した一例を、ほとんど最後になるかも知れぬ一例を付け加えることになるほどのものである。

〝右翼〟はこのことを示している。

この右翼の血まみれの刃は、直接の恐怖によるアレルギー症状と、「一般的民主主義」のもとでの一つの時代錯誤との奇態な混合としてしか、つまり、あまりに狭くあまりに皮相な問題意識でしか理解されていない。右翼の刃が示す政治的方向に対しては、単なるテロ防衛隊は、ドイツ社会民主党の運命がこれを証明した様に、日々に虚しい応急処置でしかなく、又、単なる「テロ防止法」は、官僚主義的に統制する能わざる力で噴き上げる怒濤の如きプロレタリア大衆行動にとって、ブルジョワジーにより逆用される両刃の剣たる幻想的な処方箋となるほかはない。この右翼の胎動と左翼の現状の中には、日本プロレタリアートの客観的で且つ主体的な歴史的危機の根源が隠されているのである。

これは、客観的条件がプロレタリア革命の時代を告げ知らせつつあること、それにも拘らず、革命の主体的条件、即ちプロレタリアートの政治的成熟が立ち遅れていること―つまり、歴史が危機的兆候にあることを示すのである。

なぜか？

日本帝国主義の新たな国家独占資本主義的展開は次のことを示す。生産の社会的性格と総体としての生産諸関係の私的性格との矛盾の、この新しい表現形態は、一方に於て資本家階級の喪失しつつある政治的支配能力の維持や回復の為の新たな階級的努力を示し、他方に於て労働者運動のますます拡大する外見上の強力さにも拘らず、労働者階級が資本家階級に代って支配し得る政治的能力を身につける点に於て、立ち遅れていることを示す。そして資

本と労働の二大階級のこの反復して生起する緊張状態が、濃縮して相当長期に亙り断続するとすれば、つまり、労働者階級が高度の政治能力、即ち真実の階級的政治性を獲得するに立ち遅れ続けるとすれば、その時にこそ、ブルジョワジーの為の直接的暴力に打ち固められた帝国―ファシズムの支配の現出を許すであろう。

だからこそ、日本の諸階級の状態は、労働者階級の焦眉の課題がその全力を傾けて真実の階級的政治性を獲得することに置かれるべきことを要請しているのである。

かくして、カール・マルクスがパリ・コンミューンの総括―「フランスの内乱」（ヨーロッパ及び合衆国の全会員への国際労働者協会総務委員会の声明）一八七一年五月一三日、ロンドン―の中に刻み込んだ次の遺訓は、世界プロレタリア共産主義革命の挫折とファシズムの制圧を経験した今日では、その真実性がもう一度証明される事態を許してはならぬ歴史的予言となっている。

「クーデターをその出生証明書として、普通選挙をその認可とし、そして剣をその王シャクとした帝国は、……すべての人々にとっての国民的栄誉の幻想を復活することによって、すべての階級を結合すると称した。実際には、それはただブルジョワジーはすでに国民を統治する能力を失ったが、労働者階級はまだこの能力を獲得するにいたらなかった一時期において可能な唯一の政治形態だったにすぎぬ」と。

そして、この剣の帝国建設を阻止し、真実の共同社会の樹立をもってかえるべきプロレタリアートの政治的成熟については、すでにマルクス・エンゲルスが一八四八年革命の足音の中で、高らかに宣言した「共産党宣言」に、真実の共産主義者の原則が確言されている。すなわち、「階級闘争はすべて政治闘争である」「共産主義者をそのほかのプロレタリア党から区別するものはただ次の点だけである。即ち、一方で共産主義者はプロレタリアの様々な国民的闘争に於て、全プロレタリア共通の、国籍に左右されない利益を強調し、押し通す。他方、彼等は、プロレタリアートとブルジョワジーの間の闘いが経過する様々な発展段階に於て、常に運動全体の利益を代表する」

プロレタリアの闘争が、その個々の労働者的諸団体の経済的特殊利益を追求する闘いの寄せ集めであり、その直接の延長である「組合主義的政治行動」の寄せ集めであり、労働者党が、特殊利益の連合かそれ自身一つの特殊利益にすぎないならば、そこにプロレタリアートの主体的危機の本当の根拠があり、そこにプロレタリアートの真実の階級的政治性と真実の労働者党の未成熟や欠除を示す主な指標が与えられる。

日本プロレタリアートについて言えば、総評、全労、民同、民社党、社会党、共産党は、この指標の前に自らのあかしを求めなければならない。（略）

各国社民党が、いわば近代的官僚主義で包摂された特殊利益の連合であり、事態がこの特殊利益を越えるべく強制する時は、常にますます、「国民的利益」の名の下に資本制社会の「共同利益」の擁護という犯罪におちこみ、その党の影響下の労働運動が『個々の労働者的諸団体の経済的特殊利益の寄せ集めであり、その直接の延長である「組合主義的政治行動」の寄せ集めにすぎぬこと』各国共産党が、いわば前近代的官僚主義によって、下部からは絶対に変質され得ないように打ち固められた、それ自身モスクワの特殊利益の前衛であり、その指向する政治方針が「ただロシアの経験を神棚に祭って拝跪する」（レーニン）極めて執念深い宗派となり、その党の導く勢力が、プロレタリアート総白痴化への努力の上にのみ築かれていること、これが、共産主義＝革命的マルクス主義放棄の、主な政治状況である。それは一つの世界史的過程であったが故に、世界史的悲劇の本当の内容を構成したのであった。今もそうでありつづけている。

自分こそが歴史の唯一の主体＝主人公であるはずのプロレタリアート、長年に亙って諸々の特殊利益の単なる付属物たる地位に辱しめられたわがプロレタリアートは、今こそ、自分の足で大地に直立した巨人の偉軀の全容を現わし、一つの歴史的な闘争宣言を発しなければならない。

呪われた死病にあえぐエセ「共産主義」に最後の鉄槌を下し、全世界プロレタリアートの共通利益にのみ依拠して、ただひたすらにそれのみを追求し、他の一切の幻影に自らを従属せしめることをキッパリと拒否するところの、この偉大な真実の共産主義＝革命的マルクス主義の創造的復活のために闘え！と。

（一九六一年）

関西ブントの安保総括

京都府学連「政治過程論」

安保闘争は、「予想外の高揚」であったとよくいわれる。この言葉は、安保闘争の総括の困難さを、従ってその重要性を端的に表現している。「政治は経済の集中的反映である」ということをドグマテックに理解して、経済不況→労働者の生活状態の悪化→労働者階級の高揚という経済決定論では安保闘争について何事をも語りえなかった。即ち、経済的には「高度成長」と言われる好況局面にあったのだ。少しでも教条主義批判の態度をとるマルクス主義者ならば、日本のこのマルクス主義が「政治理論として確立していない」ために「政治過程の独自の運動法則を捉えることができず、政治情勢の急激な転開の可能性について予測を、従って政治闘争に於ける決定的な時点の把握」ができなかったことに、自らその破産を宣告せざるを得なかった。

「情勢分析における客観主義、方針における主観主義」「万年決戦論」からの活路は、哲学問答にあるのではなくて、ここに破産を宣言された政治理論を我々の手で確立することにある。それは何によって可能か？　政治理論とは、現存する階級闘争の総括とそこから政治過程の独自性を政治理論として解明する以外ではあり得ない。安保闘争をこの観点から総括しなおすこと、ここに政治理論の全てがある。安保闘争はそのようなものとして展開されたのだ。

①政治闘争の広さと深さについて

安保闘争は「革命情勢」と錯覚する者が現われた程の大闘争であった。けれども、一体どの程度に「大闘争」だったのか、又何を基準としてそう言い得るのか。

(A)　日本の権力構造とその性格

まず最初に、日本の権力構造〔議会—内閣—政府警察(自衛隊)〕について簡単にまとめておく必要がある。資本主義国に於る議会の本質及び、国家機構における地位と機能について、レーニンは「国家と革命」の中で次のように述べている。「支配階級のどの成員が議会で人民を抑圧し、ジュウリンするかを、数年にただ一度決めること、この点に議会制立憲国を始め最も民主的な共和国に於るブルジョア議会の質の本質がある」同時に又、ロシア十月革命前後のつまり資本主義の帝国主義段階への変遷という歴史的時期に於る議会に対して、「議会は既に雑談場に変ってしまった」といい、更に「この雑談場とそこでの決議でもって馬鹿正直な百姓をごまかしている」と述べている。このレーニンの議会に対する論断は、確かにひとつの基本原理であるが、ここから「ブルジョア議会はおしゃべりの場所」であるから「議会ナンセンス」と決めつけることによってことと足れりとするなら、具体的分析を怠った教条主義として批判の対象とならねばならない。〝教条主義ナンセンス〟と〝議会ナンセンス〟とを混同してはならない。

戦後日本においては、イタリー、ベルギーと同じく民主主義が憲法として定型化されており、議会民主主義制度が確立している。そのもとにおいては、ブルジョアジーの政治的、軍事的政策は、形式的にせよ、議会を通過する。従って警職法にしろ、安保にしろ、又政暴法にしてそうであったが、議会での討論、決定をめぐって闘争のヤマが作られ、又、反動化に対しても、具体的には議会に於て現われるが故に、その反対闘争は議会民主主義擁護の立場が支配的となりやすい条件がある。民主主義闘争が全ての民主主義擁護という小ブル的性格を強く持つのも、民主主義が憲法として定型化されているが故である。

議会に形式的な決定権は認められているが、その政治プラン（政策）は、独占ブルジョアジーとの協力で内閣によって決定される。従って、政治闘争は、当初から対政府闘争として展開される条件にある。

このような権力構造が全体として「一般に共通性という幻想的形態」をとって形成しているけれども「共通の、幻想的で共通の利害に、たえず現実的に対立している特殊な利害の間での実践的な闘争が、国家としての幻想的に対立している特殊な利害の間での

実践的な闘争が、国家としての幻想的『利害』による実践的な干渉と制御とを必要ならしめる」（マルクス「この実践的な干渉と制御」とは具体的にはレーニンの言う「武装した人間の特殊部隊」と「暴力装置」としての常備軍、警察、官僚であり、「常備軍と警察とは、国家権力の重要な武器である」（国家と革命）この「国家権力の武器」は、現代の日本に於ては、その転化がかわって暴力化しており政治闘争は、これらとあいまって、より一層不可避的に、〝暴力的形態〟の性格をおびざるを得ない。従って国家権力、右翼の暴力的弾圧が、政治闘争発展の一つの重要な契機となる。

(B)　現代に於る政治闘争の発展過程

日本の国家権力の構造とその性格に規定されて安保闘争は次のような段階を経て進展していった。

(1)反対意志の全国的組織化の段階。宣伝、教育を中心にした啓蒙活動から、次第に大規模な集会、街頭デモへ発展してゆく。

(2)議会の幻想性に対して「平和と民主主義」というより大きい幻想性そのものをかかげての全国的政治闘争の展開される段階。集会街頭デモを中心として闘争が発展する。その過程で警官の妨害も加わり、〝国家権力の暴力化〟に〝大衆の暴力〟が発生する。これを契機に議会の幻想性がバクロされ、闘争は次の段階へ発展する。十一・二七国会突入は議会の幻想性のバクロの糸口を与えたものとして位置ずけるべきである。しかもそれは議会の幻想性だけでなく既成左翼政党の幻想性も又、同時にバクロしたことは重要である。

(3)国家権力そのものの暴力と直接対決する段階。国家権力がますます暴力化するのにあいまって、大衆の街頭デモのより一層の暴力化の中でブルジョアジーは安保をなにがなんでも成立させねばならない必然性から、議会主義の枠内では即ち幻想性を保持したままではそれを通過させることに成功しえず、遂に自ら議会の幻想性をすて「単独裁決」という国家権力の本質である〝暴力〟に訴えざるを得ない（五・一九）。この民主主義破壊の暴挙は、ブチブルの民主主義意識を大きく刺激し、闘争は反動粉砕闘争の次元から、急速に内閣打倒闘争へと転化する。この段階に於て闘争の直接対決しているのは暴力そのものである。大衆の暴力化は更に発展し、ブチブルの街頭行動と部分的な労働者の実力行使によって、遂に内閣危機が出現する。

安保闘争はこの段階まで進展し、権力との衝突を含みながら、従って萌芽的な革命的高揚を生み出しながらも、その高揚を生み出すことなく敗北していった。

安保闘争は、ブチブル主体の国会デモという街頭行動によって内閣打倒が実現するということを証明すると共に、議会民主主義の復活としての「内閣打倒→国会解散→総選挙」という議会主義コースが支配的となり、それを実現するものでしかないということを、特に先に立って闘った我々学生運動の限界として教えた。

けれども安保闘争は、「前衛不在」のもとでの政治闘争としては最も深い闘争として展開されたものであり、現代における政治闘争の発展過程を典型的に示している。それだからこそ、その先頭に立って〝安保改定阻止〟ということを最后まで追求してきた全学連にとってその敗北は、同時に安保闘争を闘ったけれども直接権力と対決するという次元まで進まなかった労働者階級とは全く異った結果をもたらした。即ち〝革命の敗北〟のあとにきたる反動と同じような様相を呈した。「凋落、士気沮喪、分裂離散、好色文学が政治にとってかわった」「神秘主義が反革命的気分をかくす着物」をまとってあらわれた。しかし「大きな敗北こそ革命的諸政党と革命的階級に、ほんとうのきわめて有益な教訓、歴史弁証法の教訓、政治闘争をいかに行うかの理解と手腕と技術についての教訓を与えるものである」（レーニン、共産主義の左翼小児病）（略）

かくして我々のいう改良闘争と革命の関連はこうである。すべての条件（時に政治の問題が重要）の検討の中から今後の政治闘争のあらゆる具体的契機と、その契機を焦点として〝政治闘争の広さと深さ〟を見返す。その上にたって、個々の改良闘争での小戦術は、最も深い政治闘争、即ち、革命情勢における大戦術を準備するものとして位置づけられる。我々は改良闘争の成果そのものを目的とするのではなく、改良闘争を戦術によってより政治的に、つまり対権力の直接的対決へ向って発展させ、その過程で革命の条件を準備し全体として大戦術へと発展せんがためである。

（一九六一年）

全共闘運動の論理

山本義隆「全国全共闘結成宣言」

＊

一〇・八以降の実力闘争の質は東大―日大―教育大を先頭とする学園闘争に継承されその限界も克服されていく。ここにおいて最も特筆すべきは「党派軍団」と「ポツダム自治会」の矛盾を大衆運動としての〈全共闘運動〉という形で止揚し、同時に大衆運動の次元で「帝国主義」大学の批判を通じて自己の社会的存在様式を全面的に対象化し得る契機をつかみとっていったことである。改めて繰り返すまでもなく、これらの闘いは過去の学園闘争が終局的に学内収拾を許していったのに反し、資本のための労働力再生産を労働者内部に階層的分断をもたらしつつ行なう現大学の矛盾――大学の帝国主義的再編ゆえに生じた矛盾――は現体制の中で上からは決して抜本的に「解決」しようのないことをいかなる「改良」もより一層の抑圧の合理化された表現でしかないことを暴き出していった。

そして〈全共闘運動〉はそこで行なわれている教育研究を根底的に問い返しそれを担っている自己をも対象化して把握することにより欺瞞的政治戦果のマヌーバー的評価や「改良」への自己満足を許さぬまでに成長していった。従って闘争の進展が自己の社会的存在基盤を問題にするまで突き進み、自己肯定の上に立つ「学園防衛主義者」と階級的任務に忠誠を誓う部分にまで大衆的分解をとげていったのであるが、まさに、そこまで闘争を進展せしめ得たのは世論調査的多数が普遍的意志をせん称する全員加盟制の形式民主主義に無前提的にとらわれることのない〈闘争委―全共闘〉に闘争のヘゲモニーが体現されていたからに他ならない。（略）

このような闘いの深化は、「国大協路線」―政治権力の浸透に対し国家独占資本的市民社会のイデオロギーとして今では虚偽意識になっている「大学の自治・研究の自由」なるイデーに依拠し大学当局・教授会の相対的自立性と特権を守らんとし、結果としてその存在被拘束性に安んじ、自主規制して学生を抑圧しもって「大学共同体」の幻想とその中に貫徹する市民社会の秩序と資本の論理を守らんとした「国大協路線」を破産せしめていった。

繰り返し確認するならば、広範な学生大衆が日共・民青を含めた「学園防衛主義者」との分解をとげつつ左派のもとに結集し、これらの戦闘的大衆により支えられている〈全兵闘〉は学園内において運動の党派的分断を克服し大衆運動と討論を通じた党派闘争という正しい党派関係を復元し、同時に「自治会内左翼反対派」としての位置をはなれ左派の実体的ヘゲモニーを確立し、学生層の特殊階層的利害に拝跪することなく闘争を運動論的にもイデオロギー的にも領導していった。従って、このような戦闘的大衆の発生と運動への結集は政治指導と大衆の間に新たな緊張を強いているのであり、単に大衆を「一本ヅリオルグ」とそれによる「囲い込み」の対象と見ることや物理量的に政治闘争へ流れ込むことも闘争の清算以外のなにものでもない。

学園闘争を通じての戦闘的大衆の自己の社会的な場たる学園への定着は同時に社共から自立した革命的左翼運動への広範な大衆の参加となって六八、一〇・二一～六九、六・一五に到る街頭政治闘争――それがカンパニアであれ実力闘争であれ――の前進をもたらしている。新宿や銀座に見られる膨大な組織されざる大衆（群衆的大衆）は、勿論議会政治による独占資本の政治的イデオロギー的統合の強化や職場における資本秩序の貫徹に対する政治的アパシーの裏返しの表現であると同時に、学園闘争や王子闘争に見られる局所社会的闘争の極限化により生じたそれ自体としては政治闘争を担える程組織性も意識性も有してはいないが政治闘争の基盤を形成するところの反権力的大衆の存在と見なければならない。

個別学園闘争の徹底とそれによる個別社会権力たる当局の後退―日大九・三〇団交、東大大河内執行部の破産―は個々に権力の弾圧との対決の局面を迎えることになるが、その限りでは学

園闘争が政治闘争の質を獲得したとは言えない。それはあくまで市民社会の部分的流動と社会秩序の局所的麻痺に対する政治権力の浸透にすぎない。だが、個別的浸透として発動するものであれ権力と対決し得るか否かは学園闘争総体として権力問題をも射程距離に入れた階級形成を目的とし統一戦線の一翼たることを目指す目的意識的政治指導が貫徹し、同時に闘う大衆が主体的に政治指導をうけとめ階級的任務を自覚するか否かにかかっている。そして全国学園闘争の現局面はそれを必要としているのだ。

即ち、一月の権力の総力をあげた東大闘争圧殺に対し、全国学生戦線でもって対決し、帝国主義教育秩序の解体をも意識的に追求し、もって闘争が実質的に政治闘争の位相に関わり、全国闘争に戦線が拡大しかつ「中教審答申―大学立法」による安保闘争への予防弾圧をも込めた全国学園闘争の暴力的圧殺と大学の帝国主義的再編の加速的・合目的的推進を目指した政治権力の大学政策に対する全国大学生の闘いにより、闘争は主体的政治的イデオロギー的闘いをになうまでに成長することを要求しているのだ。

しかも、この中で学生戦線においては四・二八～六・一五の党派間共闘のつみかさねを踏まえて、必ずしも充分とは言わない迄も現時点での政治党派間の路線上の不一致を認識しつつ共同行動の推進をもって統一戦線の一翼を形成せんとする努力が蓄積されてきた。

以上の確認より、「大学の帝国主義的再編粉砕」の同質性を媒介とする学園闘争の全国的展開と、「中教審答申―大学立法粉砕」を結節点とする全国的結合は一〇・八以降の限界を克服しつつ、学生戦線が反帝国主義統一戦線の一翼を形成する可能性と方向性を表現している。従ってかかる現状の自然発生性を放置しあるいはそれに追随することなく、これまで学園闘争を担ってきた〈全共闘〉を反帝国主義統一戦線の一翼たらしめるべく結合し、そのことを通じて学園闘争そのものに階級闘争の一翼を担う戦略的任務を与え実践させていく目的意識的政治指導を貫徹させることである。現在の到達点はそれを全国的統一的な形で必要とするところまできているのだ。（略）

以上の認識を踏まえて〈全国全共闘連合〉の任務は以下のように提起される。

第一に〈全国全共闘連合〉は帝国主義国家における教育研究を根底的に批判しつつ各大学で「大学の帝国主義的再編」の個別的実現を無期限バリケードストライキでもって粉砕し、さらにはその再編を加速的、合目的的に推進する政策として同時に七〇年に向けての予防弾圧をも目指す「中教審答申―大学立法」を粉砕する全国学生戦線の指令部として存在する。（略）

第二、「立法粉砕」を軸に全国的な結合を強めてきた現実を踏まえ、七〇年安保闘争の全体像の認識の上に立って、全国学園闘争を〈全国全共闘連合〉による安保闘争の一環としてとらえ返し各大学のバリケードストは、個別課題の掘り起しにとどまらず「大学の帝国主義的再編粉砕」「中教審答申―大学立法粉砕」と並んでそれを戦略的任務に含むところの「安保、沖縄闘争勝利」をスローガンとして、闘い抜かねばならない。従って、現時点において例えば「学生自治に対する弾圧規制粉砕」と矯小化することも、あるいはサンジカリズム的自己完結的な学園闘争の急進化もまたそこに、結集した大衆を「反権力―反秩序」とまとめあげて固定化することも許されない。〈全国全共闘連合〉としての結合はかかる不充分性を意味する個別全共闘の不均質性の克服をもってする結合でなければならない。

安保闘争の中における学園闘争としてその組織化の過程を通じて全共闘内部また各学部闘争委員会内部で徹底した討論を行ない安保闘争を主体的に担い、学園闘争を政治ストとして貫徹し、反帝国主義統一戦線の一翼に自己を形成してゆくことを可能ならしめる目的意識性を大衆運動の次元で獲得していかねばならない。（略）

以上の二点を基本的任務とする〈全国全共闘連合〉の下に全国情宣体制の確立、各大学の連帯、地方別共闘態勢の確立と地方別拠点校の設定とそこへの集中、学科別共闘と若手研究者への闘争の波及、高校高専闘争との連帯強化等を通じて緻密な組織化を行ない、全国学園闘争の革命的発展をかちとらねばならない。その時、〈全国全共闘連合〉は、学生戦線において日共民青から完全にヘゲモニーを奪還し、安保闘争の革命的推進と革命的学生運動のルネサンスをかちとるであろう。

（一九六九年）

赤軍派の攻撃型階級闘争論

歴史的普遍性の基本テーゼ

（「赤軍」四号・六九年）

過渡期世界が、全面的な資本主義時代から世界プロ独を結節点とする世界社会主義→世界共産主義の時代への過渡であり、移行期である以上、この階級闘争の世界史的普遍性は、まず第一に、資本主義時代から如何なる質的形態転換を行ない、如何なる段階に到達したのか、この移行と確定された段階の性格は何か。第二に、この第一の世界史的普遍性は現実形態的過渡期世界の階級闘争において、如何なる性格形態で存在し、媒介的に発現するのか。第三に、以上一、二からして世界プロレタリアートは如何なる歴史的成長の在り方を行なうのか。この三つの連関において個々に規定する必要がある。（略）プロレタリア革命はただ唯一世界プロレタリア革命であり、社会主義・共産主義も又、世界社会主義、世界共産主義としてしか有り得ないことは、確認してきた。（略）

第一テーゼ

支配階級としてのブルジョアジーはその矛盾を解決することなく過渡期世界に突入し、その矛盾を一層深めるのに対して、被支配階級としてのプロレタリアートは、過渡期世界突入を契機に世界武装プロレタリアートに成熟・到達し、ブルジョアジーとの闘争を通し、現実形態的に自己の矛盾の止揚を過程し始めた。

第二テーゼ

帝国主義の運動に媒介され、ブルジョアジーは依然として支配階級であり、プロレタリアートは被支配階級であり、二大階級の基本関係は変らないが、にも拘らずブルジョアジーは、この闘争関係において受動的防衛的であり、プロレタリアートは能動的攻撃的であり、両者の制約関係が転倒過程に入ったこと。即ち「ブルジョアジーの制約→プロの被制約→プロの逆制約」の攻防関係において、この逆制約が、世界武装プロレタリアートへの成熟・到達を通じ、以前の消極的受動的なものから能動的攻撃的なものに転化したこと。勿論、この事柄は、第一の歴史的普遍性が現実形態的に如何に発現展開するのかの結論的内容であって、これは現実形態的に現代資本主義、現代帝国主義国家を媒介に歴史的具体的に述べられ把え直されねばならない。

第三テーゼ

かかる階級闘争は、より高次な能動的階級闘争として、世界武装プロレタリアートをして㋑個別国家、ブロックの個別性・歴史性を越え、世界革命を世界プロ独→世界社会主義・世界共産主義（＝階級と人類の解放）に向け、単一の、永続的な、論理的、時間的に同時なものとして成長、発展せしめる。㋺この革命の形態は世界革命戦争である。この世界革命戦争は、歴史的、実践的に世界プロ独、世界社会主義・世界共産主義を準備し、真の人類史の開始の過程である。㋩この革命の形態は、世界武装プロレタリアートにとって唯一〈世界党—世界赤軍—世界革命戦線〉としての団結と矛盾の展開様式を与えられて成長・発展するのである。

◆ 最近の機関紙から（三）

「前進」（6月20日）

革共同中核派

・カクマル金子文書暴露に悲鳴（1面）

・6・15六月決戦勝利へ怒濤の進軍（3面）

・激化する「障害者」抹殺攻撃と対決し解放闘争の革命的発展を（4面）

・金子文書にみるカクマルの腐敗と危機（5面）

・戦争へ急ピッチの自衛隊強化（6面）

「解放」（6月27日）

革共同革マル派

・沖縄の核基地の強化反対／ソ連の軍事行動弾劾／7・1大統一行動に決起せよ（1面）

・三里塚鉄塔破壊に加担した走狗中核派を一掃せよ（4・5面）

・77春闘の教訓を基礎に労働戦線の帝国主義的再編策動をうち砕け！（6・7面）

・ブクロ派のロッキード論の崩壊（8面）

連合赤軍の軍事論

統一された『赤軍』の下に結集し、徹底的に遊撃戦を闘い日本革命戦争の大飛躍を

＊

全国のプロレタリア兄弟諸君！　先進的学生、知識人諸君！

一九七一年七月一五日、共産主義者同盟赤軍派中央委員会、並びに日本共産党（革命左派）神奈川県常任委員会は、各々の中央軍、人民革命軍の組織合同を決定した。

この決定は、六〇年代日本階級闘争の革命的伝統を継承、飛躍させた画期的地平にかちとられた。この画期的地平とは、六〇年代後半の日本プロレタリア人民の偉大な国際主義的暴力闘争の昂揚と、それを担った大衆的軍団、行動隊を、「人民の軍隊がなければ、人民のすべてはない」プロレタリア人民の軍隊に発展させた「プロレタリア革命の魂」の復活ともいうべき地平であった。共産同赤軍派、日本共産党（革命左派）の「党の軍隊」として建設された中央軍、人民革命軍は、この画期的地平を切り拓き、歴史的な〝武装〟と〝遊撃戦〟を確立した。（略）

統一された革命軍は、プロレタリア世界革命の革命的伝統を打ち樹てたロシア赤軍、中国赤軍に習い、その名称を「赤軍」とすることに決定された。

「赤軍」は、世界各地で闘うプロレタリア兄弟の革命戦争とその利益を全く同じくし、プロレタリア世界革命戦争の一翼を担う。米帝国主義をはじめとし、日本帝国主義、西独帝国主義を支柱とする世界帝国主義ブルジョアジーの国際反革命戦争を絶滅し、全世界プロレタリア人民の真の解放—世界プロレタリア独裁、世界共産主義建設—をかちとること、これが「赤軍」の任務である。

プロレタリア兄弟諸君！

統一された赤軍は、日本帝国主義と闘う全ての人民、労働者、学生、農民、在日諸民族人民の闘争を支持し、その利益の為に闘うと同時に、アジア被抑圧人民に対する侵略、抑圧、反革命同盟を再編、強化しようとする日本帝国主義—米帝国主義を打倒する闘いを貫徹する。「赤軍」は、遊撃戦を徹底的に闘い、革命戦争の大飛躍をかちとる中で、日本—アジア人民を分断、対立させる策動、アジア—アメリカ人民を対立させようとする全ての野望を粉砕し、日本・米帝国主義の侵略・抑圧・反革命軍を解体する。

「赤軍」は、プロレタリア革命党の指導の下に、世界革命、暴力革命、プロレタリア独裁、永続革命等、マルクスが提起し、レーニンが創造的に発展させたプロレタリア革命の原則的観点、毛沢東が提起した持久戦戦略とその陣型及び遊撃戦争の戦略問題の教訓をもって武装されたプロレタリア軍隊であり、帝国主義ブルジョアジーを打倒すること—プロレタリア人民を革命戦争に組織すること—マルクス・レーニン主義を創造的に発展させること—を同時一体的に闘いとることによって成長する革命軍である。「赤軍」は、世界—日本革命戦争に献身的に参加しようとする全てのプロレタリア人民にその門戸を開放している。「赤軍」こそ、開始された日本革命戦争を代表するプロレタリアートの「武器」であり、「赤軍」の成長こそ、日本革命戦争を前進させる「力」である。武装し、闘うプロレタリア人民と一体化した「赤軍」は遊撃戦の全面的展開の中で全人民総蜂起の陣型をかちとる推進力である。

「赤軍」は、全人民総蜂起—日本革命戦争の勝利から、休むことなく米帝国主義打倒、ソ連社会帝国主義打倒—世界革命戦争勝利へ前進し、世界プロレタリア人民の軍隊＝世界赤軍の中核を担うだろう。

全国のプロレタリア兄弟諸君！

「赤軍」は、ここに最初のアピールを送る。「銃火」と名づけられた赤軍機関紙は、これ以降かわることなく、日本帝国主義権力との闘争の最先端から諸君の手元に送り続けられるだろう。

統一された「赤軍」の下に結集し、大胆に遊撃戦を闘い抜こう！

統一された「赤軍」の下に結集し、世界—日本革命戦争の勝利をかちとろう！

（一九七一年）

中核派の〈対カクマル戦争〉論

カクマルの容帝反共主義化と反革命的ファシスト的純化・完成（「前進」七六年新年号）

今日のカクマルは激烈な内戦過程をとおして完全に反革命的正体をさらけだし、容帝反共主義のイデオロギーを綱領的に完成させた現代のファシストとしての本質をこのうえなく鮮明にしてきているのである。激動期の到来、三〇年代的危機の時代の到来のなかで、日本階級闘争はすでに革命と民間反革命＝新しい型のファシズムとの激突という情勢を迎えているのである。

歴史的にはカクマルは二つの十一月の過程で決定的に破産し、それからの脱出を革命派への白色テロルに求めることによって決定的に反革命化した。すなわち十二・四をメルクマールとして、K＝K連合の片われを自認しつつ（黒田の「首根っ子・急所論」）、「権力とたたかうものへの暴力行使の権利」（カクマル「党派闘争論」の核心的主張）なる反革命的論理をふりまわしながら、白色テロルの道、反革命戦争にのめりこんでいったのである。これに対して、わが革命派は断固として反撃し、積極的に革命戦争の論理をもってたたかい、四年余の戦闘を勝利的に発展させてきたのであるが、この過程でカクマル反革命は決定的においつめられることによって、その反革命的正体すなわち、新しい型の現代のファシズムとしての正体を完全に露呈するにいたったのである。

今日のカクマルは、民間的運動として一定の独自性をもち、自己運動の形式をとり「革命的左翼」であるかのごときよそおいをこらすことに熱中しているのであるが、その基本路線はますます容帝反共主義として反革命的に純化し、体制的危機にあえぐ帝国主義的ブルジョアジーの階級的利害、帝国主義権力の動向、帝国主義的イデオロギーとのゆ着一体化、その最尖兵化の道を突進するにいたっているのである。帝国主義の利害、力、イデオロギーと密着連合しつつ、その最悪の尖兵として極反動的な言動をつよめながら、革命派への白色テロルにすべてをかけるものに純化してきているのだ。まさにファシストの全特質を有する民間反革命として完成したのである。

カクマルは最近、「爆弾と殺しの中核派」なるキャンペインに熱中し、「中核派を権力に告訴する」戦術を展開し、中核派の爆弾闘争計画なるものを権力にたれこむ路線（西条記者会見）や学校当局やPTA反動勢力に革命派をうりわたす路線（〇〇先生キャンペイン）に全力をあげている。こうした言動はカクマル自身の反革命的白色テロルを隠蔽し、合理化せんとする邪悪な動機をもっているものであるが、同時に重視すべきことは、カクマルがここで訴えよびおこそうとしているものはすべて帝国主義的勢力であり、反動分子であり、帝国主義的イデオロギーそのものであるということである。革命派へのアカ狩りの エネルギーをひきだすことに全力投球しているのだ。

ところでわれわれはこうした個々の言動の反革命性、ファシスト性の純化にとどまらず、その背後で、カクマルの基本的路線そのものの反革命的純化、ファシスト的完成が決定的な段階に到達していることに注目しなければならない。

ここでもっとも根本的な問題は、カクマルのエセ「反帝・反スタ」がいまやはっきりとファシスト的な容帝反共主義へと発展しきっているという事実である。カクマルはもともと「反帝・反スタ」を生きた世界革命の綱領として実践することに反撥し、スターリン主義への小ブル的な実体主義的反撥——それは多分に帝国主義的反共主義と交さする——に一切を還元する傾向をもっていた。議長黒田がみずからの行為、すなわち、スターリニスト情報を帝国主義権力に売りわたすというスパイ行為を自己批判せずますますひらきなおっていったこととそれは一体であった。カクマルの「反帝・反スタ」はもともと理論的にも、①帝国主義の基本的延命と、基本的に延命した帝国主義の基本矛盾の爆発、②世界革命の過渡期において一国社会主義をイデオロギー的本質として成立した国際共産主義運動の疎外態としてのスターリン主義、③スターリン主義の歴史的破産の必然性、④帝国主義的矛盾の爆発と

スターリン主義的国内建設の破産に対応するスターリン主義の一国社会主義的反プロレタリア的官僚制的裏切り的な内外政策の受動性＝対抗的積極性およびその暴力的展開、⑤スターリン主義の反革命性を逆手にとった帝国主義の反共主義イデオロギーの攻勢の展開——といった核心的内容を完全に見失ったものであった。そして、一方では反帝イズム批判の口実のもとに反帝・反スタから反帝国主義の契機を普遍的にも特殊的にもぬきさり、スタの逆規定による帝国主義の変貌と称して、実際にはバイカラ帝国主義化＝非帝国主義化を主張するものであり、他方では、スターリン主義についての歴史的＝理論的把握に失敗し【カクマルはスターリン主義についての学問的科学的規定を一度としておこなったことがなく、わが三回大会の批判がいまだに全然できないでいる】、「北からの侵略者」「地理的拡大」主義者、「東西両支配者」といった主張、つまりスタへの小ブル主義的実体主義的な反撥しかもちえなかったのである。

このようにカクマルの「反帝・反スタ」はもともと真の革命的な反帝・反スタとは無縁であり、多分に容帝反共主義的なものへと傾斜するものとしてあったのであるが、十二・四をメルクマールとして開始された革命と反革命の内戦の四年間をへて、とんにちではきわめて鮮明な容帝反共主義としてファシスト的変貌を完成させるにいたったのである。つまり、いまやカクマルの全主張、全路線がすべて、帝国主義とりわけ自国帝国主義擁護のイデオロギーと完全に共鳴しあい、反共主義的容帝イデオロギーとしての政治的階級的意義をはっきりと有するまでになってきているのである。

これを示す主な指標をあげるならば、

①日米帝の朝鮮侵略戦争前夜の情勢のなかで、一切の動きを「スタの侵略」に歪曲的にしぼりあげ、日米帝、とりわけ自国帝国主義の侵略戦争準備を防衛行動として擁護する路線を体系的にうちだしたこと（「反共防衛ライン論」）、

②「日帝のアジア侵略を内乱へ」に敵対し、それを反革命テロルをもって圧殺せんとする立場をとっていること、

③ハイカラ帝国主義論的に新植民地主義体制の存在を否定し、七・七自己批判の精神を「被抑圧民族迎合主義」と罵倒し、帝国主義的民族主義のイデオロギー的最尖兵として登場していること、

④日帝の対米従属論をあらためて強調し、（黒田の「M草案」の歴史的ひらきなおり）、日帝の帝国主義性を否定し、自国帝国主義への綱領的屈服を完成させ、容帝国主義化を完成させたこと、

⑤天皇訪米阻止闘争に敵対し天皇制への戦略的屈服を完成させ、天皇制が戦後民主主義的ブルジョア独裁にとって不可欠の政治的構築物であったこと、そしていまや体制的危機にたつ日帝の統治形態のボナパ的転換の唯一最大のテコになろうとしていることを否定し、「陛下のカクマル」になりはてたこと【容天皇化は容帝化のもっとも尖鋭的な表現のひとつ】

⑥差別主義のひらきなおり的強化の策動にはしり、もっとも腐臭にみちた帝国主義的超反動的なイデオロギー＝ナチス的イデオロギーの最尖兵となりはてていること、

⑦労働運動における反革命的裏切り者としての本質を深化させ、スト権実力奪還闘争の最悪の裏切り者・松崎を先頭に、革命的労働者への白色テロルと白色パージの道を突進していること、

⑧激動期における階級闘争の革命的内乱的武装的発展に全面的に敵対し、K＝K連合の片われとして、革命党の圧殺のため、白色テロルに全力をあげつつあること、「爆弾と殺しの中核派」キャンペイン、「告訴」「たれこみ」など、あらゆる反動的帝国主義的勢力と結託しつつ、みずからは一切を白色テロルにかけようとしていること、

——などの諸点が指摘できるのである。

かくて、われわれはカクマルがいまやはっきりと反革命的純化をとげ、現代のファシストとして純化し完成したことをきっぱりと確認しなければならないのである。と同時に、日本における階級闘争がファシスト分子との激烈な内戦の問題を完全に日程にのぼせていること、そうした階級闘争の発展段階にがっちりと対応したたかいの任務体系をうちたてなければならないことを確認しなければならないのである。

For Beautiful Human Life
KANEBO
森富雄
祖父曰く。男の決め手は香り。
トアレはたっぷり、香水はちょっぴり。
エロイカ オードトアレ Lボトル 230mℓ 2,000円
エロイカ オードトアレ 120mℓ 1,200円
男は、なんといっても余裕たっぷり生きたいもの。爽やかに、心豊かに、気品あふれる日々を過ごしたいものだ。男の人生をゆったり香らせるために、エロイカオードトアレ香りのLボトルが登場した。腕・胸・首・足……身体のすみずみまで、たっぷりと心ゆくまで使おう。男は、おおらかにかまえた方が得だ。
エロイカ パルファン 28mℓ 3,500円
この看板のあるカネボウチェーン店有名百貨店でお買いもとめください。
カネボウ化粧品
エロイカ オードトアレ L ボトル
美しきヒューマンライフをめざす
カネボウ化粧品

革マル派の〈党派闘争〉論

残骸と化した反革命スパイ集団を根絶せよ！（「解放」七五年新年号）

七〇年八月の海老原君虐殺、水山君虐殺について、今日に至るもなお完全に沈黙しているウジ虫。かれらは、七〇年安保＝沖縄闘争を革命妄想主義、武装蜂起主義にもとづいて極左冒険主義的に闘うことによってウジ虫組織そのものが瓦解したにもかかわらず、この組織の瓦解を排外主義的にのり切るために、殺戮行為をやった。にもかかわらず、これに対してはいっさいふれず、あたかもそれがなかったかのように歴史を偽造した上で、七二年一二月四日を党派闘争の出発点であるかのごとく強弁したブクロ派。七三年九月二一日以来12・4への復しゅうを叫び〝一人一殺〟〝ノーテンにバール〟を煽動し、己れの手を血で染めてきたにもかかわらず、わが党派闘争に敗北し「9・21精神」を捨てさり、「1・24精神」も棚上げにして鉄面皮にも右翼路線に転換したウジ虫。最後の砦＝法大陥落によって、すでに左翼党派としての命脈が尽きたにもかかわらず、わが同盟への怨念のみをかきたてて「カクマルせんめつが日本革命への最短コース」などと屁理屈をつけ、ついに権力のもとに走ったウジ虫。

マルクス主義の理論も前衛党たらんとする者の原則もとうの昔に捨てさり、権力によるわが同盟の破壊を狙った謀略的襲撃を追認することを唯一の任務としているにすぎないスパイ・ゴロツキ集団は、わが同盟によるそれを根絶するための闘いによって、いま絶命の淵にある。「総反攻勝利」の虚構の崩壊が、同時にウジ虫組織の最後となることを知っているウジ虫官僚は、すでにこのうちくだかれた虚構にツギをあてることにいま汲々となっている。

権力の走狗たるウジ虫の現状、そしてかれらの権力との結託の今日的構造。（略）

権力のわが革命的左翼へのウジ虫を偽装した襲撃をついたてとしながら、対カクマル戦争の幕を引き、ウジ虫組織を延命させるために「大衆運動と党建設の堅実な前進」を夢みていたポンタ。まさにそれゆえに、「総反攻」の虚構をうち砕いたわれわれの闘いに絶望のドン底におとされたポンタ。かれは、すでに打ち砕かれた「総反攻」の虚構を、大阪府警特殊部隊による12・1、12・8謀略にわらにもすがる思いでしがみつくことによって建て直し、幕引きにもっていこうとしたのである。まさにそのために本多は、「謀略論粉砕闘争」が破産してしまったなかで中核派下部活動家をいけにえにしてアリバイをつくらせるために大阪パターンの闘争を権力との合作でやったのである。

しかもウジ虫本多は、ウジ虫による権力の特殊謀略部隊との連携プレイが、同時に大阪府警の謀略を隠蔽するためにも役立つことを知りつつ、12・8の謀略の成果の一部を権力から横流ししてもらうことを条件として、このアリバイ襲撃にうってでたのである。

だが、まさにそうすることによってわがウジ虫ポンタは、権力の謀略を追認する権力のスポークスマンから、さらにすすんで、権力の謀略を隠蔽するためにウジ虫下部を権力に提供する最悪の反革命分子として、みずからを純化してしまったのである。総評系の労働組合幹部が、当局と権力がさしむけた右翼（山口組）によって謀殺された、まさにその地でスパイ北小路は、「いまはドスとアイクチの時代だ、カクマルジャックを解体するにはそれしかない」と演説した（12・4関西集会）。それは、権力およびそれに踊らされた右翼の意を体したものであり、北小路が権力のスパイたるの面目をあからさまにさらしたものであった。そして、今日の本多はこの北小路となんらかわるところがないのである。両者のそれぞれの利害の一致から、いまやウジ虫指導部はますます深く権力のふところにもぐりこんでいる。まさにそうすることによってウジ虫組織は権力にしめ殺される運命におかれているのだが。

労働運動・学生大衆運動を推進するための実体（組織）も理論もなく、加えて組織内部にかかえこんだスパイ、右翼ゴロツキどもに奔ろうされざるをえないウジ虫組織が生き永らえる道。

《国鉄周遊指定地》那須ロイヤルセンター
栃木県那須高原☎02877(8)2001(大代表)

爽やかです。
忙しすぎる毎日からエスケープするには、まさに格好。こころ洗われる豊かな自然と、澄みきった大気に抱かれてノンビリするのもたまには良いもの。人間性回復の近道です。大自然の中を思いきりとび歩きましょう。価値ある休日の発見。

海抜800m、総面積50万m²の大自然の中に落ち着いた姿を調和させている那須ロイヤルセンター。近代的な3つのホテル群と、レストランシアター・ファンタラマ館などの豪華なレジャーランドは、リゾートタウンとして文字通りのゼイタクさを誇っています。

第2別館●

ボンタが、大衆運動・党建設への願望をいかにつぶやこうとも、権力に首根っ子と急所をおさえられて自由に動けなくなっているウジ虫組織の行く末。それが、権力の意に沿って、わが革命的左翼に敵対すること以外になくなっていることは、今や明らかである。

権力や右翼にそそのかされ、「産別戦争」と称して革命的労働者を襲撃し、戦闘的労働組合を破壊する手助けをすること。種々の謀略襲撃に対するわが同盟の階級的反撃に恐怖する権力にそそのかされて、「カクマルJACせんめつ」と称し、その実、権力の襲撃を懇願しみずからはそれを追認すること。そして、労働運動・学生＝大衆運動の前進を促し、そのただなかで日本革命を担う前衛部隊を大量に創造するテコとして奮闘を続けているわが同盟中央諸機関の破壊のためにはいずりまわること。これらの反革命的・反階級的盲動が今やかれらの「唯一最大の生活の糧」となっているのだ。最近ウジ虫は「七五年総反攻」などというスローガンを掲げはじめたが、このことの中に現代版黒百人組に転落したウジ虫の反革命的本質が如実に示されているといわなければならない。

すでに残骸と化しているばかりでなく、その死に際をみずからの手で汚して恥じないこの反革命ウジ虫残党どもに対して、われわれは、さらに激烈な、その一掃のための闘いをもって応えるであろう。とくに、ウジ虫反革命指導部に対して、われわれは、最後の一トドメをさす闘いを、種々の形態を駆使して大胆におし進めるであろう。政治的面子を保持することに目がくらんで、清水・北小路・高木一派が田中清玄の子飼いのスパイ・右翼ゴロツキどもを組織の中に導き入れるのを容認したボンタ。ブクロ派をブント主義の観点から換骨奪胎するために、ふたたび田中清玄に膝を屈し権力の懐にとびこんだ清水・北小路・高木らのスパイども。わが反スターリン主義運動への私怨から火つけ・殺しを煽動し、海老原、水山、吉川、矢崎、四宮、富山、比嘉、小野君らを虐殺し、笠掛、山崎、そして松浦同志らを権力に撲殺してもらった反革命の指導部。そして「七五年総反攻」を絶叫する権力の手先ども。これら反革命分子どもに対して、われわれは宣告する。お前らの反革命的で反階級的な罪業のかずかずは、自らの命をみずからの手で絶つことをもってあがなう以外に道はない、と。

またわれわれは、これら反革命の指導部に操つられ踊らされ、かれらの命ずるがままに、わが革命的左翼への敵対を続けるウジ虫手配師や下部に対して、かれらが権力の手先どもから手を切ることを勧告し、それを促す闘いを断固として展開していくであろう。たとえそれが、残骸と化した組織の、ささやかな蠢動にすぎないとしても、われわれは、わが革命的マルクス主義の原則にのっとり、反革命ウジ虫に最後のトドメをさすまで、この党派闘争をならざる党派闘争を断固として推進するのである。

創
The Tsukuru
8 August
特集・忘れられた〝戦中派〟
★連続と非連続の生活史 中島誠★8・15—精神史の軌跡 小川和佑★帰還した盲目の元日本兵★「幻」の名門校・ハルピン学院、東亜同文書院の人と歴史ほか
松永伍一 戦争を語る——聞き手 萩尾みどり
現代売春考—故郷への夢は破れて… 高瀬夏生
「サントリー王国」の秘密（第二弾）
綜合評論社
〒104 中央区銀座1-14-13 東誠ビル
TEL (03) 562-0871 振替133422番

〔3〕新左翼を代表する36人

◆太田　竜

日共は新左翼各派を「トロツキスト」と呼ぶが、この呼称が正しければ太田竜は日本で最初の新左翼の一人ということになる。昭和五年生まれで、戦後直後に日共に入党。トロツキーとスターリンの論争を研究するうちにトロツキズムの影響をうけ、黒田寛一を誘ってトロツキスト連盟を結成。

しかし黒田らとは五八年七月に分裂、関東トロツキスト連盟を組織し、その後日本トロツキスト同志会、第四インターナショナル日本委員会（四トロ）になる。

四トロは社会党への加入戦術をとった。その後革共同から脱退した関西（西）派と合体するが、折りからの安保闘争では共産同に押しまくられ、主導権を奪うことはできなかった。

純粋トロツキストだった太田竜は、六〇年安保後四トロを離脱、一時はプロレタリア軍団（武装蜂起準備委員会）に依り、「エンタープライズ（米空母）をポチョムキンへ」などのビラを書いていた。

この当時竹中労、平岡正明を知り、窮民革命論へと〝転向〟し、「三バカトリオ」などと呼ばれたが、やがて二人とも分かれ、主としてアイヌ解放闘争にのめりこんでいく。東アジア反日武装戦線の主張が太田の方針と似ているところから、その道の〝教祖〟などとマスコミは呼んでいる。

◆黒田寛一

クロカンこと黒田寛一は、政治組織の指導者としては異例のことだが、大衆の前に姿を現わすことはない。学習会や集会でも、彼の演説はテープによって行なわれる。しかし理論家であると共に革共同の創設者の一人であり、革マル派の指導者であることに変りはない。

大衆に姿を見せない理由は、旧制東京高校在学中に皮膚結核におかされてほぼ失明、一説によると頭髪も失われているためだという。

彼は府中の医者の息子。昭和二年生まれというから今年五十歳。五二年に『ヘーゲルとマルクス』を出版後、たて続けに著作を世に問い、雑誌「探究」を刊行。これと平行して太田竜らとトロツキストの組織づくりを行ない五七年一月に日本トロツキスト連盟、十二月に日本革命的共産主義者同盟。この革共同は太田派との第一次分裂、西京司派との第二次分裂を経て全国委を結成。この当時、黒田と共にこの組織をつくり、実質的に動かしていたのが本多延嘉だった。

「革命党の主体性」などを強調する黒田のイデオロギーは、革マル派を独特の粘着力のある組織にしたが、一方で中核派、革労協の二正面作戦をとり、東大闘争で逃亡し成田闘争では追放されるなど新左翼の中では独自の路線をとり孤立している。黒田は現在地下潜行中。一時、ハワイ逃亡説なども流れたが不明である。

◆西　京司

革共同を結成したのは、現在革マル派の黒田寛一、アイヌ解放闘争を進める太田竜、そして西京司（大屋史郎）である。

この三人は、日本で初めて、自らをトロツキストと称して結成された「トロツキスト連盟」（その後革共同に改称）時代からの同志だった。もっとも西は太田、黒田らとは一歩遅れてトロツキスト運動に加わっている。しかし当時日共京都府委員という重要なポストを占めていた西の加入は、まったく孤立していた連盟にとって、願ってもない事態であり、それだけに影響も強かった。

しかしこの潮流は、連盟→革共同の過程で純粋トロツキズムから脱皮していった全国委員会（後の中核、革マル派）と違って六〇年には第四インターナショナル・革共同と名を変え、あくまでトロツキズムを守り、小規模ながら地味な活動を継続。今なお中堅のセクトとして労働者、学生に一定の影響力を行使している。

◆本多延嘉

革共同全国委員会（中核派）書記長本多延嘉は、七五年三月十四日未明に、埼玉県のアジトで革マル派に襲われ、全身をズタズタにされて死亡した。革マル派の黒田寛一に匹敵する最高指導者だった本多を失った中核派は、革マル派の予測通りには戦意を喪失せず、ますます党派闘争の激化に拍車をかけた。

革共同二派は、六二年の分裂以降、その違いを見せながら互いに組織力を増大させてきたが、七〇年八月、教育大生海老原俊夫（革マル派）の死で本格的な〝肉ゲバ〟が開始される。

本多は昭和九年東京生まれ。埼玉県の川越高校在学中に日共に入党。五四年に早大に入学し早大新聞の編集にたずさわる。五七年の革共同創設に参加し、六二年の分裂では中核派のリーダーとして自ら育ててきた組織と機関紙「前進」を守る。

本多は、六〇年代後半を「戦後世界体制の根本的動揺」の時期としてとらえ、全学連中核派、反戦青年委を中心に〝激動の七カ月〟を現出させた。この路線に対する批判は様々あるのだが、本多は六九年四・二八沖縄デーの前に破防法で逮捕されている。保釈後一時劣勢だった中核派を立て直し、攻勢からせん滅に移ろうとする矢先に殺されてしまった。

本多は人間的魅力もあって同盟内では支持が強かったという。

◆島　成郎

東大医学部卒。

五〇年代末期に日共の路線と六〇年安保闘争へ向けた方針をめぐって、全学連指導部・学生党員と党中央が対立した時、唯一の「前衛党」を否定し、別党＝新党コースを歩むことになるとは、誰が予想し得ただろうか。

その意味では、共産主義者同盟＝第一次ブント結成は、新左翼二十年の歴史のなかでも最も重みのある事件であった。それゆえに、新党結成に参加した人々も伝説的に語りつがれずにはいられない。山口一理しかり、姫岡玲治しかり、生田浩二しかり、そして、島成郎。

彼は、日共東京都委員を経て、ブント結成に積極的に動き、書記長という重要なポストについた。それは、参加しただれもが、なんとはなく彼を書記長に推したのだという。

その後、彼は精神科医となり、ときおり、第二次ブントの集会などに顔をみせていた。六〇年代後半の東大闘争においては、青医連、全共闘などに精神的な支援活動を行なった。

◆生田浩二

生田が留学中のアメリカで客死した後、ブント時代の友人を中心にした立派な追悼記念文集が刊行されている。親類縁者と共に、森田実、村尾行一、陶山健一、常木守、葉山岳夫、島成郎、小長井良浩ら、〝あの時代〟を共に生きた人たちが追悼文を寄せている。その中で富岡倍雄は「それ（あの時代）をぬきにした生田の生涯は考えられない」と書き、〝あの時代〟に成し遂げたことは、「生田を代表とする当時の学生たちが、最初は真摯な共産党員として出発しながら、みずからの運動の過程で次第に自力で共産党神話をばらいのけていき、ついには声のかぎりに全世界を断罪するにいたる、という苦闘の過程をみることができるのである」と言っている。

生田浩二は、共産同の元政治局員、書記局員（書記長は島成郎）。五九年八月の第三回大会で選出され、以後解体まで財政、組織の責任者として活動。その後はほとんど活動に加わらず六四年八月に渡米、ペンシルバニア大学に留学していたが、六六年三月、アパートの火災で窒息死。

彼は富岡の言うように、静岡第一高校時代に日共に入党、東大に入り細胞キャップ、中央委議長などを歴任。共産同の結成には欠席しているが、機関誌「共産主義」創刊号巻頭言を執筆、事実上のリーダーの一人で活躍していた。

◆唐牛健太郎

唐牛は一九五九年六月の全学連第十

四回大会で委員長に選出され、そのまま六〇年安保闘争を指導した。半年前の五八年十二月の第十三回大会で執行部多数派を革共同に握られた共産同は、この年の三月に加入戦術をとっていた革共同を除名、初めて全学連の主流派となり、その初めての委員長になったわけである。

五九年十一月二十七日の国会突入から一気に反安保闘争は盛り上がるが、唐牛は六〇年四月二十六日、国会前の闘争で逮捕され、当時としては異例の長期拘留をうけ、保釈されたのは十一月になってからである。

唐牛は、理論家というより、まっ先に装甲車を乗りとえる行動派であったが、それだけに安保闘争後に、右翼の田中清玄からひそかに資金援助をうけていることが暴露されると、意外な思いにとらわれた者も多かった。この件について、彼はその後もほとんど発言していない。

◆ 山口一理

日本の新左翼には、大きく分けてトロツキスト連盟＝革共同系と、日共左派＝共産同系があるが、山口一理は共産同結成の轟砲ともなった「十月革命とわれわれの道」を書いた理論家。

五六年のスターリン批判、ポーランド、ハンガリー暴動によって党主流への疑問を蓄積していた日共党員の左派グループ、特に学生党員にとって、五八年一月に東大細胞機関誌「マルクス・レーニン主義」に掲載されたこの論文は、衝撃であり明確な路線を指し示すものだった。

山口はこの中でスターリン批判とロシア十月革命の再評価を骨子として、ポルシェヴィキの革命戦略を明らかにしている。

当時日共左派グループは、この後に革共同となる第四インターグループと論争していたが、このことも山口論文を生む背景になっているようだ。そして、五八年五月には社学同が、十二月には共産主義者同盟が結成され、一方の潮流が大衆運動の分野に登場する。

◆ 北小路敏

一九三六年、京都府生まれ、京大経済学部卒。

現在、革共同中核派の政治局員で、故本多延嘉書記長とともに、最高指導部の一人であり、著作・論文は少ないが、温厚な人柄が受け、アジテーターとしては新左翼活動家のなかでも屈指である。

高校三年の時、日共に入党したが、六〇年安保を控え、ブントが結成されるや、五九年に加盟し、以後京都府学連委員長を経て、六・一五国会突入闘争当時は、全学連委員長代理として、現場指揮を行ない、その直後に委員長となる。安保敗北後のブント党内闘争においては、プロ通派に属し、六一年に革共同全国委に合流した。六二年の革共同第三次分裂では、中核派に所属、彼や清水丈夫にみられるように、中核派にはブント系の流れからきた活動家が多く、このあたりが革マル派と違って、中核派がラディカルな一因であるといわれている。

六五年には「杉並革新連盟」を結成し、都議選に出馬した。

◆ 樺美智子

「美にして智性鋭くあれ」という両親の願いをこめて名づけられた樺美智子は、新左翼がその姿を歴史に登場させて、初めて充分に闘った六〇年安保闘争の唯一の死者である。

六〇年六月十五日。日米安保条約の自然承認を二日後に控えたこの日、全学連主流派（共産主義者同盟・ブント系）のデモ隊の中に樺はいた。国会構内での抗議集会を！　と、デモ隊はバリケード用に使っていたトラックを引き出し、七時過ぎに東大生を中心に構内に突入。

この時の衝突で樺美智子は殺される。検察側は例によって「警官が殺したのではない」とデモ隊の人なだれによる窒息死を主張。弁護側の一部には扼殺死を主張する者もいたが死因は不明。

樺美智子の死は、全学連や反戦労働者に強い衝撃を与えた。しかし、その衝撃は闘争の再昂揚に向けての轟砲とはならなかった。

樺美智子は昭和十二年東京生まれ。兵庫県立神戸高校卒業後一浪し、東大へ。当時文学部国史科に学び、文学部学友会副委員長だった。享年二十二歳。

二十歳の頃日共に入党したが、ブント成立と同時に加入し、常に闘争の前線にいた。

◆ 滝口弘人

本名、佐々木慶明。一九三四年生まれ、東京外大から東大に進み、中退。

社青同解放派は、他の新左翼諸党派に比べて、その思想的特徴が強い。すなわち、他の党派が共産主義運動の正統性をマルクス→レーニンにみるのに対して、マルクス→ローザにその流れを位置づけ、レーニン主義をスターリン主義発生の一つの主要な原因として捉える。

このような、解放派の思想に大きく貢献したのが滝口である。彼は、六〇年に社青同東大学生班協議会を結成し六一年、機関誌「解放」創刊号には、巻頭論文で、同派の基本政治綱領である「共産主義＝革命的マルクス主義の旗を奪還するための闘争宣言」を発表し、労農派マルクス主義の復権を行ない、大きな注目を集めた。

以後、解放派はこの基本綱領のもとに「反合、反帝、反ファッショ」をスローガンに、日韓闘争では大きな潮流を形成していった。滝口はつねに、解放派→革労協の最高イデオローグとして活躍している。

◆ 江田五月

〝江田全学連〟という言葉が通用した時代があった。一九六二年秋、大学管理制度反対闘争の昂揚のなかで、東大でヘゲモニーを握っていた社青同構改派でそのリーダーが江田五月だった。

当時の構改派は日の出の勢い。六〇年安保闘争後、後退戦を強いられていた学生戦線で、まるで〝狂い咲き〟のようにこの闘争を盛り上げ、ついに江田を委員長にした全学連を夢みた者がいたというわけである。

周知のように、江田はこの闘争の責任者として退学処分をうける。外遊後に復学するが、活動から一切身を引き法学部を首席で卒業し司法界へ。司法研修所も首席で卒業し判事に。そして今般、父親三郎の死を機会に社会市民連合の代表に就任、参院選出馬。

社会（党）でも市民でもない代表を頭に置く組織も奇妙だが、秀才コースの判事がそのミコシに乗るのも政治の妙というべきか。客観的には新左翼というより新右翼といった方が適切。

◆ 松本礼二

本名は高橋良彦。第二次ブントの議長をつとめたことがある。あるいは、いわゆる三派系、八派系学生諸団体の世話役的役割をひき受けたこともある。学生組織である社学同統一派のなかにあって、めずらしくも全電通労組出身であった。理論家というよりは、さわやかな弁説、めりはりのきいた話しぶりなどによって、聴衆の心をつかむことを心得ていた人物である。したがって、彼には理論的著作はないが、ややもすると分裂ぎみの再建ブントにあって、佐野茂樹とともに、よき取りまとめ役であった。

第二次ブントの完全分解という状態にたちいたるや、雑誌「遠方より」に依って、健筆をほこっている。しかし、この雑誌においても、彼の書く物は、論文というよりエッセイの類いに鋭い才覚をみせている。かつての新左翼指導層を「新左翼芸能界」と揶揄する彼は、右翼的情念やそのエネルギーの根源までもさぐりあてようとする姿勢をみせている。いずれにせよ、彼は、機会あれば再び浮上してくる素質をもった人物であるのは、間違いないようである。

◆ 水沢史郎

本名、服部信司、東大卒。

六〇年安保闘争時には、ブントに属していたが、ブント解体に際しては、革通派に移行し、さらに、東京社学同のめまぐるしい再編過程を経過するなかで、マルクス主義戦線派＝黎明派の結成に動き、そのリーダーとなった。その後、六六年、関西ブントと統一し、第二次ブント結成に際しては、主導権をとり、マル戦派が擁立した岩田帝国主義論（危機論型帝国主義論、日帝ブンゾマリ論）が再建ブントの基礎理論となった。「生活と権利の実力防衛を」が基本路線であった。

のちに、三派全学連の結成を経て、街頭実力闘争時代に入ると、「組織された暴力、プロレタリア国際主義」を主張する関西系との対立が深まり、六八年同盟大会で関西系が主導権を取るやマル戦派は脱退した。水沢は旧マル戦グループを糾合し、労働者革命派結成へと動いたが、その後前衛派を創設し、リーダーとなった。

彼は岩田弘の強い影響力を受け、岩田理論の継承者をもって任じている。

◆ 大口昭彦

第一次早大全共闘議長で社青同解放派の幹部。第一次（六六年一～六月）早大闘争は、第二学館の自主管理と学費値上げ反対闘争のための組織。

この頃はまだ文学部などの革マル派と、第一政経学部などの社青同解放派

とが共闘できた時代。この二派を中心に、学生自治会、文連、生協などが結集して全共闘を結成した。

この闘いは「産業界の要請に見合った人材の育成」を狙う大学側に対し、自治会だけでなく、文連というサークル連合やクラス連合まで巻き込んでの闘いだった。

全共闘は全学をバリケードで封鎖する戦術をとった。このバリケードは一度体育会系の学生に破られるが、再度構築された。しかし、期末試験の時期にさしかかると「授業再開」を支持する学生が増え、バリケードは自主的に撤去された。

大口はこの闘争の一貫した指導者だったが、いつも学生服を着用していた。

◆斎藤克彦

六〇年代初めの独立社学同の幹部で、三派全学連初代委員長。現在は共産同游撃派の幹部。

彼は六六年～六七年にかけての明大学費値上げ阻止闘争で、ボス交をしたとして責任を追及され、辞任している。この闘争は全学バリストにまで高まったが、体育会系学生の介入などで授業再開に持ちこまれ、斎藤の指導する全学闘がホテルで学長とボス交して終結を宣言。しかし二部学生を中心にこのボス交に反対する運動が高まり、斎藤らは追放される。

通常ならばここで斎藤の政治生命は終るのだが、彼はその後、国労の書記を勤めながら時期を待ち、やがて情況派に復帰、ここで分裂して游撃派を結成して、現在に至っている。

斎藤は根っからの社学同タイプの活動家だが、とりわけ明大闘争の際の態度に見られるように、その行動はかなり政治的。その体質と経歴によって彼を信頼しない者も少なくない。

◆奥浩平

奥浩平の遺著『青春の墓標』は、文庫となり、今なお若い学生に読まれているが、それは反権力闘争に加わる若者のロマンチシズムが濃厚にあり、それがまた一定の水準を保っているからであろう。

『青春の墓標』は、革共同中核派に所属していた奥浩平が、革マル派の中原素子（仮名）に寄せた愛の手紙と遺書で構成されている。昭和十八年東京生まれの奥は、六〇年安保闘争を都立青山高校生として闘い、六三年四月に横浜市立大学に入学、中核派に加盟。この頃は、六〇年安保後の学生運動にとっては停滞期だったが、原子力潜水艦寄港阻止闘争、日韓条約反対闘争などに加わっている。

革共同は六二年二月に、中核派と革マル派に分裂している。争点は組織論だが、中核派は政治局で多数派、全学連内部では少数派となり、奥浩平は二派の分裂が定着化し、やがて現在もなお続く〝内ゲバ〟の時代に突入する頃に中核派に加盟し、中原を愛するようになる。

奥浩平は、中原素子との愛を実らせることができず、闘争のまっただ中にいながら自殺している。世界を「断罪」した六〇年安保世代とも、実力で「粉砕」しようとした六〇年代後半の世代とも異なる、いわば時代の端境期に彼の死はあるようだ。

◆山崎博昭

樺美智子のケースと異なり、山崎博昭の死はさまざまな意味で唐突なショックを与えたものだった。運動としても組織としても必然性はあるのだが、佐藤首相のベトナム訪問阻止闘争がそれほどまで盛り上がることを予測できた者は少なかった。ましてや「全学連が解体するか、訪ベトを阻止するか」（秋山勝行全学連委員長）という意気込みで隊列を組んでいる者が、数千人の単位で存在することは知られていなかったからである。

山崎博昭は当時京大文学部在学。大阪府立大手前高校時代から革共同中核派の反戦高協のメンバーで、京大に入り砂川闘争などに参加していた。

この後、「羽田10・8」として記念碑的に語られた六七年十月八日の佐藤首相ベトナム訪問阻止闘争―これは数年後の米軍敗退を準備しながらも泥沼の様相を呈していた南ベトナムへ、日本の首相が訪問することを実力で阻止しようとしたもの。この年春の砂川闘争において予兆があったが、この日各派はヘルメット、角材の部隊を中心に押したてていた。

中核派は羽田空港の手前にある弁天橋で機動隊に阻止され、この橋の上の衝突の際、山崎は装甲車に轢殺された。警察は「犯人は学生」説をとり、一人を逮捕したが起訴できなかった。山崎の死は、六〇年代後半の新左翼、反権力闘争の引き金になったことは事実である。

◆秋山勝行

六〇年代後半の学生運動を領導したのは三派全学連だが、本来これはネオ（新）三派全学連と呼ばれるべき組織である。元々の三派は、社学同、社青同解放派と構改派。江田五月がリーダーシップをとっていた時期と重なる。

その後構改派が脱落し、革マル派と袂を分った中核派が加入、新三派を結成、後に単に三派全学連と呼ばれるようになる。

新参者だったこともあって、（新）三派全学連は当時の第一党派の社学同のイニシアチブの下で再建され、秋山は書記長に就任。ところが、当時の委員長斎藤克彦（明大）が六七年の学費闘争で学校側とボス交したとして失脚、秋山が委員長となる。

その後は、羽田から王子、佐世保、三里塚など、激動の七カ月（〝渡り鳥シリーズ〟）を指導、その名を天下にとどろかせることになる。やはりあの時代を象徴する活動家だったことに違いはない。

◆藤本敏夫

同志社大卒。社学同統一派の関西系のリーダーであり、かつ、反帝全学連の委員長をつとめたことがある。いわゆる関西ブントの指導者であった。しかし、六〇年代後半から七〇年度初頭にかけての彼の闘争経歴は、むしろ、東京においてであった。彼は理論型の指導者というより、むしろ、実践型の指導者、同一党派内では、調停者的指導者に近かったといってよいだろう。それは、関西ブントが持っている性格にもよるものであった。

彼の名をジャーナリスティックなものにしたのは、歌手加藤登紀子との出合い、および結婚であったろう。闘争のなかに咲いた恋として、女性週刊誌などに、はでやかにとりあげられたものであった。現在もなお、様々な商売に手を出して、時折、ジャーナリズムに話題をふりまいている。

◆味岡修

筆名、三上治。一九四一年三重県生まれ、中央大中退。

六〇年安保闘争敗北後の六二年に再建社学同を結成し、委員長となる。また同年、中大独立社学同を結成。関西ブント、マル戦派との統一による第二次ブント再建においては、学対部で指導力を発揮した。またこの間の中大闘争を指導した。六八年、共産同三多摩反戦青年委員会を結成し、機関紙「叛旗」を創刊、神津陽とともに理論活動を展開した。七〇年をめぐってのブント内の党内―党派闘争を経て、七〇年叛旗派を結成したが、七五年に同派を脱退し、七六年「乾坤」を創刊し、現在にいたっている。吉本隆明から多大な思想的影響を受けた一人である。

◆山本義隆

東大全共闘議長、及び名前だけではあったが全国全共闘連合議長。

一九六八年一月の登録医制度反対闘争をきっかけにした東大闘争は、またたく間に全学に波及し、六九年一月十八、十九日の安田講堂攻防戦でほぼ決着がつくまで、東大正門の柱には「造反有理」「帝大解体」の看板が立ち、全学はバリケードで封鎖されていた。

全共闘という組織は、自治会、助手共闘、サークル連合など雑多な組織の連合体で、多数決で方針を決めたり、方針の違いで少数派を排除することをしなかった。こうした組織であったために、「連帯を求めて孤立を恐れず」などのスローガンが生まれ出たのであろう。

山本はこの東大全共闘の象徴的な立場にいたが、全国全共闘連合結成の頃は、やはり、当時の八派（セクト）に押しまくられた感じがあった。六〇年安保時代の指導者にあった素朴さがなく、代わりに智性を感ずるのも山本の特徴。

◆秋田明大

秋田明大が社市連から参院選に立候補するというニュースを聞き、結局とりやめたのであるが、どう解釈していいのか迷った人は多いだろう。

なんといっても、六〇年代に確たる足跡を残す、栄光の日大全共闘の議長だった人だからである。この日大全共闘は、智性や論理はともかく、センスと行動力だけは抜群の組織だった。

本格自伝小説＝おんな哲学
すたこらさっさ
続すたこらさっさ
田辺茂一著　B6上製 各820円
流動

そして、バリスト中の東大を訪れた彼らは、東大生の築いたバリケードを見て、「これがバリかよ」と言ったという〝過激派〟である。

秋田は、〝ボン（本）大〟と学生運動の仲間からも馬鹿にされてきた日大で、全学をひっくり返すほどの闘争を組織した人間である。もっとも、彼は理論家というより行動家のタイプ。日大ではこうしたリーダーの方が貴重だったのだろう。

闘争の最中には、日大全共闘に足場を持っていた中核派と社学同ML派が秋田の〝網引き〟をやる図がみられる。今度は社市連から引っぱられたのだろうか。

◆塩見孝也

ずいぶんと昔（赤軍結成時）のことだが、赤軍派内では塩見を〝日本のレーニン〟などと評していた。田宮高磨らも「日本階級闘争が生み出した最大の指導者」と絶讃している。

確かに、共産同の党派闘争を経て生まれた赤軍派を牽引してきた理論的、政治的指導者は塩見だが、結成から八年、赤軍派は惨たんたる状態である。

現在の塩見は東京拘置所にあり、赤軍派プロレタリア革命派のリーダー。この党派は連合赤軍後の総括を経て永田洋子らも加入しているもので、帝国主義と共に社会帝国主義（ソ連）とも闘わなければならないと主張する毛沢東派。

毛沢東死去の知らせに塩見は「先進的労働者諸君！　永遠に不滅な偉大な指導者、教師毛沢東主席を心ゆくまで、しのぼうではないか」と呼びかけている。

塩見は昭和十六年広島生まれ。開業医の家に生まれ、六二年に京大入学。入学後はブントの活動家として活躍、京都府学連書記長などを経て赤軍派議長に。七〇年三月に逮捕され現在拘留中。破防法（大菩薩峠）、ハイジャックなどの容疑で公判闘争を行なっている。かつての前段階武装蜂起から世界共産主義への革命の道と、現在の毛主義の間には、七年間という年月以上の大きな隔たりがある。

◆田宮高磨

フェニックス作戦と名づけた日航よど号ハイジャックの出発前に、田宮高磨は出発宣言を書きその思想的、政治的意味と決意を述べている。その主軸は、直ちに突撃することをやめ、前段階武装蜂起―世界革命戦争の主体をつくることから始めなければならず、ハイジャックはその党の武装―世界党建設の一環であり、第一歩だと位置づけている。

そして最後に、「我々は〝明日のジョー〟である」と結んでいる。政治的言語だけでは出発の高ぶりを表現しえず、当時の若者のアイドルだった〝ジョー〟に自らを擬して田宮は「連帯」を表明したのである。

大阪市立大の活動家であり、結成時から赤軍派のリーダーであった田宮は、彼を知る者の評では根っからの「ブント的人間」であったという。それはルーズで大雑把だが、人間性にあふれたというプラスの評価である。

北朝鮮に渡って以降、田宮ら九人の消息は時々面会するジャーナリストによってもたらされている。それらの報道の限りでは金日成思想に〝洗脳〟され、ボサボサ頭を七三に分け、下駄の代わりにピカピカの靴をはいているらしい。しかし、田宮の出発宣言には「断乎として帰ってくる」とあり、シンガポールで見た、アラブに行ったらしい、という噂が飛び交うのも一度や二度ではなかった。

◆重信房子

六九年に結成された共産同赤軍派は、もっともラディカルであり、世界同時革命を革命論としていたため、はじけるようにして世界各地へ散っていった。田宮高磨らは北朝鮮へ、そして重信らはアラブへ。

昨年来のヨルダン内戦で現状は不明だが、一時期のアラブ赤軍は十名～二十名のコマンドを擁していたと伝えられている。彼らは、支援ではなく、PFLPらのアラブゲリラと共闘、文字通りその一員としてシオニストと闘っている。

重信は、昭和二十年九月、東京生まれ。父の末夫は血盟団事件に関係していた右翼。彼女は高校卒業後千葉県野田市の会社に勤め、その後明大二部に入学。生協のアルバイト時代に学生運動に関わり、赤軍派結成と同時に加盟している。七一年二月、アラブへ。

七二年五月のテルアビブ空港事件、七三年七月の日航機ハイジャック・爆破事件、七四年一月、シンガポール・シェル石油精油所爆破、クエート日本大使館占拠闘争などに関わったといわれている。

最近、アラブ赤軍は従来の活動を総括し、方向を転換したと伝えられるが、定かではない。重信房子は、こうしたすべてのアラブ赤軍の動向の立役者であり、自らも自由奔放でインターナショナルな性格だという。

◆森　恒夫

共産同の内部闘争を経て、赤軍派結成（六九年八月）、「東京戦争」「大阪戦争」を経て、十一月五日には大菩薩峠で五十三名の主要活動家が根こそぎ逮捕された。赤軍派の大衆動員数は関東で五百名、関西で三百名程度だったが、この大量逮捕は組織的には打撃で、引き続きよど号ハイジャック、アラブ赤軍への出発を経るなかで、塩見議長らも逮捕された。

こうした権力の弾圧の厳しい時代に赤軍派を指導していったのが、坂東国男、酒井隆樹らであった。爆弾闘争やM作戦（資金徴発）を軸に各地を転戦し、やがて永田洋子、坂口弘らの革命左派（京浜安保共闘）と連合赤軍を結成、敗北へと進んでいく。

森は、大阪市立大の出身。入学当時は統社同の活動家だったが、やがて社学同に移り、彼に最も影響を与えたという田宮高磨に会い赤軍派に加入する。

連合赤軍は、ほとんど闘争らしい闘争をしないまま榛名山、迦葉山、妙義山を転々とし、この間に十二名を粛清。森は永田と共に七二年二月十七日に逮捕された。

逮捕後大量処刑が明らかになり、森は自己批判を書き、「殺害を心から謝罪したい」「やっと端緒につきはじめた日本革命戦争の萌芽を破壊した」ことを自己批判。七三年一月一日自殺。連合赤軍についても大量処刑についても総括、評価はまだ定まっていない。

◆永田洋子

新左翼の活動家のなかで、永田洋子は最も悪いイメージで語られる一人ではないだろうか。

右からは悪名高い連合赤軍の幹部として人非人のように扱われ、左からは十四人もの活動家を殺害し、運動全体に多大な悪影響をもたらした張本人として。

永田は昭和二十年東京生まれ。高校時代には「安保反対」などと発言することはあったが、共立薬科大学を卒業し、病院勤めをしているが、その間の活動歴は不明。

退職後、京浜安保共闘の執行委員として活動する。この組織は「反米愛国」を旗印にする中国派で、女性活動家の多いのも特徴である。

やがて京浜安保は武闘路線に走り、米大使館襲撃、真岡銃砲店襲撃などの闘争で多くの活動家を失う。永田は残留部隊を率いて連合赤軍結成、やがて破局を迎える。永田は今もなお獄中から「反米愛国」を叫んでいる。

◆梅内恒夫

彼は新左翼で初めて本格的な爆弾をつくることに成功した男であり、六十九年以来地下に潜行し、今もって行方の知れぬ稀少な、活動家の一人である。

昭和二十二年八戸市生まれ。八戸高校を経て福島県立医大に進み、六七年十一月の登録医制度反対闘争以来、共産同のメンバーとなり、赤軍派が結成されると加盟。爆弾づくりを担当する。梅内は青森市内のアパートに六九年十二月までいたことが確認されているが、このアパートは赤軍派の爆弾工場だった。

また梅内はここで、連合赤軍の青砥や植垣に、爆弾づくりを伝授している。彼らの証言によると、爆弾をつくっているときの梅内は、まったく口をきかないという。

また梅内は七二年四月に、地下より「共産同赤軍派より日帝打倒を志すすべての人々へ」というメッセージを送り、連合赤軍への批判と、窮民革命への支持を表明している。

◆滝田　修

六〇年代後半の東京における全共闘運動を、山本義隆、秋田明大などが代表するとするならば、京都を代表するのが滝田修であった。しかし、滝田はこの時、既に京大経済学部の助手になっており、その専攻領域であるドイツ革命史、なかんづくローザ・ルクセンブルク論に関する諸論文によって、一部の識者の間では知られた存在であった。しかし、京大闘争において、滝田は助手共闘の立場からラジカルに一歩踏み出して行く。もともと関西ブント系であったが、闘争過程のなかで、官憲、大学当局、民青との対決を通して、彼は「パルチザン」を形成しようと図る。

うまさをそのままお届けします
アサヒビール
ASAHI

今もって、その全貌が不明なのだが、滝田は、七〇年後半、埼玉県朝霞における自衛隊基地襲撃事件（いわゆる「赤衛軍」事件）関係者として追及され、地下生活に入る。以後、六年半にわたり、官憲の必死の捜査をまいて、ようとしてその存在をつかませない。この間、各集会にメッセージを送り、あるいは著作、通信を出してきている。おそらく、滝田こそは、あの全共闘運動の最後の総括をする人物となるであろう。京大で滝田処分問題が出るたびに、全共闘が示した闘いの意味が何であったかを、再確認せしめる運動が起っているのを見ても、そのことは明白であろう。

滝田は、一方に理論的確実さを持ち、他方に「ならず者」的感覚の「タキタ節」をもって聴衆の心をつかむすべを持った人物であり、六〇年代後半の闘争を語るにあたっては、今後とも常に、引き合いに出される人物であろう。

◆足立正生

一九三七年、五月十三日、福岡県生まれ。五九年、日本大学芸術学部映画学科に入学。六一年、学生映画祭に短篇映画「椀」を共同出品し、見事に大賞を受賞した。六三年、「鎖陰」の卒業共同制作に入るが、大学中退のため自主制作、上映となる。中退後は若松孝二プロダクションにおいて、大谷義明、出口出の名で脚本家、監督として活躍し、脚本第一作「引き裂かれた情事」（六六年）以降「天使の恍惚」（七二年）に至るまで数十本の脚本を担当した。

また同プロにおける監督作品には「堕胎」「女学生ゲリラ」「噴出祈願十五歳の売春」等々がある。

若松プロ以外での活動では大島渚作品の脚本共同執筆「連続射殺魔」の共同制作。松田政男らと『映画批評』の発刊などで、六八年の「鈴木清順問題共闘会議」への参加を契機にラジカル性を強めた。

七一年の「赤軍―PFLP・世界戦争宣言」制作上映を最後に革命の現場に出発。

◆松崎　明

動労東京地本委員長。

一般的に新左翼系の労働運動が強力なのは、国鉄、全逓などの官公労であるが、そのなかにあっても、動労といえば松崎といわれるほど、彼の実力は労働運動内部でも有名であり、奉闘になれば必ず行なわれる動労の「順法闘争」は彼の考案だともいわれている。

松崎は革マル派と親密な関係にあり、同派の副議長ともいわれており、そのために日共系と再三にわたり衝突し、日共系は別かれて全動労を結成するにいたった。

革マル派との共闘も多く、同派の「動労支援」「労学共闘」路線と歩調を合わせている。しかし、少数ながらも、中核系、解放派系、中国系などの組合員もおり、対立は根深いようだ。

◆岡本公三

七二年五月三十日、イスラエルのテルアビブ空港において、アラブ赤軍の三人の兵士が突撃、銃を発射し、爆弾を投げて多数の死傷者が出た、というニュースは、まったく突然に日本を襲った。赤軍派がアラブにいることは知っていても、敵地の国際空港へ死を覚悟して突撃するコマンドに成長していると、誰もが考えていなかったからである。

三人の内、奥平剛士、安田安之の二人はその場で戦死。生き残った一人は、元鹿児島大生、岡本公三と発表された。岡本はイスラエルの軍事法廷で裁かれ、終身刑（七二年七月）。下獄後、獄中において〝転向〟が伝えられるが、アラブにおける岡本の評価は依然として高い。ハイジャックや占拠闘争の際、ゲリラは必ず岡本公三の釈放を要求している。

岡本は昭和二十二年熊本県生まれ、六八年に鹿児島大農学部に入り、映画「赤軍・PFLP世界戦争宣言」の上映運動をきっかけにしてアラブ赤軍とコンタクトを持った。

七一年九月、岡本はアラブに渡り、パレスチナ難民キャンプで訓練をうけ、テルアビブ奇襲攻撃の隊員に選ばれる。なお兄、武は七〇年三月のよど号ハイジャックで田宮高磨らと共に北朝鮮にいる。

◆戸村一作

成田空港に反対する三里塚芝山連合空港反対同盟の委員長。多くの新左翼党派、活動家が共闘する成田闘争のリーダーとはいえ、戸村を新左翼の活動家とするのは間違いであろう。彼はあくまでも成田闘争の指導者であり、各派を現地で統合する象徴的な活動家。

明治四十二年成田市三里塚生まれ。今年で六十八歳になる。三里塚の農機具商で、同盟結成時に、つき合いの深かった農民に推されて委員長に就任した。熱心なクリスチャンであり、彫刻家でもある。

成田新空港の建設は、当初予定された富里で住民の反対が強く、住民らに何の前触れもなく、急遽三里塚に閣議決定された（六六年六月）。農民らも、その日の新聞で初めて事態を知るほどで、彼らはまず権力のこうしたやり方に対して、次に古村では先祖伝来の土地を、入植地では荒地を開墾してようやく落着きの見えてきた土地を、一片の「内定」でとりあげられることへの怒りで、反対同盟を結成する。

反対闘争は当初、自民党から日共まで含めた幅広いものだったが、保守派に続き日共が脱落。六八年に全学連（三派系）が共闘し、以後各党派は緊密な共闘関係にある。

委員長就任について戸村は「とにかく農民の中に入って、ともに生きる道以外に道はない。必ずそこには、闘いの展望があるはずだ」と書いている（小説三里塚）。彼が選んだ道が間違いでなかったことは、その後の十年余の闘争が証明しているようだ。

◆小西　誠

元自衛隊三曹。六九年、全共闘運動

"天下の野村"を創った男――野村徳七の炎の人生を描く
鷲
まつしぐら
梅林貴久生著
四六判上製・980円
●絶賛発売中！
株は俺の命や！
天性の度胸と驚くべき先見力で相場街道を鷲ら。二十代にして巨富を築き、証券界を席捲した一代の風雲児―野村證券の祖―二代目徳七の堂々たる若き日――。
流動

を中心とした叛乱が社会的規模でひろがるや、自衛隊は、盛んに治安訓練を行なった。

これに対して、小西三曹は、ビラ、ステッカー、アジビラなどを自衛隊のなかに配り抵抗する。これら「アンチ・安保」のアジビラのなかには、例えば、六九年十月十五日発行「我々の敵は誰か、我々の友は誰か」にみるごとく、全自衛隊革命的共産主義者同盟の文字がみえている。

自衛隊首脳部の動揺は、想像にあまりある。自衛隊は、直ちに小西三曹を罷免、告訴する。これに対して、反代々木系各派が小西叛軍闘争支援、裁判闘争支援の態勢を組む。なかんづく、この支援闘争に積極的であったのは、革共同中核派であった。

小西自身の述懐によると、彼は中学を出てすぐ少年自衛官に志願し、入隊したとのことである。しかし、隊員教育の反共主義、あるいは上官の態度に疑問をいだき、しだいに自衛隊の存在そのものに疑いの目を持つようになってきたという。彼自身は、日雇い、出稼ぎ農家の出といい、自分自身がいかに意志力の弱い人間であるか、ということを再三にわたって述べている。おそらく、小西元三曹は、極めてナイーヴな青年であるのだろうし、はっきり中核派の立場というより、かつての二・二六事件に決起した下士官がそうであったように、もっとドロドロした民衆の怨念を代弁する立場の青年なのであろう。

◆荒　岱介

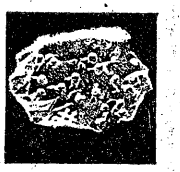
筆名、日向翔、早大法学部中退。解放派の大口昭彦とはほぼ同期であり、赤軍派の花園紀男とは早大ブント時代の盟友である。革マル派全盛時代の早大と中大社学同が強力な力をもっていた東京のブント内の力関係のなかにあって、彼は主に社学同全国委機関誌「理論戦線」で理論活動を行なった。のちに、一向過渡期世界論（塩見孝也）に対して、日向過渡期世界論を対置して、「世界同時革命」か「世界―一国同時革命」かへと激しい論戦を展開していった。

六九年から七〇年のブント分裂に際して独自の方向をとり、戦旗（日向）派結成に動き、リーダーとなる。

著書に『過渡期世界論』『人民の戦旗かかげて』がある。

（順不同）

主要活動家の経歴とプロフィル



◆**安東仁兵衛**…統一社会主義同盟書記長。日共を除名された。フロントの理論的指導者。

◆**いいだ・もも**…共産主義労働者党書記長、プロ学同の理論的支柱、新日文会員。東大法卒。

◆**今井澄**…ML派の指導者。SFL、東大全共闘でも中心的活動家。東大大学院博士課程。

◆**柏崎千枝子**…〝駒馬のジャンヌ・ダルク〟〝ゲバルト・ローザ〟の異名をもつ東大全共闘の女性活動家。東大大学院博士課程。

◆**香山健一**…全学連委員長、分派活動で日共を除名された。

◆**清水丈夫**…中核派の理論家。六〇年安保時の全学連書記長。

◆**陶山健一**…全学連主流派を指導、のち革共同へ。岸本健一のペンネームをもつ。

◆**中村丈夫**…イタリア問題専門家。社会主義労働者同盟の指導者。

◆**水戸巌**…救援連絡センター事務局長。原子物理学者。

◆**成島忠夫**…三派系全学連副委員長。共産主義学生戦線のリーダーとして活躍。

◆**根本仁**…全学連委員長。モスクワの赤の広場でソ連の核実験に抗議デモ、ビラまきをした。

◆**森田実**…安保ブントの指導者で、全学連組織部長、共闘部長。

◆**森茂**…革マル派書記長。ブント解体後、戦旗派から革共同に移った。

◆**最首悟**…東大助手、東大闘争では、山本義隆らと共に指導的役割を果たす。

◆**富村順一**…東京タワー占拠によって、日本の沖縄支配を告発。

◆**葉山岳夫**…六〇年当時のブント指導者。後、弁護士となり、新左翼裁判支援に活躍。

（順不同）

流動

●時代をはみ出して突っ走った近代日本の先駆者たち。
その異端の世界と強烈な生きざまを描く。

木本至著

にっぽん先駆者物語

奇人・怪人・超人のすすめ

四六判上製本・980円

●この本に収められている23人のハミダシ人間――

葛飾北斎
華岡青洲
下岡蓮杖
大蘇芳年
新島襄
森有礼
村山竜平
山室軍平
黒岩涙香
宮武外骨
南方熊楠
明石元二郎
島崎藤村
桃中軒雲右衛門
常陸山谷右衛門
マキノ省三
三浦環
竹久夢二
御舟千鶴子
平塚雷鳥
松井須磨子
沢田正二郎
江戸川乱歩

昭和五十二年八月一日発行（毎月一回一日発行）
昭和四十四年十二月二日第三種郵便物認可

流動 八月号（第九巻 八号） 定価三五〇円（送料四十五円）

National

電池式だから 手軽です

薬剤散布に便利な電池式噴霧器が3タイプそろいました。

両手が使える肩かけベルト付きの〈4ℓ形〉
● ネオハイトップ6個で約40ℓ（タンク10杯分）も噴霧できます。● 簡単に注液できる4ℓ入りタンク ● ノズル部0.5m、ホース部1.2mのロングノズル。**新製品** BH-552
¥8,500（乾電池別）

● ノズルの先をまわせば噴霧と噴射に
噴霧で広範囲に　噴射で集中的に

手さげ式〈2ℓ形〉標準タイプ
● ネオハイトップ4個で約20ℓ（タンク10杯分）も噴霧できます。● 便利なロングノズル付き。BH-551
¥6,500
（乾電池別）

ご家庭の13ℓバケツで大量に散布 ● ネオハイトップ6個で約40ℓの噴霧 ● 4mホースのロングノズル（手もとコック付き）**新製品**
BH-553 **¥8,500**
（バケツ・乾電池別）

● お求めはナショナルのお店又は、園芸店でどうぞ。　● 3機種とも、薬の分量をはかるのに便利なスポイト付き。　● ネオハイトップをお使いください。

ナショナル 電池式噴霧器
松下電器

雑誌コード　9353－8